資料

（平成三年十一月）

第三十六回「合宿教室」（厚木）感想文集

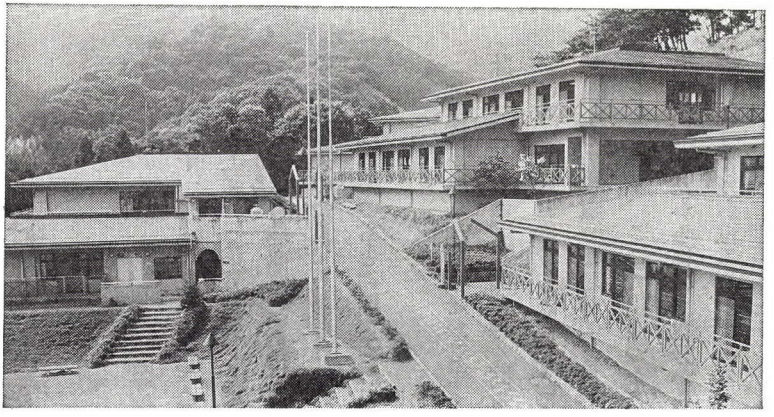
――日本人としての自覚をもとめて――

社団法人　国民文化研究会

—“合宿教室”36年の歩み—

回数	年度	開催地	参加人員	主要講師
1	昭和31年	霧島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	〃 35年	雲仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	〃 63年	島原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
累計・参加人員			10,448名	

第三十六回〝合宿教室（厚木）〟全参加者の感想文と和歌詠草



とき 平成三年八月七日（水）から十一日（日）まで四泊五日間

ところ 神奈川県・「厚木市立七沢自然教室」

参加総数 二四四名

目次

〝はしがき〟に代へて……理事長・小田村寅二郎……2

大学別参加者数・その他の人数の内訳……5

〝合宿教室〟の日程表（四泊五日）……6

第36回〝合宿教室〟のあらまし……7

感想文と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員……31

短歌詠草……合宿中の第一回目の創作作品……参加者全員……106

あとがき……135

カメラ・レポート36枚（33ページから103ページの左頁に掲載）

〝はしがき〟に代へて

小田村寅二郎
（本会理事長・元亜細亜大学教授）

昭和三十一年（一九五六年）の本会創立以来、一年も欠かすことなく続けて来たこの〝合宿教室〟は、本年は第三十六回目を八月上旬の四泊五日間、この〝合宿教室〟としては九州地区以外での初めての開催地として、神奈川県・厚木市の「市立・七沢自然教室」を選び開催しました。この場所は、丹沢連山の東麓に建てられた立派な研修宿泊施設であり、本会の創立以来の会員でもあられる厚木市長・足立原茂徳さんの肝入りで作られたものである上に、この施設の職員の方々の献身的な御協力のもとに開催されたこともあつて、この〝合宿教室〟独自の日程の運びにも、きはめて好都合でした。

全国津々浦々から馳せ参じてくださつた参加者諸君（四十八大学から、男女学生一二三名、社会人及び関係者一一六名、計二三九名）は、旅装を解く間もなく開会式（八月七日午後二時）に列席し、開会宣言、国歌斉唱二回、ついで、祖国のために尊い生命を捧げられた先人の御霊に一分間の黙禱を捧げたあと、参加学生を代表して、リーダー学生の一人、亜細亜大学四年の佐藤順一郎君が「合宿ではいろいろな日程が組まれてゐますが、その中味を本当に作つていくのは僕たちです。本音を語り合ひ、ここで出会つた人たちとの縁を大切にして行きませう。」と呼びかけたのに対して、全参加者は〝この合宿教室に参加したからには、自分から進んで飛び込んでいかなくては〟との気持にさそはれていつたやうでした。場所もよし、空気は殊のほか澄み切つてゐる丹沢の山麓で、ひぐらしの鳴く音を耳にしながら、今年の合宿教室はこのやうにしてスタートいたしました。

お招き申し上げた講師の、杏林大学教授・田久保忠衛先生は「激動する国際情勢と日本」と題してお心こもる御講義を、また質疑に対する御応答を、長時間にわたつてしてくださいました。また、主催者側の諸講師の講義をはじめ、登壇者諸氏

の発言に対し、それらを一言も聞き洩らすまじ、との思ひで、熱心に聴き入つてゐた参加者たちでしたので、場内には、ピーンと張りつめた緊張感がみなぎり、この〝合宿教室〟ならではの、真摯な求道の場が、日を追ふにしたがつてくりひろげられていくことになり、まことに嬉しい次第でした。

さて、この「合宿教室」では、「じぶん・新発見」とのキャッチフレーズのもとに、〝学問〟と〝人生〟と〝祖国日本〟と〝世界の平和〟といふ四つの命題を今年も掲げました。いまの日本の大学生活では、これら四つの命題に何らの統一性・関連性が見られず、バラバラな教説が無反省に錯綜してゐる気配が多いため、この合宿教室では、そのことへの指摘と反省の上に立つて、この四つの命題を何とかして各自の心中に統一的に把握してもらはうと、参加者諸君に強く期待しました。はじめのうちは、いろいろな抵抗や反感を持たれた方もをられました。しかし日程が進むにつれて、濃淡の差こそあれ、ごく一部少数の学生を除き、ほとんどの参加者諸君は今日の大学が〝心を鍛へることの重要性〟を忘れてゐること、また〝知識偏重〟と〝学問の分化〟が精神の混迷をもたらしてゐることなどについて、これらの欠陥を欠陥として認識し直すと共に、それらへの対処には、結局一人びとりが、学問の名に値する真の綜合的な学問を求めて学生生活を確立するのでなければならないこと、さうしなければ、これからの日本の発展に寄与することにはならない、といふ重要事を把らへてくださつた、と思はれました。このことは、主催者として何よりも頼もしく思つたことでした。特に今回も、日本の伝統と文化のすばらしさが、諸講師、特に若い諸講師によつて具体的に説かれたことは、参加者一同の心に沁み入る成果であつた、と回想されます。それは同時に、三分の一世紀を越えて三十六年間もつづいたこの「合宿教室」が、「創始者層」から「後続者層」に継承されつつあることを、確認出来た喜びにも連なることでした。

一方、大学生諸君にとつて、「友情、友との付き合ひ」の問題は、大切な関心事でありますので、「上っつらだけの遊び友だちではなく、真に心を許し合ふことの出来る友だちを持ちたい」といふ願望に対して、この「合宿教室」では、「こちら側がどういふ心掛けで自分自身の心を整へて相手に相対していけば、真に心を許し合へる友と出会ふことができるか、それ

にはどう努力すべきか」についても、各班ごとの、胸襟を開いての「班別討論」、「輪読」、各自が詠んだ和歌についての「相互批評」などを通じて、真の友だち付き合ひについての、具体的な経験を積んでくれたことは、各自の大きな収穫となつたと思はれます。また合せて、「読む書物の選び方の如何が、自分の人生にとってどんなに重要なかかはりを持つか」また、「読書に際して〝輪読〟といふ勉強の仕方が、独りで読むのに比して、どんなに深い意味合ひを持つか」についても、真剣に考へてもらへたことと思ひます。

なほ、ここに編した『この感想文集』は、全参加者が〝解散の問ぎは〟に走り書きしてくださつたものです。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかつたことは、なにとぞご容赦いただきたいと存じます。「この文集全体の編集」は、国家公務員の山根清さん、神奈川県立・津久井高校教諭の大日方学さん、日本油脂（株）技師の上村栄章さん、アポロサービス（株）社員の金子光彦さん、オリエントリース（株）の木村彰男さん、タマポリ（株）社員の吉川理夫さん、早大・大学院生の八木秀次さん、東洋精密プレス工業（株）社員の阿川信次さん、船橋市立・法典小学校教諭の竹内孝彦さん、ならびに在京会員多数の協力によつて進められました。また「〝合宿教室〟のあらまし」については、在京の若手会員諸氏がまとめて下さり、巻末の第一回目の「短歌詠草」については、日本興業銀行行員の小柳志乃夫さんが選歌してくださいました。

今夏の「合宿教室」に参加された方々、またこの文集をお読みいただく方々にお願ひ申し上げたいことは、どうか全ページを通して御判読いただきたい、といふことであります。

また、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に対しまして、会員一同に代り、心から厚く御礼を申し上げます。

来年（**平成四年**）の合宿教室（第三十七回）は、**八月八日（土）～十二日（水）**の日程（四泊五日）で、熊本県・阿蘇の「阿蘇の司（つかさ）」で行ふことに決定してをり、その合宿運営委員長には、熊本市在の折田豊（とよ）生（お）さんを煩はすことになりました。

「第36回合宿教室」記念撮影（参加者244名）於・厚木市立「七沢自然教室」

参加者

（学生班　四八大学）（洋数字は参加学生数）

拓殖大29　早稲田大15　亜細亜大10　防衛大6
九州大5　福岡大5　金沢工業大3　九州女子大3
湘北短大3　東京大2　金沢大2　長崎大2
中村学園大2　北海道工業大1　千葉大1
東京水産大1　帝京大1　東京農工大1　立正大1
玉川大1　明治大1　中央大1　日本大1
関東学院大1　実践女子大1　武蔵野美術大短期1
高千穂商科大1　富山大1　福井工業大1
富山医科薬科大1　金沢経済大1　京都産業大1
京都橘女子大1　帝京平成短大1　大阪電気通信大1
大阪経済法科大1　岡山商科大1　岡山理科大1
ノートルダム清心女子大1　広島大1
国立呉病院付属リハビリテーション学院1　山口大1
山口県立衛生看護学院1　北九州大1　九州女子短大1
佐賀大1　熊本大1　鹿児島大1

計　一二三名（うち女子三二名）

（社会人・教員班）会社員・公務員・教員など
計　二九名

（招聘講師）一名　**（来賓）**五名

（国民文化研究会）七九名　**（事務局）**六名　**（写真）**一名

総計　二四四名

神奈川県「厚木市立・七沢自然教室」にて

第36回"全国学生青年合宿教室"日程表——平成3年8月 7日(水)・11日(日) 4泊5日間

SUMMER SEMINAR IN NANASAWA（1991年）

主催 社団法人・国民文化研究会 / 大学教官有志協議会

	8月7日（水）（第1日）	8月8日（木）（第2日）	8月9日（金）（第3日）	8月10日（土）（第4日）	8月11日（日）（第5日）	
6:30	（注意）↓ 学生参加者は、一班八名前後の班編成です。会場入口受付で、所属する班を確認して下さい。	（起床）（洗面・清掃）	（起床）（洗面・清掃）	（起床）（洗面・清掃）	（起床）（洗面・清掃）	6:30
7:00		（7:00）朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）朝食	（7:00）朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）朝食	（7:00）朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）朝食	（7:00）朝の集ひ（国旗掲揚と国歌斉唱・体操）朝食	7:00
8:00			（8:00）短歌創作導入講義 福岡県立須恵高校教諭 那須三元氏		（8:20）「合宿を勧めて」国民文化研究会 小田村寅二郎・上村和男	8:20
8:30		（8:30）（講義）神奈川県立金井高校教頭 国武忠彦氏	（9:00）（移動）	（8:30）（講義）神奈川県立湘南高校教諭 亜細亜大学講師 山内健生氏	（9:00）参加者による（全体感想自由発表）	9:00
9:30			（9:30）ハイキング 森林公園 昼食 短歌創作			
10:00		（10:00）（移動）		（10:00）（移動）	（10:15）	
10:30		（10:30）（班別討論）		（10:30）（班別討論）	（10:30）感想文執筆及び第2回短歌創作	10:30 10:45
12:00		（12:00）昼食	（12:00）全員写真撮影	（12:00）昼食	（12:00）（清掃）	
			（12:30）（移動）		（12:30）	12:30
			（12:45）（講義）杏林大学教授 田久保忠衛先生	（1:00）創作短歌全体批評 山口県立高森高校教諭 宝辺矢太郎氏	（12:45）閉会式（このあと昼食）（解散）	12:45 1:30
2:00		（2:00）		（2:00）（移動）	2:00	
2:30	（2:30）開会式・合宿趣旨説明・諸注意伝達	（班別輪読）	（2:20）（2:30）（質疑応答）田久保忠衛先生	（2:30）（班別短歌相互批評）	2:30	
3:30	（3:30）（移動）	（3:30）	（移動）（3:30）			
4:00	（4:00）（班別自己紹介）	（班別討論）（4:30）（所感執筆）	（班別討論）			
5:00	（5:00）夕食 入浴 散歩	（5:00）夕食 入浴 散歩	（5:00）夕食 入浴 散歩	（5:30）夕食 入浴 散歩	5:30	
7:30	（7:30）（合宿導入講義）アサヒビール飲料㈱取締役 坂東一男氏	（7:30）「教育体験を語る」福岡県立新宮高校教諭 小野吉宣氏	（7:30）（講話）富山大学教授 倉橋敬先生（慰霊祭の説明）日比生哲也氏	（8:00）（講話）国民文化研究会常務理事 長内俊平先生	8:00	
8:30	（8:30）（移動）	（8:10）（移動）（8:30）	（8:20）（8:30）			
9:00	（9:00）（班別討論）	（班別討論）（班別輪読）	慰霊祭執行	（9:00）（移動）	9:00	
			（9:30）（班別懇談）	（9:30）（夜の集ひ）	9:30	
10:00	（10:00）就床	（10:00）就床	（10:00）就床			
10:30	（10:30）消灯	（10:30）消灯	（10:30）消灯	（10:30）消灯	10:30	

第36回〝合宿教室〟のあらまし

第一日

（八月七日・水曜日）

平成三年八月、全国各地から大学・職場の学生・青年諸君が神奈川県の丹沢山東麓にある「厚木市立七沢自然教室」へ暑中遠路はるばると集まつて来た。既往三十五回の合宿教室は九州各地でこれまで開催されてきたものであるが、今回初めて関東地区に開催地が移つたのである。「友よと呼べば友は来たりぬ！」と会場玄関に揚げられた横断幕のこの言葉は、参加者の心にすがすがしい気持ちと合宿に対する期待を抱かせた。

開会式

参加者が一堂に会し、緊張の高まる講義室に、早稲田大学四年生の山下拡男君の「開会宣言」が響き渡り、「国歌斉唱」に続いて《戦時、平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命を捧げられたすべての祖先の御霊》に対し、一分間の黙禱を捧げた。続いて主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生は「この合宿では一人一人が一人の自立した人間として平等に付き合つてゆきたい」と先づ語られ、「相手の喜び、悲しみ、苦しみが分かる様な心の交流をはかることこそが教育の真の目的であり、この合宿でそれを実現して戴きたい」と参加者にこの合宿にのぞむ姿勢を語られた。その後来賓を代表して厚木市長足立原茂徳氏が「人と人との触れ合ひ、心の交流が出来る教育施設としてこの七沢自然教室を建設したが、この合宿教室の場として当施設が使はれることを大変喜んでをります」と挨拶された。次いで、参加学生を代表して亜細亜大学四年生の佐藤順一郎君が、「この合宿で共に学びあへる

といふ不思議な縁を戴いたのでこれを大切に心を働かせながら学んでゆきませう」と参加者に強く呼びかけた。

続くオリエンテーションでは、本合宿教室の運営委員長の今林賢郁氏（新日本製鉄㈱勤務・49歳）が登壇され「人生とか、社会とか、学問とかについて本気で語り合ひ、単なる知り合ひで終らない友人を作つて下さい」と参加者全員に強く訴へられた。

続いて、合宿細部にわたる注意事項が指揮班長大日方学氏（神奈川県立津久井高校教諭・28歳）によつて伝へられた。この後、直ちに参加者は各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶり等を含めた「自己紹介」を行ひ、合宿教室が開始されたのであつた。

合宿導入講義　「楽しき哉！　敷島の道」

アサヒビール飲料株式会社取締役営業部長　坂　東　一　男氏

合宿導入講義は、講師からの〝こんばんは〟といふ大変元気な挨拶を戴いての開始となつた。氏は初めに、「通ひ合ふ言葉を話しながら生きていく事は非常に楽しいといふ意味を込めて『楽しき哉！　敷島の道』といふ演題を付けました」と語られた。そしてこの合宿で学んだものの中で氏の生活に一番根づいていつたものとして明治天皇の御製「おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも」を紹介され、これは人の心の素直さをそのまま表しなさいといふお歌ではないかと述べられ、私達に歌をつくる心構へと共に人生の指針を示されたのであつた。

次に氏は、入社間も無い頃ビール一本を売れば酒税が国家に入るのだといふ気持で販売に頑張つてをられた折に作つた歌として「もう一軒もう一軒と汗をふき歩きまはるか新米担当我は」といふ歌を紹介され「自分の会社生活を三十一文字にならべてみては、俺はお国の為に役立つてゐると思ひ励んでゐたわけです」と語られた。さらにさ

ういふ時におまへの職業は天職だぞといふ天の声がきこえてきたと言はれ、土井晩翠の「酒といふ文字をみてさへ嬉しきに飲めといふ人神か仏か」いふ歌を読み上げられ「私はこんなに世の中でお酒を喜んでくれる人がゐるのかと知りました。この歌は一生忘れません」と笑みをたたへながら語られた。

次には、氏の根幹にあつて忘れられない歌として「ますらをの かなしき命つみかさねつみかさねまもる 大和島根を」「心しる友とかたれば心などみながるるなみだとどめかねつも」の二首の歌を氏は朗々と読み上げられた。そして『ますらをの』の歌については「日本の伝統を受継がうといふ男の悲劇的な生命を積み重ねてきてゐるのがこの素晴らしい日本なのです」と言はれ、『心しる』の歌は「涙が止まらないといふやうな感動を是非とも経験したいと思はずにはゐられない歌ではないか」と強い調子で語られた。

続けて氏は、この世に生まれ出た子供が一番初めに付き合ふのは母親であり、その母親を本当に信頼するといふ所から付き合ひはスタートしてゐると述べられた。そして〝返事〟を例にとられ、音だけの声を発するのでなく心のこもつた言葉を発していく事により心は通ひ合つていくのですと語られた。

そして氏は人生の折にふれて作つた歌（幼稚園学芸会の折、御父上逝去の折、新潟支店長拝命の折）を紹介された後、明治天皇の御製を読み上げられた。それは「つくろはむことまだしらぬうなゐ子のもとの心のうせずもあらなむ」といふ御製で、かまへるといふ事をまだ知らない子供の心を無くさずにありたいと述べられた。

最後に氏は、「付き合ふとは相手の心をおもんばかる事であり、相手の立場に立つてその人がどう考へてゐるのかを考へるのが、敷島の道なんです」と語られ、講義を終へられた。

講義の後、全参加者は各室に戻り、**班別討論**に入つた。講師の訴へむとされた事はどのやうなことか、各々がどこに感銘を覚えたかを中心に討論が進められた。

尚、この班別討論は各講義の後に行はれ、お互ひが心に湧き上がる思ひを率直に語り合はうと努めながら討論を行つた。最初は自

らの思ひをなかなか言葉にできないもどかしさを感じてゐたが、回を重ねる度に熱気を帯び、時には反発し合ひ、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流は深められていった。

第二日

（八月八日・木曜日）

合宿の日程は、毎朝六時半の起床から始まる。洗面後、参加者は、丹沢山の清々しい冷気の中を朝の集ひの会場に向ふ。「国歌斉唱並びに国旗掲揚」「ラジオ体操」「連絡事項の伝達」が行はれ、一同、今日一日を過ごす心の準備が整へられる。

講義　「聖徳太子と楠木正成」

神奈川県立金井高校教頭　国　武　忠　彦先生

先生は初めに、昭和天皇崩御の際の「（天皇について）触れない、考へないの四十余年、次代の岐路に」といふ新聞記事に触れて、天皇は真に国民統合の象徴になつてゐるのか、と問題提起された後、高校教科書をもとに天皇を中心とする古代史について解説してゆかれた。

国土統一と朝鮮出兵を同時に進めた四世紀、「倭の五王」の時代に国際的に認知された五世紀、と輝やかしい時代を経て、六世紀は一転して「大和朝廷の動揺」の時期を迎へる。継体天皇が、任那四県の割譲、磐井の反乱と失意の内に崩御された後、欽明天皇の時代には仏教の伝来を迎へて蘇我、物部の対立が激化し、五八七年、聖徳太子十四歳の時に蘇我馬子は穴穂部皇子や物部守屋を殺す。先生は「『憲法十七条』の第一条『和を以て貴しとなす』に続く『人皆党あり、亦達れる者少し』といふお言葉は

かうした聖徳太子の御経験から生れた悲しい言葉なのです」と語られた。続いて馬子による崇峻天皇弑逆とその暗殺に当つた東漢直駒の劇的な最期に触れられ、「この時、最大の権力を誇つた馬子が、何故自ら天皇にならなかつたのか、いつも不思議に思ひます」と大きな問題を提起された。

次に、聖徳太子のご政治について語られた先生は、憲法十七条の第十条を引かれ、「これは日本人の基本的な生き方を示されたものです」と指摘された。また、太子がご兄弟を新羅征討将軍に任ぜられるなど、日本外交の長年の懸案課題である任那問題に力を尽されたことを解説され、「聖徳太子は単なる平和主義者ではなかつた」と、太子が内治、外交、文化の様々な現実の国家課題に全力をもつて当たられた総合的な人格であられたことを想起された。

さらに、先生は太子のご精神を受け継がれた山背大兄王ご一家の悲劇的な最期を語られた。先生のお心には先人の思ひがまざまざと蘇つてくるのであらう。しばしば言葉を詰まらせつつ語られた。その後、太子のご精神は大化の改新として現実化し、国内統治がなされる一方、百済の救援要請に果断迅速に立ち上る潑剌とした時代を迎へるが、遂に白村江の戦ひに大敗を喫する。先生は「それぞれの天皇方が如何に多難なご生涯であられたかを考へてほしい。天皇は確固とした存在ではなかつた。この様々な危機が乗り越えられた背後に国民の努力があつたことを我々は考へる必要があります」と語られた。

最後に、テレビで話題になつてゐる楠木正成について触れられ、「正成は勝ち目のない湊川の戦ひに潔く赴いた。もつと合理的な戦ひが出来なかつたかと、皆言ふが、それでも戦前戦後を通じて一貫して正成は好かれてゐる。それは正成の愚直なまでの一貫した忠誠心に日本人誰もが心打たれるからではないでせうか」と講義を結ばれた。

講義　「教育体験を語る」

福岡県立新宮高校教諭　小　野　吉　宣氏

まづ小野氏は、氏が高校生の時、大好きだつた国語の教師が、授業を放棄してデモに参加してゐるところに居合わせ、挨拶しようとしたところ、その先生が、「シマッタ」といふ後めたさの隠つた目をされ、尊敬してゐた先生に裏切られた言ひしれない悲しみを覚えた経験を話された。

また、高校の教師になつた初めての年に、教職員のストライキのある朝、校門で教師を入れないやうに立ちはだかつてゐる他校の教師達に対して、自分は生徒を教へなければならないと敢然とした態度で対抗した事を話された。

まともなことがなされない現状の中、何とか自分なりに意志を通して、高校の時に思つた「生徒に恥づかしい顔をする様な先生には絶対になるまい」といふ思ひでやつてこられた二十年間の教師生活を語られた。

次に家庭での父親と母親の役割について、父親は、厳しく、子供から尊敬され、母親は親身になつて、子供から感謝されなければならない。二人でそれを子供に教へ合ふことが大切であると話された。そして教師は、生徒にとつて尊敬と感謝の対象になり、生活の中でこの二つを育んでゆかねばならぬことを指摘された。

その体験として登校拒否症になつたF君について語られた。卒業が近付いたある日、小野氏は優しいお母さんを悲しませるF君を許せず、腹がたつて平手打ちをしてしまつた時に、彼が涙を流しながら「最後まで頑張つていきます」と言つてくれた。卒業式の日、クラスの生徒一人一人から花を渡され、特にF君から「自分は小野先生に担任をもつてもらつたから卒業出来たんです」と皆の前で言はれ、その時嬉しくて男泣きしたことを切々と語られた。そして教卓に積まれた花を、「自分

も妻や母に見せたいのだが、皆の卒業を祝つて今、うしろに立つてゐらつしやるお父さん、お母さんにありがたうございますと言つて渡して欲しい」と生徒に語りかけられ、生徒も素直に小野氏の気持ちに応じてくれたことを話された。

この様なことを通じて、感謝といふことを教へられたのではないかと語られ、まごころを尽し、一心になることで得られる感謝の念と自信をもつて生活して欲しいと語られ、講義を結ばれた。

第三日

（八月九日・金曜日）

講義　「短歌創作の手引き」

福岡県立須恵高校教諭　那　須　三　元氏

氏は講義の冒頭「皆さんは短歌といふと古臭い、感傷的、めめしい等のイメージを持たれると思ひます」と語りかけられ、短歌創作が合宿教室の柱の一つになつてゐる理由を、「短歌は人と人の心を通はせてくれるのです」と、氏の奥さんとのエピソードを披瀝されつつ短歌を作る意義を語つてゆかれた。氏と奥さんとのエピソードでは、結婚前は短歌に関心を示されなかつた奥さんが、今合宿前に自から短歌を作つて氏を驚かせた話など、氏と奥さんとの短歌を通しての家庭内のほほゑましい光景が浮んで来て、参加者一同和やかな思ひで氏の話に聴き入つた。

次に氏は学校教育の場で行はれてゐる短歌の扱はれ方の現状について、高校で出てくる長塚節の短歌

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

を例にとり、「この歌は授業では文法的な解釈が中心で修辞の代表作の様なとり上げ方しかされてゐない」と批判された。氏はこの歌の背景として、「長塚節がこの歌を作つた時は口頭ガンに侵された時です。わづか三十三歳の若さで亡くなる節は、自分が口頭ガンで死期の迫つてゐることを婚約者に告げ、婚約者と別れました。この歌は『病院の一室にこもりける程は心に悩むことおほくいできてまなこの窪むばかりなればいまは只よそに紛らさむことを求むる外にせん術もなく、五月三十日といふに雨いたく降りてわびしかれどもおして帰郷す』といふ詞書きが付されてをり、、婚約者との別れと病気との闘ひといふ心身ともに傷ついた節が故郷に帰つた時に、お母さんが釣つてくれた青蚊帳の下で、やつと安らぎの場を得た気持ちを詠んだ歌なんです」と一首の歌にこめられた作者の思ひを偲んでゆかれ、短歌の本質と魅力について語られた。

次に氏は、短歌を創作する上での留意点を昨年の合宿参加者の短歌を参考にしながら説明してゆかれ、特に注意すべきこととして五七五七七の型にきちんと整へること、また感動の中心を見定め、具体的に表現することを指摘された。最後に『日本書紀』に出てくる速総別王（はやふさわけのみこ）や源実朝の短歌など八首を紹介され「短歌はその調べを感じると、詠んだ人の気持ちが自分の心の中に響いてくるのです」と語られ、講義を終へられた。

ハイキング

この後、全参加者は、各々バスに乗車し、楽しみにしてゐた県立七沢森林公園にハイキングへと出発した。広々とした公園で短歌創作や班員同志で写真を撮つたりして散策を楽しみ、持参したおにぎりを昼食においしく食べた。

講義　「激動する国際情勢と日本」

杏林大学教授　田久保　忠　衛先生

先生はまづ国際情勢を分析するための三つの視点について、ご自分が共同通信社の沖縄支局長からワシントン支局へと転勤されたご体験をもとにお話になられた。一つは広い視野、地球的な視野から見ること、二つにはあくまで事実に基づいて判断すること、三つには国際的な常識に基づいて判断すべきであることを挙げられた。この三つの基本的な要素を視点として最新の情報に基づく、日本を取り巻く国際情勢についてお話になられた。

はじめに、誰れもが予想だにもしなかつた東西ドイツの統一に象徴される東欧諸国の激変と共産主義体制の崩壊の原因について触れられた。それは西側の軍事面等での結束、共産主義の自壊作用、ゴルバチョフの存在等が考へられると話された。また、経済的にも政治的にも破綻したソ連の直面する問題について話され、ゴルバチョフは軍やKGBと改革派の左右から攻撃され苦しい立場に立たされるだらうこと、またロシア共和国のエリツィンが重要な鍵を握つてゐることなどを話された。今後のソ連の大きな問題としては、バルト三国などの共和国の独立の問題や民族問題などが山積し、ソ連の将来として各共和国が独立してゆるやかなつながりを保つ英連邦に似たソ連邦のやうなものが形成されて行くのが良いシナリオであるが、最も悪いシナリオとしてはソ連政治の混乱から、三千数百発の核の使用の危険があることをお話になられた。先生は推測といふことを戒められたが、その後に起つたソ連のクーデター失敗といふ政変劇を見るにつけ先生の国際情勢の分析の確かさを感じた。

このやうな米ソ対立が崩れ、冷戦終結といふことで歓迎する向きもあるが、むしろ今後は何が起こるか分らない時代、

〝ニューワールドディスオーダー〟とも言へる不安定な、こわい時代になつたとも言へると警告された。

今後の日本の安全保障の問題でも、日本は軍事力・政治力の面でも一人立ちできる体制ではなく、アメリカとの安全保障体制こそ重要であり、社会党のいふアメリカと手を組むと戦争に巻き込まれるといつた論は、現実無視の空論でしかないことが益々明白となつたことをお話になられた。

このやうな東西対決の崩れた間隙に起つた今回の湾岸戦争に対する日本の対応について触れられ、日本は誰れと誰れが何んのために戦つてゐるのか分かつてゐなかつたことを強調された。クウェートという歴とした一主権国家を侵略したイラクを国連決議に基づいて国連軍は武力行使したのである。イラクはクウェートの財貨を持ち出し、虐殺・暴行などの犯罪行為を働き、人質を多国籍軍の攻撃目標に張りつけた。これほど明白な侵略行為に対して、国連は十二の決議を行なひ、デクエアル事務総長の調停も蹴られたため、一月十五日といふ期限を定めた決議六七六号に基づき武力行使したのであり、今回の戦争は国連対イラクの戦ひであつた。日本は国連加盟国ではなかつたかと語気を強められた。それを事もあらうに婦人議員がアメリカ大使館に抗議に行くなど「交番に向かつて暴力はやめろ」といふに等しい愚行で論外であるが、これをある評論家が同じやうにイラク大使館にも抗議すべきだと言つたのには驚いた。アメリカ大使館に行つて激励し感謝するのが筋であり国際常識であると強調された。誰れも戦争などしたくはないし、家族や恋人と別れて戦地に赴くのはつらく悲しい事である。しかしながら（However）といふ思ひで若者達が戦ひに出たのではなかつたのか。

これに対し日本はどう対応したのか。難民救済すらも自衛隊派遣は憲法違反といふことでしかなかつた。このやうな状況では万一、朝鮮が統一され、何か事が起つた時、自衛隊の出動は憲法違反だから、一般人に銃を持たせ自衛隊は後方支援に回ることになる。若人達はこぞつて最も安全な自衛隊に入るやうになりはしないかと、日本の現状を痛烈に批判されご講義を締めくくられた。

講話

富山女子短期大学教授　廣　瀬　　誠先生

先生は、現在私達のゐる地が古事記の昔相模の国と呼ばれ、倭建の命が東征の折この地で欺れて野火に巻れ、草薙の剣で草を刈りながら姨倭比売から戴いた火打石で向火を放ち、賊を平げた話を先づ紹介された。又、倭建の命が現在の横須賀市の走水の海を渡られた時に大暴風雨が起き、海の神を鎮める為に后の弟橘比売の命が入水され、その際に、

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも

といふ歌を残されたことを話され、当地が深い伝承に色取られた場所であることを指摘された。

又、中世には、後醍醐天皇の建武の中興の折、大塔宮護良親王が流謫され、足利氏に暗殺された鎌倉の地もこの近くで、倭建の命と護良親王といふ二人の悲劇の主人公を偲ばれ、続けて鎌倉幕府最後の将軍であつた源実朝が詠んだ短歌

時により過ぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ給へ

の中の八大龍王が祀られている阿夫利神社のある大山は当地からも見えることを話された。さらに近代では、敗戦後の昭和二十年九月、ダグラス・マッカーサーがパイプを銜へたまま降り立つた厚木飛行場もこの近くであつたことを回顧された。

次に先生は古事記の中の神々の名前には大変美しく又立派なものが多いとして、橘のイメージを表はす弟橘比売の命と桜を表はす木の花佐久夜毗売とを挙げられ、京都御所紫宸殿の右近の橘・左近の桜に代表される様に、日本人が最も好んだ大切な名前が使はれてゐることを指摘された。さういふ立派な名前が使はれてゐる以上、例へば天照大御神を〝アマテラス〟といふ様に安易に簡略化することは慎むべきことを諭された。

先生は、さういふ古事記の神々の名前の中で、鵜葺草葺不合の命の名前だけは、唯一「不完全、未完成」の意味であることを指摘された。母君である海神の女豊玉毗売の命が懐妊され、波限に鵜の羽で産屋が作られやうとしたが、その家屋が葺きあがらぬうちに出生された皇子の名が鵜葺草葺不合の命であり、この神については全くと言つて良い程古事記には記述がなく、これで上巻神代の時代は終つてゐる。先生はこの興味深い事実に対して、「古事記を文学作品として味はつた場合、鵜葺草葺不合の命が未完全であつたが故に、次の人の世の時代があつたのです。私達の仕事にしても未完成であるが故に次の人の飛躍が期待できることと同じです」と私達参加者を励まされ、話を終へられた。

慰霊祭

日比生哲也氏（福岡県立玄界高校教諭・29歳）によつて慰霊祭の説明が行なはれた。その後夜のしじまの中、屋外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。まづお祓に代へて、故三井甲之先生の

　ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

の和歌朗詠により慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする、降神の儀が行なはれた。献饌の後、参加者一同を代表して、澤部壽孫氏が祭文を奏上、明治天皇・昭和天皇の御製を坂東一男氏が拝誦された。続いて玉串奏奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、最後に昇神の儀が行なはれ、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は終つた。左に慰霊祭に於ける祭文と拝誦された御製を記しておく。

祭文

昨年の秋世界の人々の憧憬とあまたの国民のお祝ひ申し上ぐる中に今上陛下の御即位の大典と大嘗祭は恙なくとり行はれ喜びに満ちたる新しき年を迎へし今年平成三年八月の今宵丹沢山塊大山の麓厚木七沢に集へる我等第三十六回全国

学生青年合宿教室参加の者ら朝夕に学びしこの山裾の広場を斎庭と定めまつりとこしへにみ国を守ります遠つみ祖達をはじめみ国のためにいのちを捧げ給ひてたふときみ国を守りましもろもろのはらから達のみたまを招ぎまつりてみ祭り仕へまつらむとす

東欧に中東に動乱おこり混沌たる様相を呈せる世界において我が国の国際的地位いよいよたかまりゆけどもいにしへには聖徳太子近くには明治天皇間近には先つ帝昭和天皇と未曾有の国難の時代に出現せさせ給ひご一身をなげうち給ひてみ国を守りましすめらみことをはじめとする御代御代のすめらみことまた御代御代のすめらみことに仕へ奉りしみ祖達のたふときまごころをともすれば忘れゆく世のさまを憂ひ驚きかへりみしめられつつ御講義に耳を傾け大御歌あるいは十七条憲法を心に味はひ時を惜しみては初めて会ひし友と心を開きて語り合ひわれらが日本の行くべき道をさだかに見定めんと心を合せてこの集ひを過ごし来れるさまを畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひてみ国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り澤部壽孫謹み敬ひ恐み恐みも白す

平成三年八月九日

明治天皇御製

をりにふれて
国の為いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ

をりにふれて
年へなば国のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり

をりにふれて
よとともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

子

すすみゆく世に生れたるうなゐにも昔のことは教へおかなむ

日

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきは心なりけり

海

仇波のしづまりはてて四方のうみのどかならなむ世をいのるかな

寄夏草述懐

国のため民の為には夏草のことしげくともつとめざらめや

昭和天皇御製

千鳥が淵戦没者墓苑

国のため命ささげし人々のことを思へば胸せまりくる

引揚者に対して

国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

九州地方視察

高原にみやまきりしま美しくむらがり咲きて小鳥とぶなり

平成三年八月九日

謹撰　坂東一男

第四日　（八月十日・土曜日）

講義　「戦後思想からの覚醒を！」
――より人間らしく生きるために――

神奈川県立湘南高校教諭・亜細亜大学非常勤講師　山内健生氏

氏はまづ、現在の日本に於て非常に気になることとして「日の丸」「君が代」の問題を取上げられ、現代の思想の特徴として「『日の丸』『君が代』は軍国主義であるとする、まるで脳死状態の脳から出てきた発想がある」と指摘された。そして、この発想を生み出してゐるものに新聞の情報操作があるとされ、朝日新聞の「日の丸・君が代と文部省」といふ社説を検証されていつた。その中で氏は「朝日新聞は国旗・国歌の重要性は認めるが日の丸掲揚・君が代斉唱の義務化に反対だと言ふ。反対の主な理由は、戦争につながるからと言ふが、戦時中報道機関の先頭に立ち最も戦争に関与したのは朝日新聞である。その朝日新聞が、戦争への無関係を装つて、平和の監視人としての立場を守り、世の中に一つの考へる方向を生み出してゐる」とその欺瞞性を訴へられた。そして「敗戦の後遺症から様々に論議されるが、『日の丸』『君が代』は戦争の前から使はれてゐた、まさに『日本の旗』であり『日本の歌』である」と強調され、「日の丸」「君が代」の歴史とそれが表象するものを懇切に説明してゆかれた。

次に氏は「『憲法十七条』から『新日本建設に関する詔書』まで」と題され、聖徳太子の「憲法十七条」の精神がいかに日本の歴史を貫いてゐるかを語つてゆかれた。その中でも特に、明治維新のときに出された「五箇条の御誓文」について、著

名な仏教学者である花山信勝氏の言葉を引用され「『五箇条の御誓文』は『憲法十七条』の精神の復活である」と語られた。そして更に重要な事として、昭和二十一年の正月に出された「新日本建設に関する詔書」について「この冒頭には、昭和天皇の御意志で『五箇条の御誓文』が掲げられてゐる。『憲法十七条』は日本が戦争に敗れて再出発するときにも確認されたのだ」と日本の歴史の連綿性を強調された。そして聖徳太子信仰の具体的な表れが一万円札の聖徳太子像であつたことを指摘され「お札の太子像を見たとき、国民のほとんどは古代にはかういふりつぱな人がゐたのだと感じてゐた。それが日本の歴史に対する信頼感を育んで来た」と語られた。

次に氏は本論の「戦後思想からの覚醒を！」に話を進められ〝戦後思想〟を「拝外的な対外的無警戒と外国からの影響（情報操作）とが相乗積となつてわが国民の頭と心を蝕んでゐる刹那的唯物的な物の見方や感じ方」と定義された。そして今日の教科書・マスコミで使用されてゐる戦後思想の基本的な用語として「太平洋戦争の敗北」「無条件の降伏」「言論の自由の保障」「天皇の神格否定」「平和憲法の誕生」の五つを挙げられ、その一つ一つについて説明をされてゆかれた。その中でも特に「太平洋戦争の敗北」といふ言葉について「『太平洋戦争』とはアメリカ側の言葉であり、日本は負けるべくして負けた不義の戦ひをしたことになる。『大東亜戦争』といふ言葉には、敗北は残念なことであり、復興をしなければならないといふ気持ちが込められる。〝復興〟とは、先人の志操を受け継ぎ、亡くなつた人達の慰霊をすることなのだ」と語られ私達がより人間らしく生きるためには戦後思想を克服し、過去との精神的なつながりを持つことが非常に重要であることを、訴へられた。

最後に氏は、弘法大師（空海）の『綜芸種智院式』から「一味にして美膳を作し、片音にして妙曲を調ぶる者は未だあらざる也」といふ言葉を「贈る言葉」とされ「これは綜芸種智院の建学の精神として総合的な学問を目指すことを表した言葉です。この弘法大師の言葉に勇気づけられて、視野を広く持ち、大いに学んで戴きたい」と語られ、御講義を終へられた。

創作和歌全体批評

山口県立高森高校教諭　宝　辺　矢太郎氏

氏は短歌相互批評について「自分で作つて人に聞いてもらふのが、僕らが歌を作つていく上での練磨になるのです。字の間違ひや仮名遣ひを直し、その人の表現を生かした上で、色々智慧を出し合つて歌を練つていつて欲しい。自分は歌が下手だといふことを認識した方がいい。そして、班の友達にその歌の情況を一所懸命に述べて欲しい。自分のこだはりを離れた時に廣やかな世界につながつていくのです」と語られた。

続いて、歌稿の参加者の歌を二十首ほど取り挙げられ、「一首を一続きの文章にすること」「説明に陥らず、具体的な情況が伝はるやうに詠むこと」「ぴりりとした正しい文語表現にすること」を指摘されながら、ユーモアを交へ推敲されていつた。講義は時に爆笑に包まれながらも、参加者は、歌の調べを整へていただいた後の爽やかな心持ちを味はつた。

最後に、氏は、白井傳先生、廣瀬誠先生の歌を朗々と読み上げられた。洗練された歌の調べの美しさに心打たれた一時であつた。そして「お互ひの気持ちを推し量りつつ質問してあげて下さい。そして、大いに発言し合つて下さい」と結ばれ講義を終へられた。

講話　「若き友らへ語りかける言葉―今私達の最も心すべきこと―」

国民文化研究会常務理事・事務局長　長　内　俊　平先生

先生は本居宣長の「うひやまふみ」より、「言と事と心と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて、たとへば心のかし

こき人はいふ言のさまも、なす事も、それに応じてかしこく、心のつたなき人は、いふ言のさまも、なすわざのさまも、それに応じてつたなきもの也」を紹介され、この言葉を故・桑原暁一先生は「美しいものは美しい心から生まれる」と解されたのです、と語られ、つまり「世の中の有様は人の心を映してゐるのです」と、豊かな心に恵まれた体験を話された。そして、いづれも先生の故郷青森を訪ねられたときの昭和天皇御製「弘前の秋はゆたけしりんごの実小山田の園をあかくいろどる」（昭和52年）「さんしゆゆの花を見ながら公魚（わかさぎ）と菜の花漬を昼にたうべぬ」（昭和57年）を紹介され、質素ななかに豊かな心が感ぜられるでせうと語られ、聖徳太子の「少欲知足にして世法を捨てず」（維摩経義疏菩薩行品）と黒上正一郎先生の「少欲知足とは分に過ぎざるを言ふ」の御言葉を紹介された。物はあふれ、心はすさんでゐる現代の有様を何とかしなければといふ先生の痛感がひしひしと伝はつてきた。

つぎに今流行してゐる「自然保護」「環境保護」を訴へてゐる人の心は、自分の生死にかかはらぬところで行はれてゐることを指摘され、先生の奥様が故郷に帰る東北新幹線の中で「草や木が緑で、空が青いといふことは有難いことですね」と語られたことによつて、「自然に抱かれてゐるのが人間でせう。その自然を保護するとは、自然に対して慎しみを失つてゐるのではないですか」と喝破された。

最後に「天皇・国家」については一人一人が全心身で感得することから、「人間の幸せ」は本当にその人が慎しみの心をとり戻すことから、また祖先からの血が流れてゐることを思ひ起こすことから始まる、と述べられて話をしめくくられた。

最後の夜の集ひ

厳しいスケジュールをこなして来た参加者も、このひとときは班や大学別に歌や寸劇などを披露し、大いに宴に興じた。各班で心尽きせぬ語らひが持たれたらしく、夜遅くまで明りの灯つてゐる部屋が多く見られた。

第五日

（八月十一日・日曜日）

合宿最終日の朝が来た。四泊五日に亘る合宿教室の日程も、あと半日を残すのみである。参加者一同は、丹沢の峰がさやかに見ゆる集ひの場所で朝の爽かな空気を胸一杯に吸ひ込み、声高らかに国歌を斉唱し、力一杯に体操を行つた。

講話　「合宿を顧みて」

国民文化研究会常務理事・㈱千代田コンサルタント
代表取締役専務　上村和男氏
国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授
小田村寅二郎先生

五日目の朝、「合宿を顧みて」と題してお二人の方が登壇された。最初に登壇された上村氏は「皆さん様々な思ひで参加されたでせうが、この五日間を振り返つてみますと、心の修練がいかに大切か、人の心がわからなければいくら知識があつても仕様がない、お互ひに信じ合ふ関係がいかに大切かを身を以て知つたのではないでせうか」と述べられ、「御両親に感謝することが人の悲しみをわかるための身近な第一歩ではないでせうか。大きなことを言つても仕方がない。ひとりひとりの小さな積み重ねが重要なのです」と語られた。続いて登壇された小田村寅二郎先生は、「今、四日前の開会式のことを思ひ出さうとすると遠い過去のことのやうに思へませんか。これは、この四日間諸君が大勢の皆さんと一緒に生活したといふことの御蔭で自分の持つてゐる頭と心の能力を最大限に発揮した精神生活をなさつたためです。諸君はこの四泊五日間で普段の生活のほぼ一ヶ月分の精神生活をなさつたのです。このやうな経験を若い時代にしたことは大きな意味があります」と述べられた後、次の二点について話してゆかれた。第一点は、キリスト教のゴッドと日本の神との違ひである。明治三年、

聖書と讃美歌の翻訳をした時、不用意にも、全智全能の神格であるゴッドを「神」と訳してしまつた。ゴッドと人間とは完全に遮断されたものである。ところが日本の神様はさうではない。明治天皇御製に「あた波をふせぎし人はみなと川神になりてぞ世を守るらむ」とあるやうに、生きてゐる人々が尊び敬ふ対象が日本の神である。以上の事実を指摘された後、先生は「本来違ふものを同じ言葉で訳したことから様々な混乱が生じてゐるのです。私達はそのやうな間違ひを明治の初めにしてしまつた。ゴッドと神とは全く質が違ふ存在であるといふことを記憶に留めて置いて下さい」と述べられた。第二は、短歌創作上の留意点として、字足らずはだめだが、字余りはよいといふことの意味についてである。先生は「人間の気持が溢れるやうになる時、三十一文字の中に納りきらなくなることがあります。つまり溢れる気持が字余りを生むのです」と述べられ、その具体例として昭和天皇の終戦時の御製「爆撃にたふれゆく民の上を思ひ戦とめけり身はいかならんとも」を紹介され、合宿教室で和歌をつくつたといふ経験を持つたことの意味を「一つの歌を詠むといふことがそんな簡単なものではないといふ感想を持たれたと思ひます」と述べられた後、「かういふ歌を詠む方はどんな方であるのかといふことがわかつてくる。天皇とはどういふ御存在なのか、直接、歌で確めるといふことが皆さんの中に芽ばえつつあるのです」と述べられた。最後に「この合宿教室では皆さんに色々なことを考へる端緒を示して来ました。あとは皆さんの生活にかかつてゐます。それから、日本の国はどこにあるのかと質問された時、日本の国は私の胸にあると思ふことが重要です。自分は日本人なのだといふ感じが息づいて来なければ何にもならないのです」と語られ、お話を終へられた。

全体感想自由発表

閉会式も間近に迫り合宿教室を通して各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となつた。参加者の胸には、どのやうな思ひが渦巻いてゐるのだらうか。参加の動機はそれぞれ違つても、この五日間寝食を共にし、友の言葉に、そして先人の言葉に心を寄せ合つた体験は、各自の心にしつかりと刻み込まれたに違ひなかつた。一人の学生が「なつかしいやうな、忘れてしまつてゐた素直な気持ちになれた。そして先祖や日本の国に素直に感謝するやうになつた」

「学校に帰つたらこの合宿で学んだことを友人に伝へたい」「相手を論破するのではなく、お互ひの素直な気持ちを語り合へたことがうれしかつた。合宿後の自分の生活がどのやうになるかで自分にとつての合宿の真価が試されるやうに思ふ」「日本人としての誇りをもつて生活していきたい」また、「将来自衛官になることについて悩んでゐたが、この合宿に参加したことにより、国を守る決意を新たにすることができた。少なくともここに集つた二百人は自分の手で守りたい」と語る防衛大学校の学生や「学生時代に参加して以来六年ぶりの参加だが、その頃は合宿の内容もよくわからず、反発もあつた。今、教職につき組合の問題で混乱する中、何かにすがるやうな思ひでこの合宿に再び参加した。そして今の自分の教員としての生活を支へてゐるのが学生時代に参加したこの合宿であることに気付いた。同時に合宿の講義が素直に受け入れられるやうになつた」と語る小学校教諭もゐた。さうしたそれぞれの胸の思ひを次々と語つてくれた。

感想文執筆

全参加者は班室に戻り、合宿感想文の執筆と第二回目の和歌創作にとりかかつた。走馬灯のやうに蘇つてくる合宿での様々の思ひがうちつけに綴られた(ここにまとめた「感想文集」はその文章と和歌を編集したものである)。感想文執筆後、五日間を共に過した各班室を清掃して閉会式に臨んだ。

閉会式

全員参加者が心を合はせ精魂を傾けて営んできたこの合宿教室も、最後の日程である閉会式を迎へた。先づ全員で国歌を斉唱した後、参加学生を代表して千葉大学四年の中富仁君が「一回りも二回りも大きくなつて、この合宿教室で出会つた友と再会できるやう、お互ひに研鑽をつんでいきませう」と挨拶した。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会副理事長・九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生が、「戦前からの古い同志である足立原市長の心のこもつた土地で、まるでふるさとに帰つたやうな気持ちで合宿を終へることができたことを皆さんとともに感謝した

いと思ひます。また、自然教室の職員の方々の本当に行き届いたお心配りにお気持ちが響くやうに感じられました」と述べられた後、「先程の全体感想自由発表の中でとりわけ心に残つたのは、皆さんが『班友の力によつて素直な気持ちになれた』と仰しやつてくれたことです」と話された。続いて「私達はある一つの主義主張を掲げて、その下についてこいといふ思想団体ではありません。私達のやつてゐることはまちがひだらけでせう。反省しなければならないこともいろいろあります。ただ、素直な気持ちになつていかうぢやないか、といふ励まし合ひだけはこの会の中心的使命であると思つてお互ひに研鑽を積んでゐるのです」と話され、江戸時代の桃園天皇の御製「神代から代々も変らで君と臣の道すなほなる国はわが国」を紹介されて、「天皇が力で引張つていくのではない、天皇の気持と国民の気持がお互ひ素直な気持で共感し合ひながらお互ひの心を心で匡し合つて長い神代からの日本の国が続いて来たといふ強い確信がこの御製に表はれてゐます」と述べられた。更に「天皇の問題といふものは決して難しい問題ではありません。君と臣との素直な道を回復していく。天皇の持つてゐらつしやる美しい心に反応する。美しい気持に触れて美しいと感ずる気持をお互ひの中に整へていくといふことではないでせうか」と述べられ、小田村寅二郎先生の触れられた終戦時の昭和天皇御製に言及されて「自分の身を投げて、自分の身はどうなつてもよいとひたすら国民のことを祈るやうに思つてゐらつしやる昭和天皇のお気持がひしひしと伝はつて来ます。ここには肉親の情としか言ひやうのない陛下のお気持があります。戦後の思想は人間の人間らしさを、美しさに反応する心を奪つたところに大きな問題があるのです。この美しいお気持を知ればどんな人にだつてわかるのです。美しいものに反応する心が学問の中心にあるのです」と語つてゆかれた。「しかしそれは一人ぢやできない。主催者である私達も一参加者として若い皆さんの心に導れながら生きてゐます。皆さんの心によつて自分の心が洗はれることを実感します。心をとり戻させて頂いたことに感謝したいと思ひます」と述べられた後、「この合宿で学んだものは知識ではありません。素直な気持になれた、そのことなのです。素直な気持になれば、色々なものが見えてくるといふことなのです」と話され、「来年はたくさんの友達を誘つて来て頂きたい」と語り閉会の挨拶を終へられた。

その後、全員で「進めこの道」を斉唱し、防衛大学校三年の濱口和久君が力強く「閉会宣言」を行ひ、四泊五日に亘る合宿教室は無事全日程を終了した。

式の後、お互ひに別れを惜みつつ、来年の再会を約して七沢の森を後にしたのであつた。

来賓

厚木市市長　足立原　茂　徳氏
原木市教育委員会教育長　中島　久　雄氏
厚木市教育委員会学校教育部長　柏木　稔氏
厚木市教育委員会学校教育部次長　難波　浩氏
厚木市立七沢自然教室参事兼所長　高橋　武　男氏

助言者の紹介

(元)日特金属工業㈱常務取締役　加納　祐　五
無職　白井　傳
千喜利青少年会館嘱託　岡村　義　一
㈱中央塩ビ製作所　代表取締役　星野　貢
㈱信陵会館　取締役　加部　隆　三
(元)法政大学人事部長　香川　亮　二
㈱宝辺商店代表取締役　寳邉　正　久
舞岡八幡宮宮司　關　正　臣
学校法人尚絅学園常務理事兼事務局長　徳永　正　巳
高千穂商科大学教授　名越　二荒之助
日本銀行監事　小田村　四　郎
㈱不動産コンサルタント代表取締役　松吉　基　順
山陽自動車学校社長　加藤　善　之
無職　関口　靖　枝

神奈川県立横浜平沼高校通信制　教諭　福田　忠　之
航空自衛隊航空教育隊生徒隊教育科　教諭　村山　寿　彦
新技術開発事業団管理部業務課長　野間口　行　正
方栄産商㈱　取締役石油営業部長　柴田　悌　輔
キューピー㈱　財務部長　山本　茂　夫
日商岩井㈱大阪エネルギー部第一部長　澤部　壽　孫
公務員　亀井　孝　之
日本ユースホステル協会開発室長　小林　光　紀
拓殖大学　外国語学部英米語学科　教授　松本　幹　男
㈱講談社　広告局次長兼広告企画部長　磯貝　保　博
㈱竹中工務店国際事業本部営業部営業課長　稲津　利比古
小田原市立富水小学校教務主任　岩越　豊　雄
富山県立富山工業高等学校　教諭　岸本　弘
三菱重工業㈱　社長室　関連会社部主務　島津　正　数
㈱ＢＢＳ金明　代表取締役　中田　一　義
東急建設㈱　東京支店建築部　審査課長　奥冨　修　一
亜細亜大学　助教授　東中野　修　道
中島法律事務所　弁護士　中島　繁　樹
神奈川県立秦野曽屋高等学校　教諭　原田　猛　雄
無職　大島　啓　子
公務員　加来　至　誠
熊本市役所　清掃部東部清掃工場技術課長　折田　豊　生

㈱講談社　校閲局校閲第三部　副部長　藤井　貢
福岡県立福岡中央高等学校教諭　占部賢志
伊佐ホームズ㈱　取締役社長　伊佐　裕
香川大学農学部園芸利用学研究室　助教授　川田和秀
熊本県立第二高等学校　教諭　白濱　裕
住友電気工業㈱　生産技術部　主査　布瀬雅義
久留米大学附設高等学校　教諭　名和長泰
福岡県立水産高等学校　教諭　菅原享二
公務員　山根　清
㈱日本インベスターズサービス　調査部　小柳志乃夫
北九州市立八幡病院放射線科技師　森田仁士
出光興産㈱店主室　庄子　修
大阪府立交野高校教諭　絹田洋一
東洋精密プレス工業㈱営業部主任　阿川信次
厚木市役所秘書部広報課主任　矢野正男
㈱日立製作所エネルギー研究所　松井哲也
福岡県立玄洋高校教諭　矢永誠二
福岡市立奈多小学校教諭　是松秀文
㈱ルーツ　寂知浩一
タマポリ㈱ラミネート営業部　吉川理夫
東京理科大学理学部教養学科講師　八木秀次
㈱不動産コンサルタント　松吉基光
無職　桐山澄子
船橋市立法典小学校教諭　竹内孝彦
日本青年協議会研修局　佐瀬竜哉
神奈川県立津久井高校定時制教諭　大日方　学
早稲田大学政経学部六年　鵜野光博
学校法人津田学園　中学校教諭　三林浩行
日本青年協議会　清水久仁子
ヤマハ音楽教室システム講師　橋本加枝

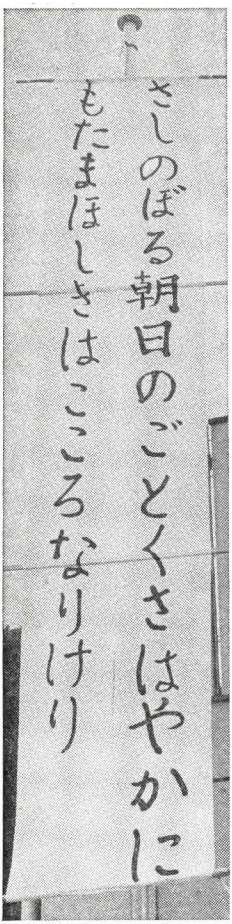
合宿運営委員　今林賢郁・折田豊生・白濱　裕
布瀬雅義・矢永誠二・八木秀次

指揮班　大日方学・藤井　貢・森田仁士
寂知浩一・吉川理夫・竹内孝彦
三林浩行

事務局　名和長泰・磯貝保博・中田一義（事務協力者）
蘇原幸枝・田籠榮一（本会職員）　神奈川県立湘南高校定時制二年　平野亜由美・神奈川県立光陵高校一年　古閑倫子・宮川玲子・吉田祝子

記録班　松吉基光

写真班　佐藤写真事務所　佐藤道明



走り書きの〝感想文集〟（各班別に集録）

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらつたものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回目の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡がお分りいただけることと思ひます。

第一班—男子学生—

多くの人の生き様に触れる事が出来た

（佐賀大学　理工　四年　白木　潤）

僕は今回の合宿教室で多くの人の生き様に触れる事が出来たのが、一番大きかつた事の様に思ふ。まづ、班のある友は真剣に国の事を考へてゐるのに、僕にはその友の心が四日目まで分からなかつた。四日目の夜の集ひが終はつた後、僕の班は夜中までずつといろいろな事を語り合つたのだが、その語らひの中で、班別討論の時には見られなかつた友の姿といふものが見えてきた。そしてその友は、この合宿に国家の事を考へる視座を求め、日本の文化には本当にすばらしいものがあるんだといふ事を確認するために参加して来たのだといふ事が分かつた。これは彼自身が言つた事ではなく、語つていくうちに自づとその様な声が聞こえて来たのだ。僕はこの友と語つて本当に良かつたと思ふ。それから、この合宿中に白井傳先生のご著書を購入した際に、先生から和歌とご署名をいただきました。先生の国を愛するまごころに触れて、お会ひできて本当に良かつたと思ひます。

胸襟を開き語れば自づからまことの友の姿見え来る
心からの思ひ述べむと友どちは苦しみつつも言葉探しぬ
自らの胸内にかかるわだかまりを友等はつひに語り出だしぬ

自分の生き方に疑問を持った

（東京大学　理Ⅰ　一年　長原巨樹）

とにかくいろいろあって整理がついていないのだが、この五日間で得られたものは大きかった。まず自分の生き方に疑問を持った。特に坂東先生と小野先生のあのひたむきな生き方を目の前に見せられると、功利的なものの考え方をしていた自分にこのままでいいのかというものを感じざるを得ない。もっとすばらしい何か別の生き方があるのではないかと思う。漠然としているが、そう感じることができたこと自体は私の糧となったであろう。それから、今までの自分は何も考えていなかったということを知った。天皇・日の丸・君が代などは無意識のうちにも考えることを避けていたのだ。それは他人事としてではなく日本人としての自分を考えることをしていなかったということだ。人間は自分との対話の中から新しい自分を見つけたときに大きく変わると言われた占部先生の話は印象的だった。様々なことを考えるきっかけを与えてくれたこの合宿に感謝したい。

七沢の緑の山にひぐらしの鳴き声響きここちよきかな
向学の新たな決意と思ひ出を胸に抱きて七沢を去る

本当の付き合いを肌で感じた

（広島大学　法　二年　福原裕二）

知育と徳育の均衡のとれた教育というものを僕は一番重要

視しているのですが、この合宿で言えば、知育は講義であり徳育は討論や食事・風呂・布団の中での班員とのふれ合いです。そういうふうに考えると、この合宿は非常に教育の真髄にせまったものであったと思えるのです。講義中に意味が分りづらくて眠るもの、討論の時小さな声で遠慮ぎみに話すもの、そういった人達が布団の中で話し合っていると熱っぽく自分の意見をしっかりと言っている。僕は「これだ！」と思いました。これが本当の人間の付き合いであり、教育だと思いました。もちろん講義は密度の濃いものでした。そういったことで僕は僕の考える教育というものを肌で五日間感じました。

日本への熱き思ひを語らるる田久保先生の拳（こぶし）の強さ
陽はおちて静まりかへる夜なれどわが班友の論は止まらず

しっかりとした考えを持ちたい

（金沢工業大学　工　三年　平野　賢）

普段、体育部で体を動かしている自分に、この日程が耐えられるだろうかという不安で合宿が始まった。講義がいくつもあったけれどほとんど今まで自分が考えてみた事もない題材のものばかりで表面的な事しか分からない。話が深く掘り下げられると眠くなるばかり。当然、班別討論では簡単な感想しか言えずにただ聞くだけであった。しかし本音で語る討論に参加しているだけでも、自分の生活や社会を見直し、自分の考えをしっかりと持つ事が大事であることに気付くこと

カメラ・レポート1

全国各地より続々と参加者が到着する。受付けで名札と資料袋を受取つてから，各自の班室へと向かふ。

が出来てよかったと思う。また、全国各地の大学の人々と知り合い親しくなれたことはとてもうれしかった。普段接している友人たちが持っていない様々な考え方や生き方を知り、自分の人生においてとても参考になったと思う。

目的も分からずに来た合宿で心豊かに友と語らふ

もっと自分自身を見つめたい

（拓殖大学　外国語　四年　古川真一）

この合宿に来て、もっと自分自身を見つめて行かなければいけないと思った。自分で自分を分かっていないと回りの事がはっきりと見えてこないし、回りの事もよく見て勉強していかないと自分自身が見えてこないのではないかと思った。今回の合宿でいくつかの感動したことがあったが、中でも班別討論中に、カメラマンの佐藤さんが「世の中に教科書はない」と言っていた言葉や、最後の討論のときに、福原君が「すべての事を疑って考えていき、その中で自分が正しいと思うことを見つけていく」と言った言葉が強く印象に残っています。

先生や友達の言葉を耳にして我の思ひはさまよふばかり
生き方をきめていくことのむづかしさ時はただただすぎゆくばかり

何事にも全力をつくしたい

（亜細亜大学　法　二年　江口文章）

この合宿に参加してみて、まず、自分は勉強不足であるなあと感じました。班別討論等で感想を聞かれたりすると、自分は何を言っていいやら分からなくなってしまうことが多く何も言えない自分が腹立たしくてしようがありませんでした。しかしながら、この合宿でいろいろな人と知り合いになれた事は僕の大学生活の中で大変有意義なことだったと確信しています。友達が僕などよりはずっと苦労をしてきていることを知り、僕自身も見習って何事にも全力をつくす態度が必要ではないかと感じました。合宿に参加してみて、普段の自分があまりにもいいかげんで、無気力で、だらだらした生活を送っているなあと感じられました。ただただ反省の四泊五日間でした。

ビール持ち顔を赤らめ己が夢友は熱心に我に語らふ

友と知り合えた喜び

（拓殖大学　外国語　一年　麻生啓史）

この合宿に来て、いざ部屋の中に入ると班員の人たちがすでに来ていて、僕は「何だかつまらなそうな人達だなあ」と思っていた。しかし、話しをしてみるとみんなとてもおもしろい人達ばかりだった。僕はその時、「この人達とならばどうにか合宿に耐えられそうだ」と感じた。そして気がついてみるともう五日目になっていた。僕はこの合宿に来て一番すばらしいと思ったのは、全く知らない人と知り合うことができたことにつきると思う。何の目的や期待を持たずに来た僕にとっては何よりの喜びであった。先生方の講義は教えられ

ることがありすぎて自分の勉強不足を実感させられた。やはり何かの目的を持ってこの合宿に来れば、必ず何かを得られると思った。

真夜中に友らとともに語り合ふこれこそまさに求めしものかな

第二班—男子学生—

国語力の低さを思い知らされた

（京都産業大学　理　二年　濱地賢太郎）

この合宿に参加して得たものは一つは勇気、もう一つは人との話し方です。勇気とは、自分の思うことを実行することです。具体的には現在タブー視されている問題、例えば日の丸について議論すること、自分が異端になることを恐れずに持論を展開することができる気持と言えます。

人との話し方とは、自分の考えを人に正確に伝えるのがどれほど難しいことか、それを行うにはどのようにすれば良いのかということです。私は和歌を作る時にそれをいたく実感しました。そして自分の国語力の低さを思い知らされたのです。最後にこの合宿に来て、たくさんの友達が作れてよかったと思います。

不安なる気持ち抱きて過ごしたる合宿生活に得るもの多しも

カメラ・レポート2

主催者を代表して，国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「この合宿教室では，一人の自立した人間として平等に付き合ひ，相手の喜び，悲しみ，苦しみが分かる様な心の交流をはかつて下さい」と挨拶された。

日頃の勉強が十分でなかった

（拓殖大学　外国語　一年　木桧節朗）

僕がこの合宿に来た動機というのは、単位の取得のためで恥ずかしいものでした。しかし合宿を終えたら、よく考えてみると動機は何であれ、大事なことはこの合宿の計画に沿って皆と活動し、意見を交すことであるとわかりました。

班別討論では自分の意見や感想をうまく口に出して表現できず、自分の無知を痛感させられた。又、皆の知識の多さや自分の意見を率直に、かつ正確に表現できる事に驚きも感じました。やはり自分は勉強が十分でないと思い、これからの勉強に対して考え方が変わったように思います。

せっかくこんな良い体験をしたのだからこれをこのままに終らせず、日常生活に於ても、合宿期間中に学んだことを生かして学習に励んでいきたいと思います。

合宿で学びしことを基にして進みゆかなむこれからの日々を

将来の日本を背負ってゆかねばならない

（亜細亜大学　経　一年　林　勝也）

最初は余り出たくありませんでしたので一日目を終えた時には「あきた」「疲れた」「忙しい」といった印象を受けました。しかし最終日の現在の心境は合宿の初めの頃とは違い何か得をしたような感じに変りました。それというのも講義を聞いたり、班友との討論を通じて自分の忘れていたもの、欠けていたものを得ることができたからです。

戦後の歴史の中にいる私達、その中の若者達、さらにはその中の一人一人が将来の日本を背負ってゆかねばならないという言葉が私には重く感ぜられました。これからの日本をしょって立つのはまぎれもなく私達です。今、現在を生きているのは私達なのだから。

日を重ね班の仲間と友となりさらにその輪は広がらむとすも

知識欲を湧かせてくれた

（大阪電気通信大学　工　二年　広　真也）

合宿教室に来た当初は重苦しい気分でしたが四泊五日間を終えてみると実に充実した日々だったと言えます。普段の自分はこれほど物事を考えず、のうのうと日和見主義的なところがあります。自分は未熟ですから「あゝしろ、こうしろ」と命令されれば外側では素直に受けとめておりますが内側では反発しています。諸先生の講義に対しても不安、反発、怒り等がこみあげてきたこともありました。でもこれはこれでいいと思っています。自分はこれらの講義で色々と疑問も抱きましたので、その疑問を解決してゆくため歴史を勉強したり、あるいは外国へ行ったりしようと思います。そういう知識欲を湧かせてくれただけでもこの合宿の意義は大いにあったといえます。

短歌相互批評にて

おそひくる眠気に耐へてやうやくに批評終へれば四時を過ぎける

理解し共感する気持ちを養うことができた

（富山大学　経　三年　西川　望）

この合宿に参加する前は少しあぶない集まりなのではないかと思っていた。合宿に入っても君が代、天皇、憲法に関連する講義の連続であったが、その直後の班別討論で班友からの意見などを聞くうちに、自分の至らなさというか物事を考える視野の狭さに気づき、身の縮まる思いになりました。

今までの自分はその実体を理解する前にただ成り行きや雰囲気で考えを停止してきた。この合宿ではそのような間違った自分を気付かせてくれました。又、短歌創作を通じて自分の心を素直に出すことの難しさを知った。班友の短歌を批評するにあたって感受性の違う人をどのように理解しようか、いかに共感し合おうか、という気持ちを養うことができ、自分を一回り成長させた気がします。

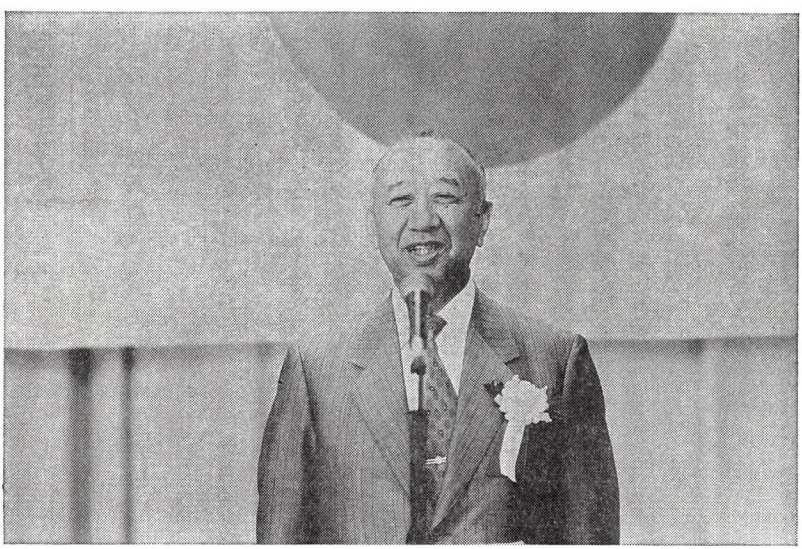
語らへば学ぶべきことのとめどなく我の未熟さに悔しさあふる

和歌をもっと勉強してゆきたい

（早稲田大学　社会科学　三年　村瀬廣司）

三度目の合宿参加でしたが、今回は「長内先生がいつも僕達に言われる様に自分は何も解ってないのだから、初参加と同じ気持で参加しよう」と思ったのですが、今合宿を振り返ってみると心のどこかで「もうそれは自分には解っている」という気持ちがあって心を働かしきれなかった。それが悔ま

カメラ・レポート3



来賓を代表して厚木市長・足立原茂徳氏が「人と人との心の触れ合ひを目指して建てたこの七沢自然教室が，合宿教室の場として使はれることを大変嬉しく思ひます」と挨拶された。

れてならない。

和歌については一年前、二年前の自分から殆ど成長していないことを痛感した。自分の感動を見つめ切れない、自分の感じていることをぴったりとした言葉で表現しきれない。そして他の人の和歌が何を自分に伝えんとしているかを把えきれない。改めて和歌を読むことの難しさを感じた。だからこそ和歌をもっと勉強してゆきたいと今思っている。

をりをりに文を送りて御班友(とも)らと交はりまさに深めんと思ふ

六年ぶりの参加の方に勇気づけられた

（千葉大学　工　四年　中富　仁）

最終日の全体感想自由発表で、最後に壇上に立つて話をされた熊本の小学校の先生の話に大変心打たれました。私は今回で四度目の参加となりましたが、自分はこの合宿で何を学び何を得たのか、本当に胸を張つて言へることは数へる程しかありません。しかし学生時代に二度の参加経験があるものの六年ぶりに参加した方の「社会の中でいろいろな壁にぶつかり、その中で自分がいかに考へるかといふ課題に直面した時に、合宿で学んだことがいつのまにか判断の基準になつてゐた」といふ非常に実感のこもつた体験談に、勇気づけられる思ひがしました。またいつの日か、この合宿に参加したい、戻つてきたいと思ひます。

長内先生のお話を聞きて

謙虚にて広く豊かな心をば取り戻したくと切に思へり

第三班—男子学生—

日本人であることの誇りを持ちたい

（帝京大学　経　二年　岩切　崇）

日本人として胸を張って、「自分の国は日本だ」と言うことが出来る。五日間この七沢自然教室で学んだことは、正にこの事だと言えるだろう。先ず日本文化の中心にある短歌を分かり易く実例を挙げて説明して貰った。次に日本人の生活の中に常識的に伝わっている教訓が、実は千三百年以上の昔聖徳太子の憲法十七条の中に示されていることを教わった。我々日本人の思想の根底に流れているものは、神代の昔から変わることなく続いているものであることを教えて頂いた。これからは日本人としてどうあるべきか常に考え、戦後の風潮である祖国に対する自虐的な考えを改め、古代より続く日本人の精神の営みを尊重し、日本人であることに誇りを持てるよう日々努力し続けたいと思う。

ヒグラシの声聞くあらば七沢に集ひし友の偲ばるるかも

十七条憲法全文を皆と読めた

（早稲田大学　社会科学　聴講生　村主真人）

今回の参加で四回目であるが、今回もまた新鮮な気持で参加が出来た。取り分け印象に残っているのは十七条憲法の全

文を班員皆と知恵を絞りながら意味を取った事である。短い時間で完璧な解釈が出来たとは言い難いが、始めはたどたどしい読みで意味もさっぱり分からなかったものが、やがてはスラスラと読めるようになった。何よりそれまでバラバラだつた各人の心が輪読を通じて一つの事を成し遂げようという気持になれたことが嬉しい。広瀬誠先生の御話も感動的であった。お体にハンディを持たれながらも、それを感じさせない程生き生きと古代の神々達が甦る様な講義だった。古事記が、万葉集が、先人の生き様が、あたかも御自身が見て来られた如く話され、知らず知らずの内に時が経った。私も自分の身体に歴史が息づく程国史を学び、先生の様に感性を研ぎ澄ましてゆきたい。

みどりこき山中道をあゆみゆかばひぐらし響(とよ)みしじま破りぬ

聖徳太子を偲びまつりて

臣として国つまがごと正さむといつくしきみのり定めし皇子は

日の本の臣とふ臣の道照らしましましまことの聖か廐戸の皇子は

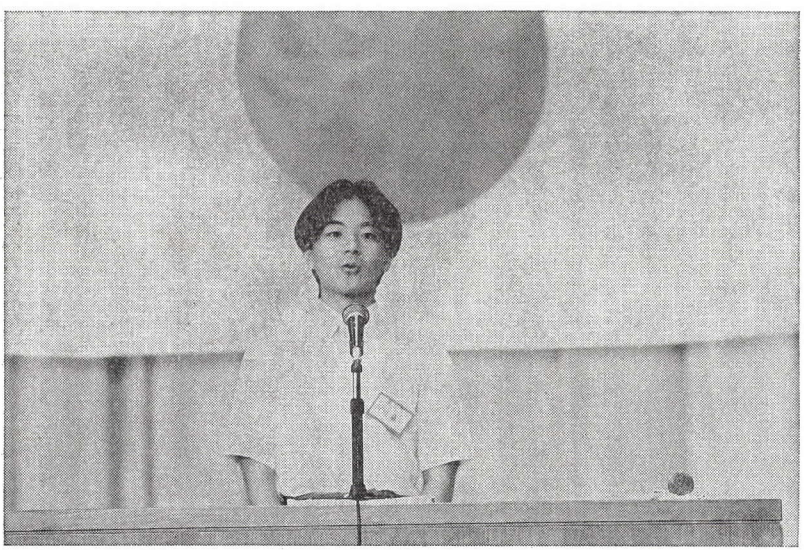
まつりごと乱るるさまに苦しみて仏の御教へ広めたまふも

日常の生活では得られない体験をした

（金沢大学　工　四年　谷崎文保）

今回初めて合宿に参加して、日常の生活では得られない多くのことを学びました。多くの先生方の講義や班員との討論を通じて、自分の心の中に、まだ漠然とではあるけれども、「自分は日本人であり、この国の将来は自分達に掛っている

カメラ・レポート4



参加学生を代表して，亜細亜大学四年・佐藤順一郎君は「共に学び合ふといふ不思議な縁を大切にし，心を働かせながら学んでゆきませう」と呼びかけた。

んだ」という事を思った。何か日常の物質的に豊かな生活に流され、世界における日本の事は勿論自分の国のことすら、例えば天皇や国旗などのことすら無知に近い状態でした。もっと精神的に豊かな国にならなければ日本は駄目になってしまうという危機感にも似た感じを覚える。これを打開するには少なくとも自分は日本の歴史や世界の事など知識を身につけることが大切であると考えました。そして、日本が発展するには自分一人ではなく、国民全体の精神レベルが向上しなければならないと思った。今回素晴しい体験が出来たが、あらゆる方法で自分の他にもこういう場があることを知ってもらいたい。素晴しい国にしていけるよう僅かながらでも力になっていきたいと思った。

我が友といつしか再び語らむと誓ひて別るる七沢の森

二十代が大事である

（亜細亜大学　経営　一年　永井義輝）

自分は東中野先生や先輩達に誘われてこの合宿に来ました。最初は不安だらけでしたが、日が経つにつれて班員とも打ち解けて多少意見も述べられるようになりました。世の中に出ればきちんとした場所で発言しなければならない事もあると思いますので良い経験になったと思います。先生方の御講義にも心打たれる事が沢山ありました。その中で特に感銘を受けたのは、小野吉宣先生の御話の中で、資料の中にも載っていた「二十代が大事である」という言葉である。もうすぐ自分は二十歳になろうとしているので、この言葉を肝に銘じてここ七沢の森を去っても、ここで学んだことをバネにして大学生活を有意義なものとしようと思います。

七沢に良き友達と語らひし思ひ出胸に我は帰らむ

日本の歴史をしっかりと理解したい

（東京水産大学　水産　一年　堀　正明）

この合宿に参加して、日本人として日本の歩みをしっかりと理解しなければならないと思った。聖徳太子は人心を的確に捉えた十七条憲法を定められ、これが後世の人々まで受け継がれた。我々も十七条憲法の心を大切にしなければならないと思った。また、我国の天皇制が少なくとも四世紀まで遡り、武家政権の時代でさえも政治を越えて国民の心の拠り所であったこと、明治以降三度の戦争に多くの人々が祖国に命を捧げられたことも学ばせて頂いた。大東亜戦争に敗れて以来この様な日本の歴史や伝統を抹殺することに学校やマスコミは躍起（やっき）になってきたが、これでは日本人であることの誇りが持てなくなるのは当然である。この様なことが学校や家庭で取りあげられないことは残念であり、このことを多くの日本人が気付くまで、ささやかながら私も訴えていきたい。

夜の集ひの終りて暗き道を宿泊棟に向ひて帰らむとせし折
道の辺に置かれし蠟燭ともされし人らの労（いたつき）偲びつ帰るも

中々なじめなかった

（拓殖大学　外国語　二年　宮沢　毅）

自分の誕生日を潰してまで参加した合宿であったが、内容も分からずいやで仕方なく、適当に過ごそうと思っていた。班の割り振りでも、同じ大学の友達と一緒だと思っていた為、到着した時は帰ろうかとも思った。しかし日を増すごとに、友達と仲良くなってきて、その友達がたくさん出来たということで、この合宿に参加した意味があったと思え、それからは比較的楽しく過ごすことが出来た。講義の内容も中にはとても感動するものもあり、勉強になった。しかし、これは建前で合宿後はすぐ忘れてしまうかもしれない。

日ますごとなじんでゆくと思ひしもこんな生活耐へられぬと思ふ

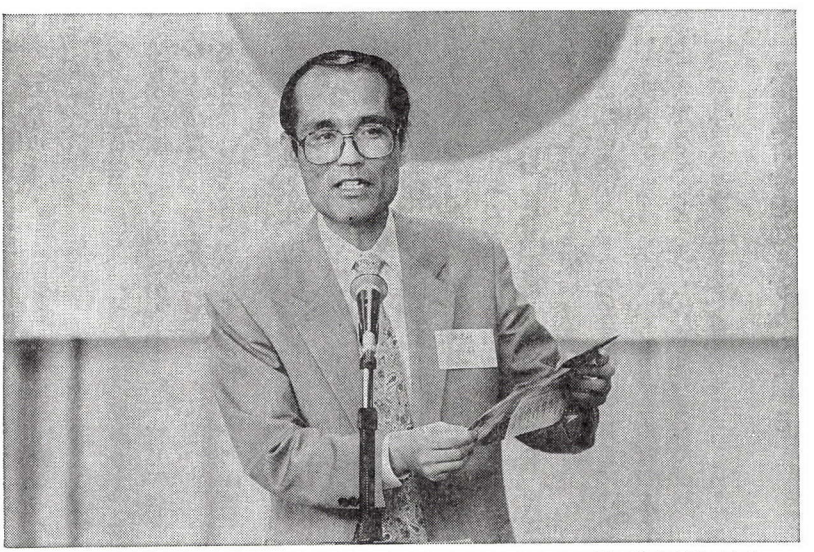
第四班 —男子学生—

何を感じたかを懸命に探した

（福岡大学　経　一年　別府正寛）

大変充実した五日間でした。班別討論等、特に班の中で互いの意見を述べ合ったり、何を感じたのかを考える時間が多くとれたのが良かったです。決して活発な班別討論とはいえなかったが、じっくり考え、出来る限り言葉を選んで発言し合うものではなかったかと思います。小田村先生が開会式の

カメラ・レポート5



合宿運営委員長の新日本製鉄㈱部長代理・今林賢郁氏が，四泊五日間の研修を過ごす上での基本姿勢を述べた。

折、この合宿では心を働かせてほしいとおっしゃられましたが、聖徳太子の憲法十七条の輪読、和歌創作の中で、何をどう感じ、どこに感動したのかを懸命に探し、考えさせられました。それが心を働かせるものだったと思います。

この合宿で学んだ心を働かせることを心掛け、心を豊かにする努力を続けます。

わづかでも感ぜし心じつくりと見つめゆきたりこの五日間

天皇や国歌のことを少し気にし始めた

（拓殖大学　外国語　一年　成田誠悟）

軽い気持ちで参加した合宿が、厳しいスケジュールで行われて大変だった。スケジュールは改善の余地があると思う。

天皇とか国歌とかそんなのどうでもいいと思っていたが、ちょっとは気にするようになったつもりである。

七沢で見知らぬ友とめぐり会ひ心開きて語り合ひしも

寝食を共にし、友達になれた

（早稲田大学　教　二年　鈴木由充）

今回この合宿に初めて参加させて頂きまして、何よりもまず素晴しいなあと思いましたことは、全国各地より見も知らぬ人々がこうして七沢に集まり、寝食を共にしたということです。この合宿に参加しなければ決して会うことのないであろう何の関係もない人々とこうして友達になれましたことは、何にも勝る喜びであります。

そして、数々の素晴しい講義もお聞きしました。大抵こういうところで講義を行う先生というのは偉ぶっていて、澄ましして身近に感じられないものですが、国文研の先生方は皆、気取ったところがなく、気さくな方ばかりで、本当に我々のことを考えていてくださるなあという感じが感じ取られ、好感がもてて良かったと思います。

夏の日を共に過ごせしみ友らよさらば再び会へるときまで

班友と会えなくなるのは寂しい

（福井工業大学　工　三年　松田徹雄）

自分はこの合宿の初日に「もういや」と思い、帰ろうかと思いました。まあ二日三日とやっていくうちに考えが変わるだろうと思いましたが、四日目の夜までとうとう変わりませんでした。昼休みを二、三時間ほしいとか思ったり、討論とかも三十分くらいにしてほしいと思ったり、男ばかりでなく異性とも話したいとも思いました。

合宿にはいやいや来たのですが、五日目にこの文章を書いている時間ともなると、やはりもうこの班の人ともめったに会えなくなるんだとさびしい気もしました。

気が進まずこの合宿に来たれども最後の時はさびしかりけり

私は私自身を知ろうとしている

（拓殖大学　外国語　四年　橋本　修）

私はこの感想文を書きつつも、本当に何かわかったのか、

と絶えず疑問を感じている。先生方の御講義を聞き、友と討論し、和歌を詠んで、本当に何がわかって何を得たのか、自分に偽りはなかったか、止めどのない疑問が湧き上がる。

だが、しっかりとわかっていることがある。それは、自分の心に浮かぶ感動や怒りについて、それが何故自分の心に浮かんだのかと、絶えず知ろうとしている欲求があることである。まさしく、私は私自身を知ろうとしている。この合宿で友を得られたことと共に、かけがえのないものを得た実感がしてならない。

我を知ることは難しと思へどもそを捨ておけぬ思ひやまずも

来て損はなかった

（高千穂商科大学　商　一年　後藤謙太郎）

自分ははっきり言って、この合宿にはいやいや参加した中の一人です。合宿所に着いても、何もかもが面倒くさくて、手抜きばかりでした。開会式でも、「この中の何人が右翼なんだろう」などと考えたりして、適当に四日間寝ればいいやと思ってたのですが、スケジュールがそうはさせてくれず、「はやく終わらないか」とばかり考えていました。しかし、やはり自分以外にもいやいや来ていた人達と話をしたりして、落ち着くようになり、その上、真剣に考えたりしている人達と考えたりしていると、「日頃していないこともおもしろい」と思うようになりました。いやいや来たのだけれども、来て損はなかったと思いました。

開会式の後，各班室で自己紹介がされた。初めて出会つた班員に合宿参加の動機や抱負を語つてゆく。

幾日を浮世と過ごしふりむけばセミの生き様我より優れり

きれいな心を持ち続けたい

（亜細亜大学　経　三年　福富賢介）

毎日早朝に起きて、朝の集いに参加して、御講義をお聞きしているうちに、心が洗われ清められて行く様な気持ちがしました。そして、自分は普段の生活の中で、「思いやり」というものを忘れてしまっていることに気付きました。自分のことを心配して気遣って下さった先生の言葉に素直になれず、恨みごとを言ったこと、自分のことを心から思ってくれているサークルの先輩や友人を裏切ろうとしたこと、苦労をかけた母や姉に対して気遣いを欠いていることなどを顧みて、申し訳なく思いました。「国を想う」とか「社会をよりよくしよう」とかいう言葉を聞くことがあるが、そういう心は、親兄弟や友人を想う心なくしてはあり得ないと思います。この合宿は自分に素直な純真な心を蘇らせてくれたと思う。この合宿の後、再び普段の生活に戻って行く訳だが、今のきれいな心を持ち続けたいと思う。

忙しき日々の生活に戻りても思ひやる心持ち続けたし

第五班 ―男子学生―

みんなありがとう

（早稲田大学　教　四年　山下拡男）

初めての班長で、とても不安でした。私は、あまり人と打ちとけるのが得意じゃない。考えもしっかりしていなければ人をまとめるのも苦手だ。ただ班長のつとめを果たさなければという義務感に押し出されるように頑張った。

自分の中に感想が、ふつふつと湧いてくるのを隠しきれない様子がとても好感に覚えた田島君。難かしい解らないと言いながらも素直に意見を言ってくれる柳井君。どこまでも真剣に考えていこうとする姿勢には見習わなければいけないと思う諸藤君。自分とは違ったタイプでとても魅力のある福元君。みんなありがとう。

友だちの歌直さんと努むれば皆なの心の一つになるかも

最高の友達を得た

（拓殖大学　外国語　一年　田島　豊）

松本先生に紹介されて参加した。始めはいい加減な気持で不満や君が代などに反感の気持があったが、その考えは大きく変った。この合宿で学んだことは、単なる勉強会ではなく心の触れ合いを学び、最高の友達を得た。

講義では、天皇・聖徳太子・歴史に親しみを感じた。小野先生や坂東氏のお話は、堅苦しくなく元気があってとても気持がよかった。短歌創作では、公園で保育園児らと一緒に虫取りをしたり、合宿の食事がおいしかったことを題材にして傑作ができてうれしかった。

友ができまた別れゆく最後の日別れし友といつしか会はん

多くのことを学んだ

（岡山商科大学　商　一年　柳井宏昭）

初めてこの合宿に参加して、多くの事を学んでこの地を後に出来るのが、本当にうれしいと思う。また、永久にこの地を後にすることがないようにも努力したい。班には国武先生がおられ、先輩や同輩が活発に意見を出し合ったことがうれしかったし、自分の知らない知識を増やせることもありがたかった。

国武先生のご指導が、自分がこれから一歩前進していける大きな基礎となった。先生には、心から感謝しております。

また、この合宿に参加してみないかとお誘いくださった宝辺矢太郎先生にも心から感謝しております。

出会ひより多くのことを学びけり我の自信は大きくなるかな

目的は達成できた

（拓殖大学　外国語　四年　福元康文）

ひぐらしの鳴き声を聞きながら合宿に参加した。友人をつ

カメラ・レポート7

合宿導入講義。アサヒビール飲料株式会社取締役営業部長・坂東一男氏は「楽しき哉『敷島の道』」と題され，氏の人生の支へとなつてきた短歌を紹介され「相手の立場に立ち，その人の心を偲んでゆくのが『敷島の道』なのです」と語られた。

くる目的の為に来たこの合宿で、講義、短歌作り等を通して私の目的は達成できたと確信している。

日本の歴史を知る。人の心を理解する。この二つの点を、私に気付かせてくれたこの合宿に感謝している。

またどこかで、ひぐらしの声を聞いたらこの合宿のことを想い出すだろう。

忘れえぬ言葉を胸にしまひつつひぐらしの声聞きて帰へらむ

大島君「有り難う」

（亜細亜大学　経営　二年　諸藤　譲）

今回も合宿に参加させて戴きまして、本当に感謝致して居ります。まず、私は早稲田大学の大島君に「有り難う」と言わなければなりません。

大島君は、去年の合宿以来一年間、短歌を私のために詠んでくれ、また勉強会にも誘ってくれました。この大島君から伝わる気持が、私をこの合宿に来させたのです。

今年の班でも良き友を得、自分の中にこれから息づいて行くことを思うと嬉しくてしかた有りません。

友どちと作り直しし歌々は力合はせし思ひぞ実る

第六班―男子学生―

自分の内部で何かが変わった

（岡山理科大学　理　一年　山崎慎二）

あと三時間でこの第三十六回合宿教室も終わりを迎える。今の素直な気持ちを言えば、合宿初日が大変以前の事のように思えてならない。一日目の夜は、その後の四日間への不安と班別討論で意見も出せずに簡単な感想しか言えなかったので、疲れていたにもかかわらず寝つきが悪かったのを思い出す。あれからわずか四日しか過ぎていないのだが、自分の内部で何かが変わったように思える。その何かとは、様々な物の考え方もそうなのだが、考えるきっかけを得ることができたと思っている。大学では高校の時とは比べものにならないくらいのレポートの宿題があり、自分の無知と言葉の未熟さを痛感していました。そういう理由で合宿に参加してみて、自分の考えと合わない所があったり講義中も眠くなったりしたが、今は参加して良かったと思っている。はるばる神奈川県まで来て、テレビも見ず、新聞も読まずに下界と切り離された世界での五日間の生活も、たまには良いものだと思っている。

班の人達ともよく話ができたと思っている。思慮深い大島さん、口調のはっきりした松田くん、方言の自動変換可能な

渡辺さん、自分の考えを持っている高山さん、キャラクターの変化のみられた安保くん、この人達とまた会いたいと思う。

小野先生の講義を聞いて
教へ子に本気で接する先生の話にうたれ拍手多けり

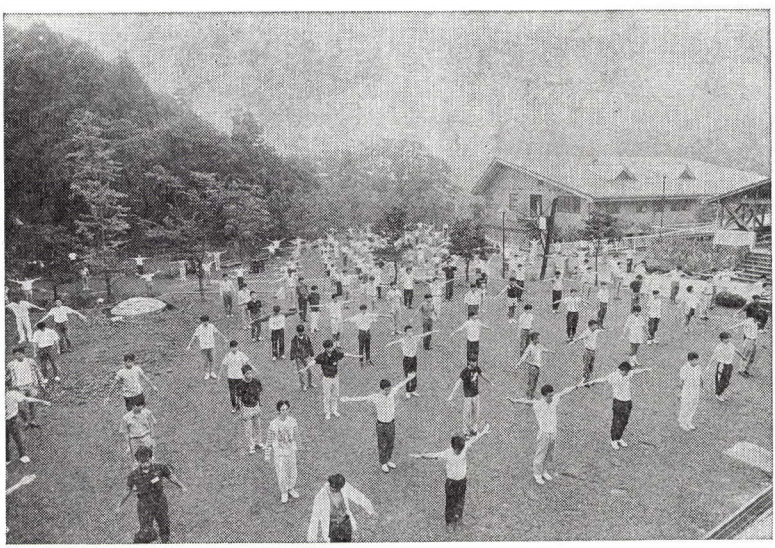
自分の志に大きな励ましを得た

（大阪経法大学　法　三年　渡辺昌洋）

ようやくと言うのか、あっと言う間にと言うのか、この四泊五日間というのは私にとって特異な体験だったような気がします。どんな雰囲気の所なのかと不安と緊張感がごちゃごちゃになっていた自分が思い出されます。そんな気持ちをなくしてくれたのが大島班長を中心とする六班のみなさんでした。私は常に国防に関心を寄せている学生で、海上自衛隊幹部候補生学校に入校するのが夢であり、目標であります。全体意見発表の時、防大四年生・新田さんのお話を聞いて、自分の心にものすごいパワーを与えられ、自分の志に大きなはげましとなりました。本当に良かった。特に六班の中で寝食を共にしてきた仲間達はみんな気のいい奴ばかりで、思いやる気持ちを持っていたので、大いに反省させられ又教えられました。唯々感謝の念で一杯です。

各地から集ひ来たりし参加者の顔々を見て我奮ひたつ
三日目の夜静まりてベランダに班長さんと共に語れり

カメラ・レポート8



合宿教室の一日は朝の集ひから始まる。七沢の朝の爽やかな空気の中でラジオ体操。

班友の皆さんに感謝したい

（防衛大学　人文　二年　高山裕司）

何から書けばいいのか。わからないまま時は流れて、もうすぐこの合宿も終わってしまうという思いがしています。この四日間の生活は私にとって普段の防大での生活と大して変らないものだったが、全体感想意見発表の時間に皆さんが友達ができたという意見を聞き、新田さん、浜口さんのようにとまではいきませんが、防大生活のよさをちょっと見直しました。講義はとても難かしくてよくわからなかったが、六班の皆さんの語られるのを聞くと少しずつわかってきました。国文研を広い目で見て活動されている大島さん、もしかしたら将来上官になられるかもしれない海自志望の渡辺さん、いつも口火を切ってくれる安保君、かわいい顔してやっていることがエグい松田君、中庸という言葉がぴったりの山崎君、彼らに本当に感謝したいと思います。彼らが班友でなかったらノイローゼになっていた私でした。

友どちと肩を並べて道行けば今日の朝はすがすがしきかな
くさはらに語らふ友のねぼけ顔昨日の夜は楽しかりしか

合宿で得たものを学生生活に生かしたい

（亜細亜大学　法　一年　松田裕幸）

今、この合宿をふり返ってみて、今まで全く知らなかった班友の方々と、日本のこと、世界のこと、さらには自分のことなどを素直に率直に語り合えたことに、なによりも満足している。合宿中にたくさんの方々と出会え、様々な意見を聞くことができ、なかには驚ろかされたり、賛成できないものもたくさんあった。けれども聞いている中に自分の偏見的な固定観念や自分の新たな価値を悟ることができ、改めて自分の無知さを身にしみて感じることができた。自分にとって一番大切だと思ったことは自分を表現するということである。狭義には他人に自分の価値を知ってもらうということ、広義には国際交流において日本を知ってもらうという理由からである。最初不安であったが、無事に終えることができ、自分の人生の目的、そして自分自身に自信をもてたと感じている。大学一年生で、社会に出るまでまだ時間をもっているので合宿で得たものを自分の血や肉にして立派な人間に自分自身を育てていこうと決意している。

み友らとすごした日々を忘れまじふたたび会ひて語り合はむに
ここにきて得た思ひ出の多かりしと相模の山に別れつげなむ

疲れた

（拓殖大学　外国語　一年　安保幸博）

疲れた。講義や討論が生活の八〇パーセントを占めていたので、今素直に最初にでてくる言葉である。この合宿で自分にプラスになった点は今はまったく自覚していないが、「ここで得た経験だけでも人生上役に立つよ」と先輩が教えてくれた言葉が耳に残っている。

食事は量がかなりあってバライェティーなメニューでもあった。風呂はかなり混雑していて、裸で順番を待つ間、班員と互いに顔を見て苦笑いするしかなかった。床に就き、眠るまでの時が一番楽しかった。だいたい自由時間がないのでこの時間を利用するしかなく、その為に翌朝の集いがつらかった。「もう二度と来るもんか」と思ったが、そう思う人に限って来年ふたたび参加するジンクスがあるとO先輩がつぶやいていた。

坂東さんの講義を聞いて

酒のめぬ自分にあれば酒愛(め)でて笑まひ給へる師のうらやまし

今まで視野が狭かった

（早稲田大学　第一文　四年　大島伸一）

今合宿で特に感じられたのは自分の視野の狭さです。班員と話している時でも先入観にとらわれて友の話を親身になり切って聞くことが出来なかったように思います。また今までこの先入観のため如何に多くの人と話をする機会を失って来たことか、反省させられました。今回初めて合宿の準備及び班長を務めさせて戴いたが、この合宿での生活と現実の学生生活のギャップが大きすぎて、山を下りた時感動が立ち消えになってしまうのではないかというのが正直な意見です。本当に全国の大学生の為の合宿にする為にはもっと弾力的に変えるべき所は思い切って変えてゆくべきだと思います。班付の澤部先生には歌の詠み方、社会に出て生きてゆく中で大切

カメラ・レポート9

二日目の午前は，神奈川県立金井高校教頭・国武忠彦氏により「聖徳太子と楠木正成」と題された御講義が行はれた。氏は「聖徳太子の『憲法十七条』は，氏族間の闘争を目の当りにした痛切な御経験から生れたのです」と語られた。

なことが何か、色々と教えていただきました。坂東先輩や澤部先輩のような生き方をしてゆくよう努めてゆきます。

四日間の朝のつどひの司会を終へて食堂にて長内先生にお会ひす
大任を何とか終へし吾の背を軽くたたかれ師は笑みかけられる
初めて朝のつどひの司会をして
気負はずに思ふがままに語らんと壇上に上れど声の震へる
松田君のこと
ベランダに「蛾がいらつしゃいますね」とかしこまり語る君見て皆爆笑せり
安保君のこと
一日が長いな疲れたと言ひながらはたから見れば楽しさうな君
山崎君のこと
おだやかな笑みをたたへてゆつくりとお茶を飲み飲み語る君かな
高山君のこと
はきはきと自分の思ひ率直に語るすがたに我刺激さる
渡辺君のこと
七沢の山並み見つつ虫の音を聞きつつ君と夜更けまで語る

第七班—男子学生—

もっともっと心を豊かにするためには

（九州大学　工　三年　船崎好助）

昨日の長内先生の御講話の中で「われらの豊かならざる心を映しているのが今の日本の現状である」との言葉があった。この話をお聞きした時、思い出したのが青少年による悲惨で残酷な事件の数々であった。ある人が言ったが「国民の幸福を常に祈っておられる天皇陛下が、これらの事件をお知りになりどれ程御心を傷めていらっしゃるでしょうか」と。「本当に陛下にただ申し訳ございません」という思いでいっぱいでした。自分たちの心が如何にすさんできているのか反省させられるばかりです。もっともっと心を豊かにするために、私共はこの合宿で学んだことを大事にし、学び足りないところは更に学んでいかなければならないと思います。

やはりその中でも和歌創作が一番のように思います。

七班のともと語りつこの五日はや過ぎ去りて別れ来にけり
別れても文をかわしつ皆共に励みゆきなむますらをの道

普段のちょっとした生活の中の事に心を配り働かせていく中で心を活発に働かせていかなくてはならないと思います。一日目の講義での坂東先生が「言葉を大切にする生活」を生きる上での原点にされているように、私自身も言葉を大切にしていく中で心を磨き心を豊かならしめることができるように日々努力していきたいと思います。最後に七班の面倒をみて下さった小野先生那須先生に深く感謝し、七班の班員の方々との出会いを感謝し大切にしていきたいと思います。

筒井さん有難う

（東京農工大学　工　一年　内藤剛司）

一番うれしかったことは、全体感想自由発表の際、班員の筒井さんが我々班員全員を紹介してくれたことであった。み

んなの前で自分の名前が呼ばれた時は、はずかしい気もしたが、何かこう胸に〝じーん〟とくるものがあった。

たった五日間ではあったが、ここまで他人を思えるようになれるとは思ってもみなかった。自分は比較的騒がしい方なので夜も遅くまで話していたが、彼（筒井）は、文句一つ言わずに寝ていた。それでも「内藤君は…」と最後の最後まで話しかけてきてくれた。事実彼は自分より二つ年上だが本当にお兄さんのような気がしてならなかった。

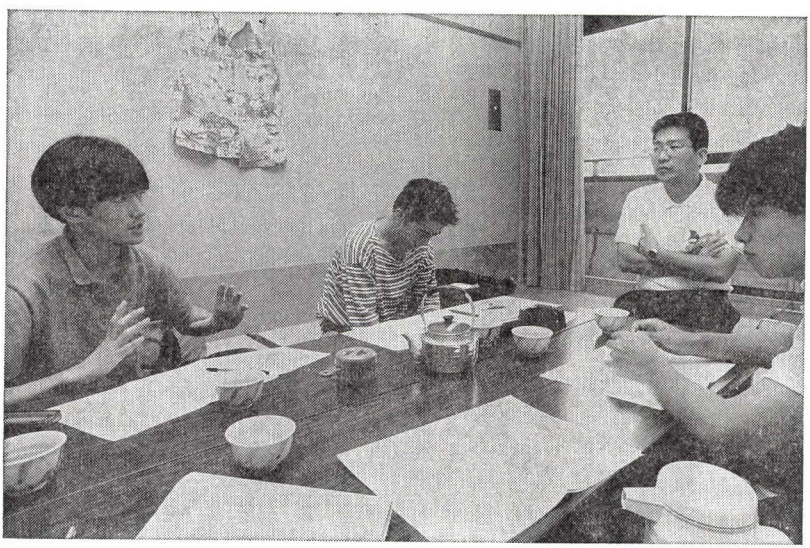
あと一つ心に残ったことがある。それは班長小野氏（四十四歳）高校教諭である。いかにも脳みそガチガチの人だと思った。しかし、二日目の午前中の班別討論の時、ほとんどケンカごしになって先生と闘論をしたのち、何となく心のわだかまりが消えいつしか先生を好きになっていた。最後の夜の集いの時いっしょになってバカ騒ぎをしたことは一生忘れないと思う。

アルコール夜の集ひで役に立つ恥を忘れてともに踊れり

自分の使命を自覚

（金沢工業大学　工　四年　筒井正樹）

「人間五十年下天の内をくらぶれば夢幻の如くなり、一度生を受けて滅せぬ者のあるべきか」自分が年中口にしている敦盛の歌です。自分もこのように人生を太く短く生きたいと思っています。この合宿は人生のほんの一瞬にすぎません。しかしこの刹那の出会いで得た経験はこれからの人生に大きく



班別討論では，講義のポイントを確かめあひながら，感想や疑問を率直に語り合ふ。

影響を与え続けると思っています。この人生に何をすべきか一つの解答が得られたようです。日本国民としての誇りを持ち、日本の文化歴史を理解し自然を愛し共存していくことが大前提にあり、そこから自分の使命を自覚すればいいと思いました。

この合宿に参加した成果が問われるのは今後の生き方にあり、気合いを入れてより真剣に生きて行きたいと思いました。

いつの日か再会せむと言ひし友を我忘れじと心に誓ふ

胸の奥にあるものを発見

（拓殖大学　外国語　二年　山崎貴幸）

大変堅苦しい合宿だと前々から聞いており、自発的でなかった私は、合宿前日まで参加をこばんでいました。しかしこの五日間の合宿教室に参加したことに、結論から述べますと大変満足しております。

班別討論では皆が初対面にもかかわらず、各人の素直な意見や疑問点が交わされ、班友たちの普通の生活では見られない胸の奥に秘められている部分をお互いに知ることができました。

この五日間、大変充実した時を過ごせ大変短く感じました。また合宿中大変親切に御指導して下さった班付の小野先生、那須先生、松本先生そして短歌創作批評等生活面で大変お世話になった班友達に心より御礼申し上げます。この合宿を機に皆様が一歩一歩着実に発展され、また皆様との再会を心より願っております。誠にありがとうございました。

汗をふき登る坂道班友と交わす言葉も少なくなりぬ

また来年も参加できたらよい

（福岡大学　法　二年　牟田口隆文）

今回の合宿を終えてまず思ったのは、ほんとうに来てよかったなあということです。全く知らない人達と同じ部屋で五日間共に生活できるのだろうかという合宿前の不安は、合宿が終わった今では充実感に変わり人間が大きくなったという実感も多少わいてきました。

いままで学校の勉強などであまり触れたことのない日の丸や天皇について班別討論で語り合い他の人の意見をきき自分が無知であったことを知らされましたが、それによってもっと日本人として知っておかなければならないことがたくさんあるということもわかりました。

先生方の講義、ハイキング、短歌創作、夜の集いなどもよい体験でした。また来年参加できたらよいと思いました。

緊張しみんなで歌つた夜の集ひ今では楽しき思ひでなりけり

歴史上の人物がいてこそ

（拓殖大学　外国語　一年　若林秀彦）

合宿に参加して、今までの自分自身の生き方、人間関係、そして現在の日本、世界全体について幅広く考える良い機会

となった。中には難解な問題もあったが、特に近年の自分のしてきたことについて思い返し、これからの自分の生き方を考えることができた。高校二年の時、人間関係のもつれにより目標を見失ない学校に行かない日も増え友人や親ともうまくいかず、無気力な状態がつづいたことを思い出した。

その後高校三年になり、とりあえず大学に入れば何かがあるというばく然とした気持で受験勉強をはじめた。それは自分にとって困難なものであったが、なんとか学生になることができ合宿にも参加することができた。

そして全国各地の友人などさまざまな考え方の人がいることを知り、また自分が幼なかったこともわかり、歴史上の人物がいてこそ現在ここに自分たちが生きているということに感謝することができた。

七沢の緑の中でせみが鳴く暑さの中に安らぎ覚ゆ

後半、盛り上がった班別討論

（亜細亜大学　経営　一年　賀谷達樹）

まず僕は小野先生が班長である七班に所属できた事を非常に嬉しく思っている。それは討論を班の部屋でしていた時、とてもよく私達の話を聴いて下さったり、又よい意見を述べて下さったからです。（夜の集いの時にはかなり羽目を外されていたようですが……!?）

先生は最後に、この七班のようなメンバーが集まる事はもうないだろうと言われましたが、僕もそう思います。先にも

カメラ・レポート11

二日目の午後には，各班で聖徳太子の『憲法十七条』を輪読した。幾度も繰返し文章を読み，憲法に込められた聖徳太子の御心を偲んでゆく。

書きましたが班別討論は最初のうちこそ元気がなかったものの、後半の方にはすごい盛り上がりをみせ、恐らく今年の他の班に比べて一番白熱していたのではないでしょうか。

とにかく僕はこの大学一年の夏に体験した合宿を忘れませんし、参加した意義は充分あったと思います。

四日目に皆で集ひし体育館最後の夜を楽しく過ごす

第八班 ―男子学生―

慢心は最大の悪

（亜細亜大学　経　四年　佐々木栄幸）

慢心は最大の悪という事であるが、どうも慢心していた。素直な心で参加できなかったような気がする。どうもいけない。このままではどうもいけない。

短歌は恐しい。その詠み手の心情がわかる人には手に取るようにわかるらしい。屈折した心情があるのではないかと言われた時、内心ドキッと驚いた。言葉を正しく使うように心がけて行きたいと今感じている。

大学に入学して、三年の頃から何か日本に欠けたものがあると思うようになった。それが日本人の誇りであると考えた。今度の合宿では、その考えをますます深めることができた。明治の精神や十七条憲法の精神に日本人の誇りを思った。

張りのなき日々のくらしを送る時思ひ起こさん今日の思ひを

天皇や国家の問題を考えていきたい

（早稲田大学　第一文　二年　尾関謙一郎）

私は寮の関係でどうしようもなく参加しました。本当は右よりのことをやるらしい合宿など糞食えだと思っていました。先輩からは色々な話を前もって聞いていましたが、今から思うと「百聞は一見にしかず」でした。

田久保先生と長内先生のご講義はとてもためになりました。「天皇」や「国家」といった問題は自分とは全く関係のないことだと思って無関心を装ってきましたが、その逆であることに気付かされました。こういう問題を自分自身で自問自答しながら、深く掘り下げていかねばならない、そして必要とあらば行為という形で表わしていかねばならないと思います。

討論の場で

間をおきて班長さんの語らるる言葉に自づと人柄見えぬ
いつの日か班長さんとまた会ひて語りあひたく吾は思ふなり
我もまた克己の心を失はず地に根をはりて生きたしと思ふ

習慣の恐しさ、学校教育の重要さに気づいた

（神奈川県立湘南高校定時制　四年　野崎　譲）

高校生としてただ一人大学生班に入り、はじめはついていけるのか心配しておりましたが、そんな自分を班員の方々は

暖く迎えて下さり、何とかついていくことができました。

開会式では、「国旗掲揚」「国家斉唱」が行われました。頭の中ではそれは当然の事で、常日頃からそうあるべきと主張していたわけですが、いざそれを目の前にすると、やはり違和感を覚え、身体が受けつけないような気がしました。今までに「君が代」を歌ったことはなかったし、日の丸も現在の学校では掲げられていません。改めて習慣の恐しさ、学校教育の重要さに気がつきました。

この合宿での経験は、日常というものから一歩出て、その日常を見つめることができるとても貴重なものではなかったかと感じています。

友らとの別れはおしきいつの日かまたの縁に合はむと思ふ

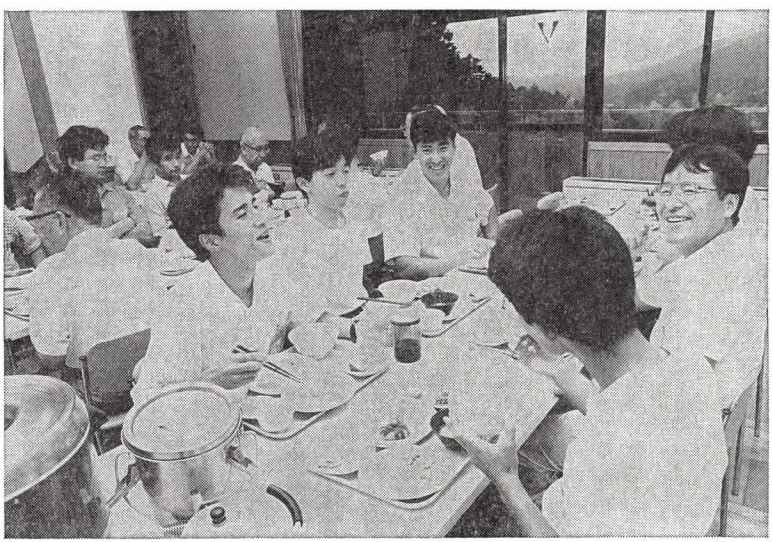
自分の力を試したい

（拓殖大学　外国語　一年　山口順也）

五日間、長かったようで短かかったような気がする。初めの頃は本当にヤバい所に来てしまったと思っていたが、だんだん話し合っていくうちにそうではないと思うようになった。同じ班の人達には、教えられることが多くあった。

一つ理解できないのは、講義や討論では人のために生きる、日本の国の中で社会に貢献することが美徳である、といわれたことだ。でも、僕は、今、自分の力を試したい。自分の夢や目標に向って進んで行きたい。誰のためでもなく、自分のためだけにだ。合宿で学んだ現実、事実を見つめること

カメラ・レポート12



食事も各班ごとに食卓を囲む。おいしい料理を食べながら，会話が弾む。

など、自分の目標を達成するための武器が増えたと思っている。

合宿の日はつらけれど心開く友できたるをうれしく思ふ

自分を見つめ直した

（拓殖大学　外国語　二年　佐藤広彰）

この合宿に参加して思ったことは、御講義をなされた人々や国文研の人々の熱心さです。遠く九州、北海道から四泊五日の期間にあれだけの人々が集まってくるのですから、それぞれの人に色々な思いがあるのでしょう。

僕もこの期間中に新しく自分を見つめ直す機会が与えられたことをうれしく思います。今、自分の頭の中にはこの合宿で得た様々な新しい思いがあります。そしてこれらを勉強し、又、新しい次なる人生、次なる夢を見つけてみたいと思います。

御講義の途中でいつしか寝入りたるを班友に起こされ照れ笑ひする

いろいろな経験を積みたい

（湘北短期大学　電子情報学科　一年　八木智之）

私は、学生のうちにできるだけいろんなことをやってみたいと思っているが、しかもいろんなチャンスが何度もくることが、すごく不思議だ。今回、この合宿に行けるというチャンスがめぐってきた。

この合宿は、普段の生活にない雰囲気があった。やっていることも私の日常の生活では考えられないようなことが多かった。そして自分が参加していることに驚いた。しかし、自分の知らないことを見ることは必要だ。私はこれからもいろいろなことに参加し、体験する中から、真実を見付け出し、自分の進むべき道を見付け出したい。

合宿で親しくなりし友達と別るると思ふとさみしかりけり

「付き合ひ」ということがわからなくなった

（九州大学　法　三年　花田芳夫）

合宿教室は今年で三回目の参加になるが、回を重ねるごとに分からなくなっているものがある。それは「付き合ひ」ということだ。講義においては講師の先生との「付き合ひ」があり、お話を真剣に聞き、それに共感するという点で自分は少し進歩したのではないかと思う。しかし、班室においての討論など友人との「付き合ひ」という点で、特に合宿に毎年積極的に参加し、学生の中でリーダー的存在になっている方とは、今もって友情が芽ばえたことがない。そうだとすれば講師の先生との「付き合ひ」も本当はできていないということかもしれない。このことは、これからの自分の課題として考えていきたいと思う。

かなかなとひぐらし鳴きて七沢の夏合宿は終らんとする

第九班—男子学生—

緊張の連続であった

（金沢大学　工　四年　吉岡史恭）

長くて短かったような合宿もとうとう終わりだが、思い起こすとこの四日間緊張の連続であった。何がそんなにつらいかと言えば人前で自分をさらけ出すこと程、エネルギーを要することは他にない。討論に次ぐ討論で、しかも内容が誤魔化しの効かない生きることと直接関わる事だった。嘘を言って相手に合わせていれば真の信頼関係は絶対に生まれない。この緊張感は合宿後も日常生活に生かしていかなければならない。

合宿を通して、祖先を敬い、傲りを持たず、そうすることが人の輪をつくりだし、その社会からまた自分に恩恵が戻って来るということを再確認するとともに、自分の周りのことから絶対に逃げまいと決断できた。

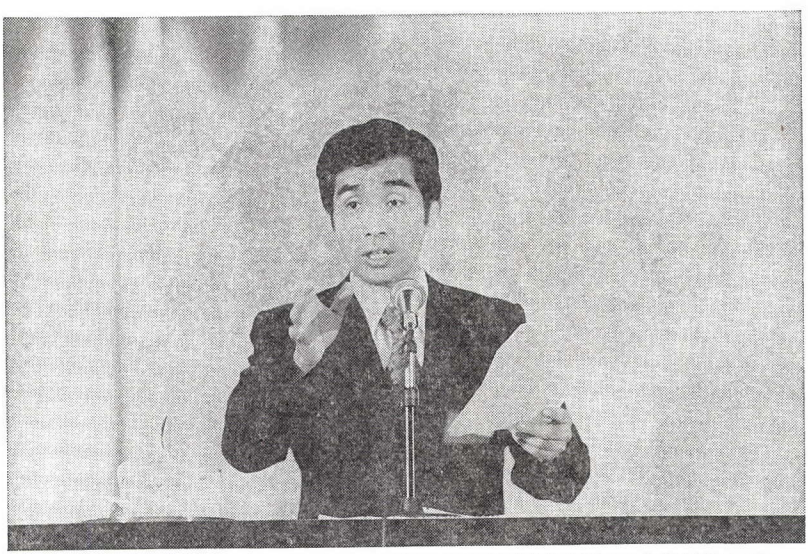
若人が進まんとするその道をもう迷はぬと声たかだかに

緊張と興奮の毎日

（拓殖大学　外国語　三年　藤裏佳秀）

普段はあまり話題にしない事をテーマとした講義、更にそれについての班別討論という様々なハードメニューがあって

カメラ・レポート13



二日目の夜，福岡県立新宮高校教諭・小野吉宣氏が「教育体験を語る—教育は難しい然れど面白い—」と題してお話をされた。氏は登校拒否症の生徒には教師が父親の厳しさと母親の親身さを持つてこそ，尊敬と感謝の念を抱かせることができると訴へられた。

かなりの緊張と興奮に囲まれる毎日となってしまいました。討論に於いて、自分と同じくらいの年齢の人がそれぞれ思い思いの考えを具体例を挙げたりしながら述べているのを見てなぜ自分はあんな風に上手に発言出来ないのだろうというもどかしさで一杯でした。しかし嬉しかった事もあります。講義に於いてそれまで大ざっぱな事しか知らなかった事を詳細な事まで学ぶ事が出来、また班友をはじめ全国のたくさんの学生、社会人の皆さんとめぐり逢えたことです。お蔭で、楽しい集いが出来たと感謝しています。自分にとって、この五日間は社会に出る為の良い勉強になったと思っています。

霧の中厚木の集ひ幕を閉ぢ明日(あす)に向かひて足を伸ばさむ

熱くさせられるものがあった

（富山医科薬科大学　医　五年　野原　茂）

一年以上をかけ、非常に苦しい思いをして準備して来た医学生の体育会が八月四日に終り、その直後にこの合宿に参加しました。また合宿が終われば実家の農作業を手伝わねばならず、憂うつな気持ちで参加しました。最初はやる気がなかったのですが、いろいろ聞いているうちに考えさせられたり、反省したり、熱くさせられるものがあったりと心の中ではいつの間にか引き込まれていました。もっとも、そんな自分に反発する面もあり、結局、最後まで素直な気持で接することが出来ず、今になってもっと真面目に聞いていればと後悔しています。富山に帰れば農作業が待っていますが、その中でこの五日間の出来事について、いろいろと考えてみたいと思います。

長かりし四泊五日の合宿も今日で終はりぬ家へ帰らむ

自分が恥ずかしい

（早稲田大学　社会科学　二年　長濱宏昭）

今回の合宿では今まで嫌いだった先輩が私のことをとても気を遣ってくれていることが分かり、先輩に対する嫌悪感は私の一人よがりだと分かった。

人の思っていることなどは、よくその人と接してみなければ分からないのに、単純に嫌な人と決めつけていた自分が恥ずかしく思えて来た。

古人の歌を詠むにあたり
いにしへの人の心を知るよりも歌詠みゆくは難しきかな

僕には少し厳し過ぎた

（拓殖大学　外国語　一年　川崎良典）

松本先生に誘われてこの合宿に安易な気持ちで参加しました。参加して良かったと思う事は友達が出来たことぐらいでした。僕には少し厳し過ぎたこの合宿の終わりを迎え、とてもうれしいです。朝起きるのが嫌で、講義を聴くのが嫌で、討論をするのが嫌で過ごした五日間でしたが、今から生きてゆくうえで役に立つ何かが残っていればいいなと思います。

最終日に

七沢のこの班室から見る景色山なみ美し心に沁みる

第十班 —男子学生—

一人の思索では得られないものを学んだ

（九州大学　工　三年　松岡篤志）

自分の思ひを正確に表現して伝へる難しさをしばしば痛感した。しかし班長さんから「その言葉はよくわからない」と指摘を受け、それまでの自分の表現が曖昧であり、より具体的な体験に即した言葉を探すことによつて、自分の考へてゐる事がより明らかになり、自分をさらに深く知ることができたやうに思う。班別討論、短歌相互批評で一つ一つの言葉を大切にしていくといふ事を実感したが、これは小田村先生が述べられた「総合的な意志があつてその中に身を投じた」体験から生まれてきたのではないだらうか。一人の思索では得る事のできないとても深いものを学んだ。班友の言葉に耳を傾け、心の動きを感じとつていく、そしてその心に感応した自らの心の動きを言葉に表はしていく、さういふ営みの中に実に豊かで心が拡がつていくやうなものが沸々と感じられてきた。「自他の二境を平等にした」世界を垣間見させていただいたやうな貴重な体験であつた。

小柳陽太郎先生の閉会の挨拶をお聞きして

君と臣の道素直とふみ歌をば読みませる師のみ声しみるも

カメラ・レポート14

三日目の午前，短歌創作前に，福岡県立須恵高校教諭・那須三元氏によって「短歌創作導入講義」が行はれた。短歌創作の意義を「短歌は人と人の心を通はせてくれるのです」と語られ，作り方の基本を判りやすく説明されていつた。

息つく間もない程充実した生活が送れた

（防衛大学　人文社会　四年　新田　洋）

四泊五日の合宿は極めて短く感じた。理由は、この合宿が学び続けて息をつく間もない程充実した生活が送れた啓蒙の場であったからであろう。私には最初から合宿に対する不安などなかったが、それはこの合宿に対する期待が浅はかなものであったからだという事が今にして分かるのである。自分の人生観までも変えていこうとする高い目標があったならば、むしろ不安があって然るべきであろう。何の不安も感じなかったのは、この合宿を内心軽視していたのではないかと、私は恥じらいの様なものを感じている。しかもこの様な私に対して親身にお教え下さった先生方や、討論の相手をしてくれた学生諸君には、心から感謝の意を表わさねばならない。これから私は激動の社会において国を守る職に就くわけだが、この合宿で培った人生観を終生忘れる事なく、社会の一員として貢献していこうと決意した。

七沢自然教室における合宿の後に
日本に生まれし喜び語りたる友らを我は守りてゆかむ

これからの人生のプラスになった

（拓殖大学　外国語　二年　丹野　正）

私はこの合宿でとても貴重な体験をしたと思います。初めはどこまでこの合宿についていく事ができ、何人の友人が作れるのだろうと不安で、意見もフランクに言えずに悩んでいましたが、二日目以降はしっかり意見を言えるようになりました。又短歌創作では、よく出来たと思っていた自分の歌が、他の人から見ればそうではなかった事にショックを受けました。しかし班全体で自分の歌を直してもらい、いい歌が出来たことがうれしくてなりません。最後に、この合宿でたくさんの知らない人と話ができたこと、スケールの大きな講義を聞けたこと、夜の集いで大爆笑したことなどが、自分のこれからの人生において大きなプラスになったことは間違いありません。本当に感謝しています。

合宿の折
これまでは顔も知らざる友集ひ心通はせ綾織りなしぬ

すばらしい人達と出会うことができた

（長崎大学　工　一年　吉田充邦）

人の話を聞くこと、ただ聞くだけでなく、心を働かせて相手の気持ちを偲んでいくことを目標としてこの合宿に臨んだが、これは大変難しいことでした。又事前準備を行なっていなかったこと、歴史、世界情勢に疎いため、講義が分からなかった点も多くありました。しかし得た事も数多くあります。一つはすばらしい班員、班長、班付きの方々と出会う事ができ、しかも「自分の思うこと」を素直に見せてくれたという事。二つ目に様々な御講義が聞けた事、三つ目にこの合宿に参加するように勧めてくれた先生方、先輩方、そして両

親に感謝する事、等です。又次回都合がつけば是非参加させていただき、友と先生に再会できれば、そして新しい友、先生方とお会いできればと思います。

みともらと過ごせし日々をふりかへり充実の時間宝のごとし
をりあらば今年出会ひしみともらとまた来年も会ひたしと思ふ

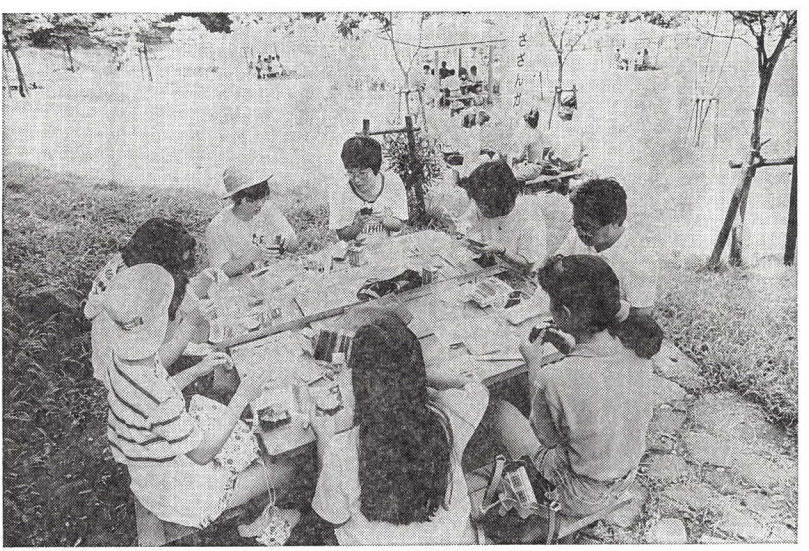
自分の無知を痛感した

（拓殖大学　外国語　一年　堀越孝行）

この合宿を通じて自分の無知さを痛い程知らされた。意見は発表できるが、考えている事をストレートに出すのが非常に難しく感じた。言いつくせないくらい感謝の度も大きく、実りの多い経験であった。今まで得るものがない無味乾燥な俗的生活にひたっていたが、久しぶりに緑の中に吸い込まれ、自然の中にもどった気がした。またおそまつな自分の歌を皆が真剣に考えてくれたこと、その末に出来た歌がずい分良くなったことは本当に嬉しく思う。多くの講義を聞いて、日本について多彩な観点から考える事ができたが、世界情勢については知らない事が多すぎた。東中野先生が尊敬できる人物を持つようにおっしゃったが、長い月日をかけて作り上げねばならない。この合宿でいろいろな課題が生まれてきた。

最終日、最後の班別懇談にて
過ぎし日々に学びたりしは堂々と静まりてある緑の姿よ

カメラ・レポート15



森林公園へのハイキング。卓を囲み，皆でおいしいおにぎりを食べる。

第十一班—男子学生—

短歌を詠む事を通じて天皇陛下を実感できた

（亜細亜大学　経営　四年　佐藤順一郎）

坂東さんの導入講義を聞いてゐた時、不意に日頃の挨拶、例えば「お早うございます、こんにちは」等を軽んじてゐた自分に気付き、恥づかしさがこみあげてきた。講義の後、合宿生活の中でかうした挨拶をするやうに心がけてみた。小田村先生はご講話で「和歌を自分で詠んでみてその難しさが判れば、御製を読んだ時にかういふ歌を詠める人がどういふ人なのか判つてくるでせう」と言はれた。私は短歌が好きで、ほとんど毎日詠んでゐたが、この御言葉を聞き、天皇陛下は自分にとつてどういふご存在なのか、初めて形を与へて頂いた気がした。ご講義は皆素晴しい。しかしそれ以上に自分にとつては班友との出会ひが大きかつた。合宿が終はつた後でも何らかの形で付き合つていきたい友ばかりである。

感想文を書きつつ
五日間共に過ごせし班友らとの別れの時は近づきにけり
書きながらふと顔あげて一人一人班友らの顔を見まはしにけり
一人一人班友らの顔をみてをればさみしき想ひおのづこみ上ぐ

みんな〝いいやつ〟ばっかりでした

（拓殖大学　外国語　二年　多田雅信）

私はこの合宿に参加する事にあまり意欲を持っていませんでした。班別討論や短歌創作等の日程は、大学生活を目的もなくだらだらと過ごしてきた私にとってきつく思われ、逃げだしたい気分でした。しかし二日、三日と過ぎていくうちに変化があらわれてきました。あんなに長いと思われた一日もだんだん短かく早く過ぎていくように感じられ、自分の班の中に私自身うちとけていくのが判りました。この合宿は私に多くの事を教えてくれ、学ばせてくれたと思っています。無知な私にとって先生方の諸講義、班員一人一人の考え方は私に、自分自身どうあるべきかという、人生にとって本当に重要なことを教えてくれたように思います。全部吸収出来たとは思いませんが、確かに少しではあるが自分にプラスになったと思います。今は何より第十一班の友人達と班付の柴田さんに感謝しています。十九歳の私が言うのはなまいきですが、みんないいやつばっかりでした。

合宿で何かの縁と言ひあひし十一班の友を忘れじ

日本人としての一體感を実感した

（早稲田大学　社会科学　二年　柳谷弘樹）

全国津々浦々から学生や社会人のあらゆる年代層の方々があひ集ふ合宿など現在の日本には殆んど見うけられないでせ

う。私がこの合宿に参加して痛感したことはいかに私が日常生活に於いてたるんでゐるかといふ事であり、日本がどれだけ多くの大切な事を忘れてしまつた國家になり下がつてしまつたかといふことです。この合宿は私達に、私達が担ひゆく日本がこれからどのやうな道を歩み、日本人としていかに生きていくのかを教へてくれたやうな気がいたします。それは私達の先祖が大切に守つてきたものを深く心に刻み、それへの感謝を忘れず、誇りを持つといふ事に他ならないと思ひます。小田村先生は御話の中で祖国は我々の単に外にあるのではなく内側にもあるとおつしやつてをられました。又山内先生は現在の日本のゆゆしきことは世代間の断絶にあるとおつしやいました。やはり私達の内側に厳然として流れて来たものが絶たれてしまふといふことは何といふ不自然で悲しいことでありませうか。この合宿で私は改めて忘れ去られようとしてゐた日本人としての一體感をまざまざと感じさせて戴きました。最後に第十一班で寝食を共にした仲間と本当に初めてお會ひしたにも拘らず、心が打ち解け合へるまで親しくなりました。こんな素晴しい班で過ごせたのは非常に恵まれてゐたと皆さんに感謝してゐます。

みじかくも語りあひたる友どちと心かよはすことぞうれしき

歴史の継承を実感した

（九州大学　工　四年　黒木雅裕）

三年振り三回目の参加となった今回の合宿を通して、自分

美しい景色を眺めながら昼食をとる。筆記用具を手に，短歌を作る人の姿も見られた。

が最も考えさせられたのは歴史の継承という事であった。普段自分はサークルの活動において、学生の手による勉強合宿を年に数回開催しているが、今回改めて下は十八、上は七十八に至る幅広い年齢層の人々が二百名以上も集まつて同一の合宿研修を受けていく当合宿の、他にはない特異性に改めて驚かされた。しかも、その世代を越えたつき合いは、寝食を共にし、肝胆相照しつつ行われた。丁度親爺の世代に当る班付の柴田さんと語り合う中で親爺の生きて来た時代の激動、苦労が少しなりとも知れて良かった。又長内先生の御講話を聞きつつ、自分よりも半世紀も長く生きて来られたその事実の重みが全身に迫ってくる様であった。そして白井傳先生が展示された和歌冊子を繙き、直筆の一首一首を味わいつつ、神代からの敷島の道の伝統と天皇様への敬慕の心を先生を通じて知れる事に、限りない喜びを感じた。歴史が活字を超えて、具体的な先輩方、先生方の肉声や振る舞いを通して自らに迫ってくる大変貴重な体験であった。

夕暮れて灯く電燈の美しく宿舎の庭のをちこちを照らす

見知らぬ人との出会いが魅力

（北九州大学　法　三年　倉光正明）

来年も参加しようと心に決めるのに合宿最終日までかからなかった。私は合宿二日目に祖父が亡くなった知らせをうけた。しかしこの合宿に参加をすすめてくれたのが祖父であったこと、又自分自身がこの合宿を最後迄やりとげたかったので葬式には帰らなかった。だが合宿も終わりにきて実家へ帰る時が近づくにつれて葬式に参列しなかったことを後悔するのではなかろうかとの迷いもあります。しかし合宿をやりとげた満足感もあります。この合宿の魅力の一つに見知らぬ人との出会いがある。祖父の勧めが無かったり、又今迄のように祖父の勧めを断わっていたら班友達との出会いもなかった。私達が日本人として生まれたように、私はこの合宿に参加した事に運命的なものを感じてしまう。人との出会いが運命ならば、私達はそれを大切にして、更にその交友を深めてゆく事に努力をしなければならない。来年の合宿教室は九州の阿蘇で行われる予定と聞いている。又新しい出会いを楽しみにしている。

祖父の訃報をききて
ふるさとの悲報を聞くも帰らぬとひとり心で祖父に別れす

自分を表現するきっかけがつかめた

（拓殖大学　外国語　一年　長谷川秀樹）

私は、この合宿に参加してとてもすばらしいものを得たように思います。まず始めに、自分の考えを正確に他人に伝えることがいかに難しいかを教えられました。討論などという経験なんか全くない私はすごく戸惑いました。しかし討論を重ねていき、他の人の発言の仕方をみて、発言するコツをつかみ、少しずつ話せるようになりました。私はこの経験を生かして、これからも機会がある毎に実践してみようと思って

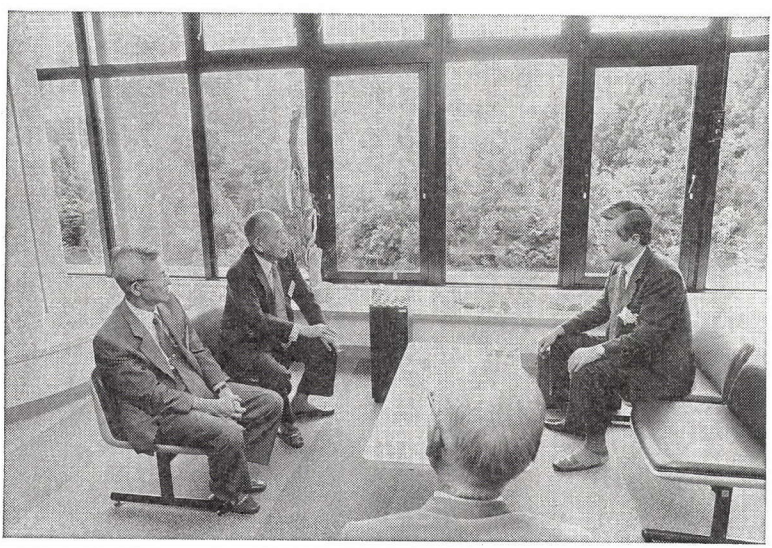
います。それから私は他の人に較べ、いかに知識が乏しいかを知りました。討論の時など、他の人達が知っていて当然のように話している事が私にはさっぱり理解できませんでした。私はこの時、このままでいると将来、自分は社会にでても、役立たずの人間になってしまうのではないかという危機感を感じました。この事に気づいたことは私にとって、とてもプラスになることと確信しています。

しづかなる青き森からうぐひすの声聞えきて耳かたむける

心の垣根をとり払い、本音で友と語りあえた

（防衛大学　理工　三年　松永秀嗣）

私はこの合宿で、人との出会いの大切さ、友を持つことの喜びを学びました。二十一歳になる迄でも、多くの人との出会い、別れ、そして又出会うと言った様々な経験をしてきましたが、こういった形で人間関係の大切さを再認識したのは初めてです。合宿の初日は同班の人の顔だけを見て、「この人は何を考えているかわからない」とか「とっつきにくそうだな」とか勝手に判断したものでしたが、班別討論を重ね、顔をつき合わせる回数が増えるたびに、それ迄自分が抱いていた固定観念が取り払われ、自分の内面を抵抗なくさらけ出すことが出来る様になりました。今迄の私は初対面の人に対して余計な抵抗感を抱きすぎる為、いつまでもギクシャクした人間関係が続いていました。これからは不必要な垣根は、できるだけ取り払って、本音で人とつき合えそうです。



合宿地に到着され，ロビーで歓談される田久保忠衛先生。

最後に、私に様々なことを教えてくれた十一班の皆さん、その他の先生方、又、合宿を陰で支えて下さった指揮班の皆さんに感謝いたします。ありがとうございました。

いく重もの心の垣根のり越えて得たりし友を大切にぞ思ふ

第十二班—男子学生—

より身近になった日本の歴史、伝統、天皇

（亜細亜大学　経　四年　茅野輝章）

今回の合宿を振り返へると、昨年にも増して、先生方のお話が心に響いて来たやうに思へました。また、講義や班別討論を通じて、日本の歴史、伝統、天皇陛下のことなど、より身近に考へることが出来たやうに思ひます。今までに知つてゐたことであつても先生方の口を通して話される言葉に新しい感動を呼び起こされました。先生方の感動が自分の心に共鳴する思ひをしました。広瀬誠先生は、この合宿地は昔、相模の国であつたと話され、この地にまつはるヤマトタケル、鎌倉右大臣、終戦時の話をとつとつと語られたさま、古事記に出てくる神々の物語を生き生きと話されたさまは非常に印象に残りました。

また、長内先生の御講義には、「言・事・心は一体のものであり、美しいものは美しいこころから生まれるものである」と言はれ、現在の環境汚染、政治腐敗等のことこそ私達国民の心を表はしてゐるのではないかといふ、先生の心から語りかけられる言葉に圧倒される思ひが致しました。

合宿全体を通じて、先生方の日本を思ふこころ持ちがしみじみと伝はつて来るやうな気がしました。

七沢に集ひ来たりてみ友らと語り合ひにし日の本の国

「新日本建設に関する詔書」の真の意味

（鹿児島大学　農　二年　椎原恒介）

特に印象に残ったのは、山内先生の御講義の中の「新日本建設に関する詔書」を出された時の昭和天皇の御話です。小田村先生が最後に仰言った様に、確かにあの時の訳には致命的な欠陥があった。しかし、自分がショックを受けたのはその事ではなく、陛下が国民に、日本人としての誇りを忘れない様に、冒頭に五箇条の御誓文を入れられたという事実です。そして陛下御自身仰言っておられる様に、むしろそれを言いたいが為にあの詔書を出されたのであって人間宣言は二の次だったということです。国民に誇りを持ってもらいたいとの思いで出された詔書が「天皇は神ではなかった」として広められた時の陛下の御気持が偲ばれてなりません。あの詔書がもっと、そういう意味において味われることをただ祈るばかりです。

先帝の国思はるる大御心皆にとどけとただ祈るなり

日本文化の一面に触れ考え方が変った

（金沢経済大学　経　三年　高嶋　晃）

私は、今回、この合宿に初めて参加させて頂きました。この合宿で少し視野が広くなったなと思いました。今までの私は、男は行動力があればいい、学問なんてものは社会に出てたいして役に立たないという偏った考えを持っていました。しかし、この合宿に参加し、先人の考え、思想、先輩方の体験談、現在の国際情勢、そして和歌・短歌といった日本の文化の一面に触れまして、考え方が変ってきました。どのように変ったかと申しますと、物事をいろんな角度から観察しなくては真実が見えてこないということが分かったことです。今回の合宿で自分の無知さがよく分りました。

コツコツと時計は時を刻みゆく別れを惜しむ気持ちも知らずに

モラル、道徳の言葉が多すぎた

（防衛大学　人文社会　三年　浦口　薫）

この合宿では「モラル」とか「道徳」とかいった言葉が多用されたように思う。確かに役人は清く正しくあるべきだし、不正は正すべきである。しかし、実際には、社会にそのようなことを訴えても、具体的に何をするかのプランを提示しなければ何も言っていないのと同じである。そのようなスローガンは、たいていの場合、何も生み出さないし、美しい言葉の影に一層の悪がはびこるという悪循環を生み出す。実

三日目午後，杏林大学教授・田久保忠衛先生により「激動する国際情勢と日本」と題された御講義が行はれた。先生は国際情勢を分析する三要素として「広い視野」「事実の把握」「国際常識に基づく判断」を挙げられ，最近のソ連の激変を中心に語られた。

際、共産主義の本質とは言葉で現実を隠してしまうことにあったのではないか。天才を必要とする社会は病んでいる。我々は凡人が役人や政治家になっても、しっかりと国家運営のできるシステムを模索すべきなのである。

木もれ陽の山の小路をみ友らと連れ立ち登る時ぞ楽しき

本音の語らいから多くの考え方を得た

（福岡大学　工　四年　清家和弥）

この合宿に来て全国の様々な学生とまみえることが出来て本当によかった。画一的な語らいで終りがちな大学生活の中にいる私にとって、一人一人が本音で語り合えば本当に多種多様な考え方があるという事実にぶつからざるを得なかった。十人いれば十の心根がある。それを素直に認められた時、他人の心も、自分の心もかけがえのないものとして本当に大切にしていかなくてはいけないなあと思った。

また、山内先生の話の中で、日本の立場としての大東亜戦争が太平洋戦争に置き換えられたという事実、これにより日本人の目と心が数年前のことも正しく見れなくなったこと、その結果、戦う決意のある青年が韓国やアメリカに比べ日本ははるかに低く、一〇％しかいないとの事実に憤りを覚えてしかたがなかった。

はるかなる山の景色をたたずみてながめ入るひと何思ふらむ

謙虚に先人達の生き様を学びたい

（早稲田大学　教　二年　真庭宜幸）

最も印象に残ったのは長内先生の御講義です。今の人というのは自分というか現代の尺度を絶対とし、現代の尺度で過去を裁いてしまっているように思います。我々の先人達はその時代その時代を一生懸命に生き、時には祖国のために勇敢に戦って命を落とすこともありました。そうした人達に対して「戦争なんか起こしやがって」と思ったり、沖縄戦で亡くなられた方々に対し「彼らは犬死にであった」とか「日本軍の犠牲になったのだ」などというのは、まことに傲慢な態度であると思う。先人達の生き様には、さかしらな知恵などでは計り難いものがある。もっと謙虚になって彼らの生き様を学ぶ必要があると思う。

感動はいずこにありとみ友らと和歌の批評に時を忘るる

さまざまな地方ゆ来たるみ友らとけふは別れとなりにけるかも

これからの人生の〝大きなきっかけ〟を得た

（拓殖大学　外国語　一年　中澤謙一）

ここへ来た動機は誠に不純でした。ですから、来る前日はとても重い気分でいました。しかし、いざ来て講義を聞き、班員と討論をしてみて、これは本当に来てよかったと改めて思っています。〝十人十色〟、班員の一人一人が私のおよびもつかない様なところまで考えておられるのにとても驚き、自

分の概念の枠が一つ一つ広がるような心地がしました。また、自分の表現力のなさ、視野の狭さ、物事を深く考えていく注意力のなさを痛感させられもしました。講義等により、自分の知らなかったことを知ったり、知っているつもりでいたことには、まだまだ奥があったり、それを味わうことができたりと非常に有意義で充実したものでした。

今現在、能力の上では、以前と変わらないと思います。しかし、これから私が進んでいく人生を有意義かつ充実なものにしようと考える上での〝大きなきっかけ〟となったことは確かであろうと思います。

忘れまじ友とすごせしこの五日いくとせ経ても色あざやかに
七沢に集ひすごせし友どちとまたいつの日か会はむとぞ思ふ

第十三班—男子学生—

長内先生の話で自信が

（防衛大学　理工　三年　濱口和久）

昨年に引き続き合宿に参加させてもらいましたが、今年は昨年以上に感動が大きかったと思います。私は、合宿に来ると将来の自分の進路への不安、悩み（自衛官に成ること）が解消される思いがします。諸先生方のご講義はどれも心を打つものばかりで感動します。特に今回、長内先生の力強い話を聞き、自分なりに少しずつ自信がもてるようになってきた

田久保先生の御講義を真剣に聞く学生。

と思います。日頃、あまり一般の大学生と、じっくりと話す機会の少ない私にとって、このような場を提供してくださる国文研の皆様には、大変感謝しています。班員の人数が初めの五人から途中で四人にへり、人数が少なかったぶん班員がお互い深く本音で色々な事を語りあえたと思います。これで良き友人がまた増えたと思います。この合宿が終わっても、この感動を来年の合宿まで持続していければよいと考えています。最後に、班長以下、班員ならびに班付の小田村先生にお世話になり、どうもありがとうございました。

長内先生の講話をお聞きして
いつまでも情熱もちて語られる師に我の心はときめく思ひ

和歌にこめられる気持ちの強さを感じた

（中央大学　法　四年　古川広治）

合宿最終日に歌稿の追補といふことで小林先生、小柳先輩、山田先生から和歌が送られてきました。拝読させていただきこの合宿によせられる諸先輩方のおもひを強く感じました。そして講義では和歌の大切さ、すばらしさといふことを幾度となく聴いてきましたが、和歌にこめられる気持ちがいかに強く貴く、すばらしいものであるかといふことをあらためて感じました。とても美しいことだと思ひました。

大木君、また会はう！

最後の昼食を終へ部屋にもどりて
もくもくとノートを見つめ先輩は今「できた」と高くさけび給ひぬ

短歌創作は難しい

（早稲田大学　社会科学　二年　相差健史）

短歌創作ほど難しいものはない。なんだかこの合宿でこうした気分になってしまった。「自分が感じたことを素直に表現すればいいんですよ」と皆に言われても失敗したくはないと妙にかまえてしまい、つくってはみたものの結局幼稚な歌しかできなかった。難しいという気分に結局はなってしまったわけだが、私の幼稚な歌を評価して下さった先生がいらっしゃった。長内先生である。私は先生にお会いした時のことを歌に詠んだわけであるが、先生はその歌を御覧になった後で「歌に詠んでくれてありがとう」と私に言ってくれたのである。正直うれしかった。うれしかったけれども短歌が難しいという私の気持ちは変わらないでいる。残念である。

長内先生の講義を拝聴して
先生の心のこもる御話を聞けばまなこにあつきもの感ず

第十四班—男子学生—

飾らぬ言葉のやりとりは、新鮮で嬉しかった

（早稲田大学　法　一年　三島圭介）

祖父に勧められて参加したこの合宿教室。初めてのことで戸惑う事も有りましたが、あっという間の五日間でした。こ

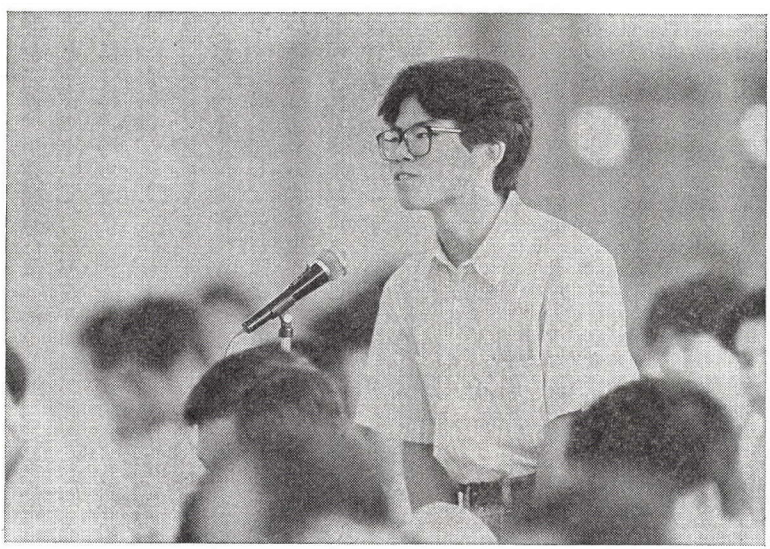
れほど密度の濃い時間を過ごせたのは、初めてではないかとさえ思っています。数々のご講義や輪読。知識として吸収することも多々有り、勉強会としても素晴らしかったこの合宿ですが、それだけに止まらないのがこの合宿のすごい所でした。いつも何かとかっこつけてポーズをつけて話したがる傾向のある私にとって、班別討論、短歌相互批評での生の気持ち、飾らぬ言葉のやりとりは、とても新鮮で嬉しいものでした。また、そういったやりとりの出来る友を得たということは、私にとって非常に大きな財産になるものと信じています。

いにしへの伝統文化を受け継ぎし日本の国に我は生まれし

「日本人」であるという自覚が生まれ始めた

（明治大学　法　三年　冨野善一朗）

私は、ここまで真剣に日本の歴史や天皇について考えたことはなかった。しかし、四泊五日のこの合宿で、生まれて初めて短歌を作り、班友と互いに批評し合う機会を作れたことで、自ら「日本人」であるという自覚が生まれ始めた。そして、その中で天皇のお人柄を御製の御言葉から見出すことができたような気がした。そして、日本人の祖先には、これほどまでに偉大な人々が存在し、ゆえに今の日本が存在することを思う機会ができたという事実は、必ずやこれからの人生になんらかのプラスになるであろうし、また、人生の糧としなければならないと感じた。今まで、自堕落な生活をしてい



御講義の後，質疑応答の時間が設けられた。田久保先生は，学生の質問に対し一つ一つ懇切にお答へ下さつた。

た自分が、このような合宿に出会えたことに、深い感動と喜びを覚えている。

日の本を机を囲み学ぶたび国人なるを改めて思ふ

傲慢さを捨て、慎しみの心で、対象に迫っていく

（福岡大学　経　三年　梅崎建吉）

班友と真剣に意見を出し合ったり、談笑したりしている時の自分の心は、とても豊かな気持ちで満たされていたように思います。特に短歌相互批評の折に、各人、中々心のままを言葉に表現できていなかった和歌が、皆で詠んだその人の心を感じ取ろうとしていく中で、不思議なぐらいその心を表わし得たものになっていった体験は感動的でした。またこの合宿で一番学んだ事は、物事や人、またはその人の心に対しての姿勢です。それは、どんなに分らない事があっても、或は簡単そうな事でも、決して好い加減に分ったふりをしない事であり、また簡単に分らないといって投げ出さない事です。つまり、物事に対する傲慢さを捨て、慎みの心を心掛け、真実を心に感じ取れるまで、対象に迫っていく事です。

短歌相互批評の折りに
全員で心一つに偲ぶれば心表はす和歌になりけり

日本人としての自覚が持てるきっかけとなった

（拓殖大学　外国語　二年　小久江克訓）

正直言って、合宿のスケジュールを見た時、「どうしよう」と思った。これが合宿の始まりであった。そして、不安と緊張を抱き、開会式場へ向った。しかし、お互いに挨拶を交わすと今まで抱いていた不安と緊張が和らいだ。そして時が経つにつれ、落ち着き、充実し、六人の友と気軽に話すようになった時は、楽しくて楽しくてたまらなかった。班別討論でも、食事の時でも、充実感で一杯だった。最初に抱いた感情とは、全く正反対の気持ちになっていたのである。私は、この合宿に参加したことによって、日本人としての意識、自覚が持てるきっかけとなったことをとても誇りに思うし、また友にもたくさん出会えたことをとても満足している。有意義な合宿であったと心から思っている。

せみの声緑風かをる七沢の山昔の田舎の面影ぞある

漸く、霧が薄れてきた

（東京大学　法　四年　松岡恒男）

二年前の合宿に参加した時、自分が特定の思想にがんじがらめにしばられるような感じを受け、もう合宿には二度と参加すまいと感じ、相当反発しましたが、今回は言葉に籠められた魂のようなものをなんとかしてつかもうと努力をし、短歌相互批評も三年目にして、初めて面白くなってきました。本当に心の底から求めたいとの気持ちに、漸くさしかかりました。自分なりに学んだことを受け止めて、糧にしてゆきたいと思います。一時の感情に流されているのではありません。今回の合宿はまだ物足りなく、もっと学んでみたかっ

た。参加してみて、漸く、霧が薄れてきました。

まだ足りぬ学びたきこと多かりし気持ち半ばに山を下るか

自分の学問、人生を切り開いていきたい

（山口大学　工　一年　高村雅一）

合宿に参加して普通では出会うことの出来ない、いろいろな人とめぐり会えて本当に良かったと思います。班別討論で自分の思っていることを、それぞれが飾らずに話し合うことが出来るような場は、今の大学生活ではあまりない中で、このような合宿は大変重要だと思います。聖徳太子の十七条憲法などについて学んでいく中で、古くから伝わっている物について改めて考えさせられました。過去が現在に向かって、迫って来ていることも、忘れてはならない事実だと感じました。このことを踏まえた上で、これから自分の学問を、人生を切り開いていきたいと思います。

いにしへは今に向かひてせまりきてあまたの文化をつくりたりけり

第十五班—男子学生—

学生生活最後の夏に

（金沢工業大学　工　四年　川合晃義）

この合宿に参加する時、最初は余り気持が乗らなかったが、友達を探す機会にもなると思って参加することにした。

富山女子短期大学教授・広瀬誠先生の御講話はこの合宿地が『古事記』の昔から相模の国と呼ばれ，歴史に深く関はつてきた土地にあることを語られた。そして，『古事記』に出て来る神々の名前が大変美しく，又立派なものが多いことをお話しになられた。

しかし、実際に先生方の話を聞いてみると、今まで自分の耳にしなかったことを知ることが出来てよい経験になったと思った。講義については素直に聞き入れることの出来るものから、全くと言っていいほど理解できないものまで様々だったが、これも何かの経験だと思えばプラスになったと思う。天皇陛下や十七条憲法については、はっきりとした自分の意見というものを、合宿が終った今でも持つことは出来なかったが、いずれは答えを出さなければならないと思う。

このような機会を学生生活最後の夏に与えてくださった先輩には心から感謝したいと思っている。

友

七沢に集まり来たる友ありて時を忘れて語り合ふかな
みず知らぬ初めて会ひし友達も別るる時は淋しかりけり

将来の進路への不安が消えた

（防衛大学　人文　三年　森安宏徳）

合宿が終わった今、この合宿に参加して本当に良かったと思う。普段の生活では知り合えない人達と会い、そして共に胸の内を語り合うという体験、素晴らしい御講義、その他様様な、ここでしか出来ない体験をすることができた。

また日本の国の伝統や大君のことについて改めてその大切さを思い知らされ、ほんの少し自分の心の中に存在していた将来の進路への漠然とした不安が消えていった。

来年もまたこの合宿に参加したいし、次の年もまたその次の年も、社会人になっても参加したいと思う。国文研の先生のどなたかの歌に歌われていたが、数十年後、白髪が混じりはじめた頃、私もこの素晴らしき友と再会することが出来れば幸いである。

慰霊祭にて

国のため命ささげし丈夫（ますらを）の心知らむとちかひぬるかな
大君の辺にこそ死なめ丈夫の熱き思ひを我もつがなむ
国のためただ国のため君のため命ささげしみ霊（たま）をしのぶ

賛成できない考え方も沢山あった

（北海道工業大学　建築　二年　藤原哲彦）

この合宿に参加してみて自分に得たことと言えば、いろいろな地域、いろいろな考え方、いろいろな大学、いろいろな年齢の人と知り合えたこと。また知り合えただけでなく、班員と親友となれたことが、私にとってただ一つの収穫でした。

自分は短歌など、国文研がこの合宿で私達にやらせたいことは分かりますが、自分には全く興味がなく、やる気のやの字も出ませんでした。また国文研の考え方に賛成できないことも沢山ありました。

最後に、この合宿で出来た親友とまた会うことを願いたいと思います。

日を重ね語らひゆけばいつしかも親しき友となりし我らは

言葉の大切さを痛感した

（早稲田大学　社会科学　一年　高橋秀和）

この合宿に参加した動機は、サークルの先輩に「絶対いいから参加してみろ」と言われ、ごく軽い気持ちでしたが、一日二日とたつうちに、班の皆さんともうちとけることが出来、徐々に本音で語り合うことが出来るようになり、本当にこの合宿に来てよかったと思えるようになりました。

また合宿を通して感じたことは、言葉が如何に大切であるかということでした。短歌創作の時は思い通りの言葉が浮かばず本当に苦労しました。また最後の小田村先生のお話で、「神」と「ゴッド」の違いについて触れられましたが、明治時代に聖書が翻訳されて百年後にこれほどの影響を与えるとは、言葉の恐ろしさというものを感ぜずにはいられません。

私が一番感動したのは長内先生の御講話でした。独特の口調、そして迫力に圧倒され、自分が如何に小さな人間であるかを思い知らされ、終始涙を禁じ得ませんでした。

み友らと心開きて語らふとは思ひもかけず一年前は
去年の日を思ひ返せば大学を目指して我は学びをりけり

平和憲法は国際社会に通用しないか

（拓殖大学　外国語　一年　千葉竜太郎）

この合宿に参加して、自分は今まで関心のなかった短歌に関心を持つことが出来た。それは坂東先生の講義で、坂東先

カメラ・レポート22

慰霊祭について説明される福岡県立玄界高校教諭・日比生哲也氏。「二礼二拍手一拝」「最敬礼」など神まつる手ぶりについて，また「海ゆかば」の歌唱指導など，初体験の学生たちにわかりやすく説明された。

生がいつも短歌を作って歩いていることを聞いたからです。自分もこれから短歌を生活に生かしていこうと思います。

また小野先生の「教育体験を語る」の講義を聞いて、教育には厳しさとともに深い思いやりが必要であると思った。

山内先生の講義の中で平和憲法は国際社会に通用しないと言ったことに自分は不安を持った。自分は専ら平和が好きな人間である。もし平和憲法がなくなったら元の戦前体制に戻るのが心配である。でもこの合宿において日本文化というものを学べた。また「この班の人達と同じになれてよかった」と誰かが言ってくれた。それを聞いて嬉しかった。

班友と語りてをれば眠気さし顔を洗ひてまた語りゆく
カルカデのかほりただよふ飲物をアサヒビールの師にいただけり

第二十一班—女子学生—

心を働かすことの難しさ

（早稲田大学　政経　一年　伊藤華恵）

この合宿に参加して、とても得難い体験をすることができました。先生方の御講義では、今まで自分の中で形をとり切れずにいたものに、形をあたえるような言葉をたくさん与えていただきました。また、班別討論では、心を働かして考えることが難しく、自分でも何を言っているのかわからなくなってしまっている私の意見に、皆が耳を傾けてくれたことは本当に嬉しいことでした。ほんの数日前までは全くの他人だったのに、そういう人達と心を開いて語り合えたことや、友達になれたことも嬉しく思っています。

合宿中を通して「すべてのことは、まごころに帰っていくのだ」と感じていました。まごころを持って人と接していくということが、今後の課題のように思えます。

最後の班別懇談を終へて
「ふるさと」をともに歌へば我知らず思ひせまりて涙あふるる

よい思い出の数々

（拓殖大学　外国語　一年　酒井亜紀子）

思えば短い四泊五日の合宿でした。講義はたくさんいいことをお話し下さいました。とても全部を理解することは出来ませんでしたが、何年か後には、心から理解できるようになりたいと、今は固く心に刻み付けてこの合宿を終えようと思います。

一日目に、班員の名前を覚えるために行った名前ゲーム。今まで掘り下げて考えることのなかった十七条憲法、天皇、御製等々、足りない知識を先生方に補ってもらって行った班別討論。今ではどれもこれもよい思い出です。この合宿を無事終えるために真心をこめて見守り、私達の身の回りのことを手伝って下さった方々に深く感謝したいと思います。同じ日本人として生まれたことを誇りに思います。

「合宿を顧みて」と題する小田村寅二郎先生のお話しを聞きて

日本の神々をゴッドと訳せしは誤りと初めて知りぬ師のみ言葉に

心の通う友を得た

（長崎大学　教　四年　早田保美）

今回の合宿での一番の収穫は、何よりも心の通う友を得たということです。自分の殻にとじこもりがちな私でしたが、心を尽くして班の方々の心に深く入ってゆく中で、心の通い合い、響き合うよろこびを心から実感させていただきました。また、人と人とが付き合うことは実に難しいことだと感じました。いかにこれまでの生活の中で心をはたらかせていなかったか。人と共に生きていくことの大切さをしみじみと感じさせていただきました。

今回は四回目の参加でしたが、先生方の真摯なお姿を拝見しつつ、学びとはここまでということはなく、どこまでも続くものであると実感させられました。だからこそ、これからの一挙手一投足に心を込めてゆきたいと思います。

互に心を寄せしみ友らと今日別るるはただに悲しも
共々に涙流しつ語り合ひしかの夜のこと忘れざらめや
合宿を終はりて後も文送りともに心を通はせゆきたし

自分の意見を言えるようになった

（拓殖大学　外国語　一年　太田幸子）

私はこの合宿で、自分の意見を言う難しさを痛感しました。普段の生活で討論する機会のほとんどなかった私は自分

戦時・平時を問はず，祖国日本の為に尊い御命を捧げられた方々の御魂をお慰めする「慰霊祭」が，夜のしじまの中しめやかにとり行はれた。

の意見を述べることが苦手でした。だから、この合宿は、本当に辛く感じられました。でも班長さんが、そんな私に意見の言い易いように進行して下さったので、その心づかいが、すごくうれしかったです。おかげでこの五日間で、大分自分の意見を言えるようになりました。班別討論は八人が自分なりの意見をはっきり述べるので、自分一人の狭い見方に偏らないで広い見方が少し出来るようになったと思います。私にとって班別討論は何よりも価値のあることだったと思います。

心からこの合宿に参加してよかったと思います。

討論を終へてしみじみ思ふかなおのが意見を述ぶる難さを

真心に触れて

（日本大学　文　修士　二年　小坂りか）

今、心の底から班の仲間と離れ難く感じています。心が通っているとの実感を膚にひしひしと感じています。先程の班別懇談の時、一人一人の感想を聞いていると心に喜びが広がり、胸のあつくなるのを覚えました。

今回、何よりも得ることができたと思うのは、人の真心に触れたことではないかと思います。心が通う――このことを体験し、実感できた、これほど得がたいものはないと思います。〃心を開いて語りましょう〃と言いつつも、固くなっていたのは自分であったと気づかされました。それを教えてくれた班の皆に感謝しております。どうもありがとうございました。

最後の班別懇談にて

おもひがけず涙いださるる師の君のお顔見られずうつむきにけり

うつむけど御心のうちの思はれて涙ながしぬ胸つまりつつ

この感動と経験を今後の原動力に

（中村学園大学　児童　一年　石原敬子）

クラブの先輩方や学校の勧めで来たこの合宿。不安ばかりが先に立って最初の一日を迎えました。けれど、班のみんなに、そして加納先生に出会ったことで、最高の幸福となりました。お互い知らない顔ばかりだったのに、いろんな意見が飛び交ったことは驚きであり、うれしくもありました。みんな真剣でした。そんな姿に胸をうたれ、このようなすばらしい経験の持てたことを、一日目から感謝せずにはいられませんでした。この合宿で私が手に入れたものは、心からぶつかっていける友達、大きな温かさを湛えた先生方、日本人に生まれたことへの感謝と誇り、人前で話すことへの自信、学ぶことへの欲求などです。五日間の感動と経験をいつまでも忘れることなく、今後の原動力にしていきたいと思っています。

加納先生、小柳先生のお話しを聞きて

天皇を語らるる笑顔にひしひしと日本に生まれし喜び感ず

人間らしい生き方を

（九州女子大学　文　一年　森山　薫）

四泊五日という、今までの人生のほんのわずかな日々に、言葉では表現できないほどすばらしい経験をさせていただきました。日本人であるなら当然考えなくてはならない日本の歴史、特に「天皇」というその核ともいうべきご存在についてもいろいろ教えていただきました。又、昔の人が残した和歌を通してその人の思いに触れることも、一つの歴史の勉強であることを初めて知りました。

この合宿に参加して一番良かったことは、班の人や班付きの先生方と真剣に意見交換ができ、交流をより深められたことです。自分の意見に耳を傾けてくれたり、自分がいろんな人の考えを聞く喜びを体で感じることができました。みんなが苦心して心と心の触れ合う関係を作り出そうとし、そのことによって家族以上といっていいほどの親近感を、今感じています。最後に加納先生が、「人間らしい生き方をしよう」とおっしゃられたことが心の奥深くに残っています。

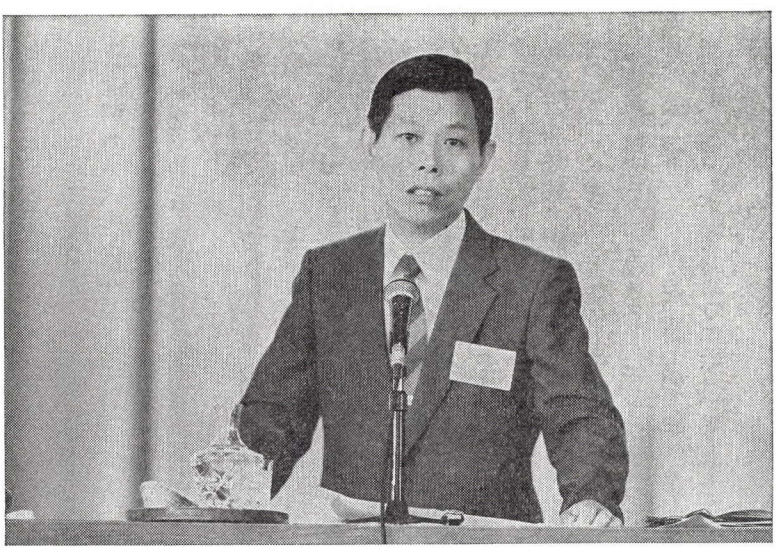
「ふるさと」を涙ながしつ歌へどもくちびるふるへて言葉にならず

班の友らに助けられて

（尚絅短期大学　学園事務局　若杉留美　20歳）

初め、この合宿を薦められた時から、〝こんな世間知らずの私が〟と思い、行きたくないというのが本音でした。初日

カメラ・レポート24



神奈川県立湘南高校教諭，亜細亜大学非常勤講師・山内健生氏により「戦後思想からの覚醒を！―より人間らしく生きるために―」と題する御講義が行はれ，「刹那的・唯物的な物の見方や感じ方」を特徴とする戦後思想を克服するやう強く訴へられた。

から班別討論があり、今まで考えたこともないような事を聞かれても、返す言葉がなく、三日目くらいまで、正直いって〝もうイヤだ〟の一言でした。三日目の夜でした。胸につかえていたことを班のみんなにすべて話してしまったらすっきりして、四日目からは気が楽になりました。班の人達には助けられ、感謝の気持ちでいっぱいです。

また元の生活に戻っていくわけですが、合宿での体験を自分なりに深めていくとともに、班での友の言葉を忘れないように頑張っていきたいと思います。

我が思ひ語れば友のこたへくれるその真心に涙あふれる

第二十二班 ―女子学生―

真心をありがたく思える人間になりたい

（関東学院大学　英米文　一年　小塚由紀子）

この合宿に参加して、物の見方、価値観がとても変わりました。「ことば」の一つ一つがこんなにも大切なのかと改めて感じました。今までの私の口から出ていたものは、本当のことばではありませんでした。

ことばには真心がこもっているのですね。ことばからその国の精神がわかると聞いて、はっとしました。〝ことば を 話す〟こんなに易しそうで、おそろしいことはないのではないかと思います。もっと、心を働かせて、生きてゆきたい。人の真心をありがたく思える人間になりたい。

合宿は、本当に恵まれていて、充実していました。やらなくてはならないことよりも、やりたいことを気付かせてもらいました。日本人として生きようと思います。

真心で生きるよろこび分かちあふ友と語りて夜もふけゆく
言の葉の奥にかくれし真心の大切さを知り胸にやきつけん

国文研の先生方を見習って視野を広げていきたい

（湘北短期大学　生活科学　一年　出野晶子）

私がこの合宿に参加したのは、学校に貼ってあるポスターやパンフレットの「人生や学問、社会について真剣に語りあおう」と言うのを見て、こういうことを真剣に話す機会が少ないので、ぜひ一度参加して、真剣に考えてみたいと思い立ったからです。はじめは国歌を歌うことや、天皇についてのお話に抵抗を感じ、おどろくばかりで、講義も分らない事が多かったのですが、班別討論で分り易く真剣に話される先生や友の言葉に、理解しようともせずにただ非難の目を向けていた自分がはずかしくなりました。まだすべてを理解しきれたわけではありませんが少しでも国家や天皇を身近なものとして感じ、誇りに思えるようになり、うれしく思います。

短歌創作では、三十一文字に自分の感動を込めることの難しさと共に、歌は自分を見つめ直し、相手の素直な気持ちを知る手段なのだということが分かりました。今まで和歌は年寄りがするものだと思っていて、まさか自分が和歌創作のよ

さを知ることができるなんて思ってもいなかったので、自分の中で精神世界が広くなってよかったと思います。

本当にこの合宿で得たことは多くて、自分が少しですが成長できたように感じられて、参加してよかったと思います。何歳になられても日本の将来について真剣に考え、学問を求め続ける国文研の方々を見習い、学問をしつづけ、視野を広げていきたいと思います。

国文研の方々に感謝して
真心のこもる想ひに支へられ尊き師らに我もつづかむ

自分の生活、考えの甘さを恥ずかしく思う

（九州女子大学　文　二年　久賀菜穂子）

まずこの合宿で、行う事、考える事の深さやもどかしさ、苦痛、忍耐等について、改めて自分に問いかけることが出来たように思う。私は自分の生活が、今まであまりにも怠惰なものであると気付いているくせに、一方で気付きたくないと思っている自分自身に寒けがした。気付きたくないという気持ちが私から、深く考えることへの扉を閉ざしていた。心から共感できる御講義があったのは非常に嬉しく、自分がこれからの道を考える上での原点となるものを学び得たと思う。自分の生活、考えの甘さがむしょうに恥ずかしく思われる。

班別討論では、真剣な眼で語る友人達の姿に、心がギュッとしめつけられる思いがし、その言葉や表現、表情が素晴しく、こんなにも真剣に物事について考え、取り組んでいる人

「創作短歌全体批評」をされる山口県立高森高校教諭・宝辺矢太郎氏。氏は「自分で作つて人に聞いてもらふのが，歌を作つていく上での練磨になる」と相互批評の意義を語られた後，歌稿の中から二十首程の短歌を取り上げられ，懇切に添削されてゆかれた。

が身近にいて、巡り合えたことをうれしく思う。

私にとって、この合宿は、これから学んで行く上で、一つの岐路であったと思う。大学生活は後二年だが、どんな時にも、私は、この国文研で講義をされた先生方や班の友人また心から話をして下さった先輩方を誇りに思い、迷わずやって行くことができると確信している。

夜、清水久仁子先輩の話を聞きて
心こめ思ひを語る先輩の頬つたふ涙に心うたるる

日本を愛する心を大切にし、伝えていこう

（福岡大学　人文　二年　進藤裕子）

この合宿に来て、今、自分自身が見つめ直すべき課題を新たに与えられたような気がしています。〝学生〟という学問をするに十分な環境にいながら、本当の意味での学問というものができていなかった自分を深く反省しました。

普段なかなかお話を聴くことのできない先生方に、和歌を詠む心や、教育の真のあり方などを通して、日本人としてどう生きていくべきか、日本を愛する心を教えていただきました。今まではどこか、自分自身、理屈っぽくなっていたような気がします。でも今回、この合宿に参加してみて、先生方の御講義の一つ一つや班員の皆との討論から、日本を愛する心は、誰れの中にも在るのであり、その心を大切にし、伝えていくことが、日本人として日本人らしく生きていくことになるのだと実感しました。

心は、はたらかせなければ鈍るものだと思います。既に社会人として職場で活躍しておられる方や、教職に就かれておられる先生方までもが、こうして私たちと共に合宿に参加しておられる姿を見て、学問とは、人の一生を貫くものだと思いました。私もここで教えて頂いたことを礎として、学びを深めたいと思います。

日の本に生まれし誇り語り給ふ友どちの姿に心うたるる
我もまたかくありたしと愛国の情を深めし厚木の地にて

短歌を作る喜びと楽しさを知った

（拓殖大学　外国語　一年　木下潤子）

この合宿で、ほかでは学ぶことのできないたくさんのことを勉強しました。先生方の御講義は難しいものでしたが、日本の文化、言葉の大切さなどを教えて頂きました。

班別討論では、同班の方々のものの見方、考え方がとてもしっかりしているのに驚き、自分の足りなさを思い知らされ流されるままに生きてきた自分を深く反省しました。ここで学んだことを心にとめて、自分を向上させたいと思います。

初めて短歌を詠みました。坂東先生が「思ったことを素直に歌にすれば良いのだ」と言われましたが、それがとても難しくてなかなかできませんでした。しかし歌になった時は、とてもうれしかったです。私はこの合宿で、短歌を作ることの喜びと楽しさも知ることができました。

七沢に集ひし我ら日の丸を誇りと思ひ生きてゆくなり

心を働かせることから始めたい

（尚絅大学　図書館　荒井れん）

私はこの合宿に来るまでは、このように物事を深く考えたり、日本や日本人の事を人と話すことはありませんでした。そういう私でしたから、班別討論では思うように言葉が出て来ませんでした。毎日を何となく送って来た私は、班員の一所懸命さに驚き、自分が恥ずかしくなりました。

討論の時でも、一所懸命に聞いてくれる班員みんなの気持ちがとてもうれしくて、人と人とが話すということ、付き合うとは、こんな事だったのかと、わかった気がします。

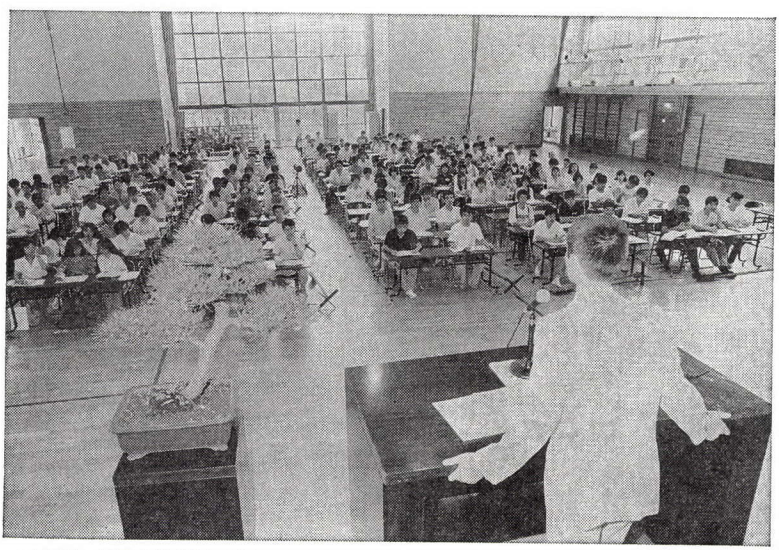
あんなふうに、何かを伝えようとされた先生方の、一所懸命な姿は忘れられません。このような方々がいて、こんな合宿がある事を知っただけでもうれしく思うし、貴重な体験をしました。心を働かせることから始めたいと思います。

七沢で集ひ過ごした友どちの笑顔と言の葉忘れじと思ふ

素晴しい環境の中で素晴しい体験をした

（中村学園大学　食物栄養　四年　古川紀子）

七沢ってどんな所だろうと思って着くと空気の澄んださわやかな山の中でとても新鮮な気持になりました。普段は聞くことのないひぐらしの合唱は私の心を弾ませてくれました。良き班員にも恵まれました。班員の人たちの素直で温い心に触れ、今まで真剣に生きて来られた姿を見ました。言葉を疎



宝辺氏の短歌全体批評に聴き入る参加者一同。自分の短歌が取上げられないか，期待と不安が交る。

かにしない班員から改めて言葉の大切さに気付かされました。素晴しい環境の中で素晴しい体験をさせて頂きました。七沢自然教室の職員の方々の細やかな配慮、国文研の方々の御努力を大変ありがたく思います。昨年初めて参加した合宿では、苦労して初めて短歌をつくりました。今年は昨年に比べ、短歌創作に楽しみ、喜びを感じることが出来ました。

合宿最終日の早朝
誰一人をらぬ早朝の広場にて鳴く鳥の声すがしく聞こゆ
体よりみなぎる力感じつついざ我ゆかむ七沢をたつ

先生のお話に一喝された思い

（早稲田大学　社会科学　一年　中島淳子）

今回、初めてこの合宿に参加して非常に大切なことを学ばせてもらったと思います。それも新しい知識を身につけたというのではなく、今まで頭で理解していたことが実感として心に迫ってきたのです。というよりも、実際には私は何も分かっていなかったのだということに漸く気付いたのです。きっかけは第四日目の長内先生のお話をお聞きしたことです。それまで私はこの合宿での講義や討論を外側から眺めていた様な気がします。それでいて自分の考えとは違う等と不満に思ったりしていました。しかし班の人達は皆心が優しくていい人だったし、だからこそ、こんな気分のままでは帰りたくないと思っていたところ、長内先生のお話をお聞きして一喝された様な思いでした。ああ、私は何も分かっていなかったのだと思いました。目に涙を浮かべて真剣に語られる先生のお姿と言葉に私は救われた様な気がして、お話の後もしばらくの間涙が止まりませんでした。本当に大切な事を学べました。今はこの合宿に参加できて心から良かったと思えます。全ての人に感謝したいと思います。本当に有難うございました。

長内先生のお話をお聞きして
真剣に語らるる師の御姿にまたもや我は救はれてをり

第二十三班—女子学生—

日本は世界一！と、言えるようでありたい

（京都橘女子大学　文　二年　大西倫代）

今、心から先生方やお世話をして下さった方々に感謝しています。日本をこんなに愛して大切にしている人達に出合って感動しました。今まで、私は日本の心や先人の生き方を先輩方に教えてもらっていましたが、どこか今の時代の風潮とはそぐわないような気がして、ためらいがありました。

何か決定的なものがなかったのです。

でも、この合宿で先生方の自信に満ちたご態度や、お話しの一つ二つを聞いて私は胸をなでおろしたような気分になりました。よかった、と思いました。自分はまだ何も知らないから、この勉強を続けていこうと思えるようになりました。

日本は世界一！と、誰にでも言えるような自分でありたいです。

まごころを学び言葉の尊さをはじめて知りて忘れじと思ふ

一番心に残った〝夜の集い〟

（実践女子大学　文　三年　大越淳子）

参加するまで、見知らぬ人達とのハードなスケジュールに不安をおぼえていたのですが、不安は一日目の夕食時に消えました。素敵な班友にめぐまれて毎日毎日楽しかったです。

御講話をお聞きしていろいろな事実を知り、違った角度で歴史を見つめることができました。聖徳太子の十七条憲法の意味を知って深く感動しました。班別討論は率直な意見が次々と出され活気あふれる討論で、個性豊かな意見には驚かされましたが、本当に勉強になりました。ご講話や友の意見を聞くたびに、勉強不足を痛感しました。

一番心に残った〝夜の集い〟の事を短歌にしてみました。

班友と眠い目こすり夜更けまで替え歌振付け思案しにけり

リハーサルを繰返し繰返しするうちに夜の集ひの時は迫りぬ

お互ひの姿見合ひて笑ひ合ふ顔には黒線腰に紙みの

発表の時の迫りて思はずも控へ室にて手を握りあふ

日の本に生れし喜びかみしめて学びの道を求めむと思ふ

カメラ・レポート27

「班別短歌相互批評」。班友はどのやうな感動を詠まうとしたのか，その思ひを偲ぶ。心が交ひ合ふ素晴らしい時である。

友達の気持ちを理解したい、自分の気持ちを伝えたい

（九州大学　法　一年　有馬陽子）

合宿に参加して一番嬉しかったことは、初めて会った班員の人たちとすぐにうちとけ、仲良くなれたことです。一緒に学び、一緒に遊び、一緒に生活してこれほど楽しいと感じることができるなんて思ってもいませんでした。

班別討論で私はできるだけ自分の意見を言うようにしようと思い、そのようにしてきたつもりです。最初は〝積極的にならなければ〟という気持ちでしたが、だんだん皆に聞いてもらいたい、解ってもらいたい、そして皆の意見を聞きたいという気持ちが強くなってきました。けれども言いたい事、伝えたい事をうまく伝えられず、言葉を尽しても空廻りしているようで悲しくなることが幾度もありました。友達の話を聞きたい、気持ちを理解したい、そして自分の気持ちを伝えたい、とこれ程願ったことはなかったような気がします。

合宿は数多の人のみこころに支へられしを忘れじと思ふ

一番大きな宝物、友達をいただいた

（呉リハビリテーション学院　作業療法　一年　長谷川雅代）

私は本当に班員に恵まれていると思いました。十日の夜の集いで二十三班は、「ハメハメハ大王」を歌っておどったのですが、前日にいきなり決めてやったことなので、本番で少しとちってしまいました。けれど、結果よりも準備の過程が大切なのです。紙、ハサミ、のりなどを事務の人に借りて、ほんの少しの時間を利用して、レイや冠を作りました。歌、おどりは、夜中一時半くらいまでかかって覚えました。その時班員一人一人がどんなに協力したか分かりません。そのかいがあってか、集いの後A棟に帰ってみんなの前でもう一度おどったら、結構喜んでもらって本当にうれしく思いました。

私はこの合宿に来て、一番大きな宝物として友達をいただきました。一生の宝物です。

合宿で得たたくさんの友達とまた会はうねと約束交はす

合宿で学んだことを、生かしたい

（拓殖大学　外国語　一年　山内泰子）

短い期間に、こんなに実のあることを学べて嬉しい限りです。班員の方々には、年齢の分け隔てなく仲良くしてもらいました。ハイキングでは子供心にかえってわんぱく公園で遊んだり、夜の集いの出し物で、ハメハメハ大王のダンスをしたり、楽しくて合宿に来る前の不安などなくなりました。短歌は鑑賞するだけの方が良いと、身にしみて感じました。

班付きの先生、班長さんには本当にお世話になりました。言葉に詰った時、上手に導いてくださいました。人柄は顔にあらわれるといいますが、先生の人柄がよくにじみ出ていました。私たちもそうなるように、この合宿で学んだ事を、今後に上手に生かせたら幸です。

楽しくてあつといふ間の五日間再会の思ひ胸にあふれて

この合宿を続けていってほしい

（帝京平成短期大学　看護　一年　山本しづ子）

四泊五日、とても楽しくて少しだけ頭がよくなったような気になりました。たくさんの講義を聞いて、途中つかれてちょっと寝てしまったこともあったけど、忘れられないのは、「自らの誇りを失ってしまった者は相手の誤りもわからない」という言葉でした。他にもたくさん、興味をひく話があったけど、そういう話を聞いて、自分なりにいろんな事を感じたり、考えたりできた事が、この合宿で私を成長させてくれたように思いました。

それに、私はすごく班員に恵まれました。班付きの先生、班長さん、班員全員が、みんなの事を考えてくれる人達で本当によかったと思います。来年は参加できるかわかりませんが、この合宿をずうーっと続けていってほしいと思います。

飾らずに素直に話した友達と別れる時はとても寂しい

もっと心を鍛えていきたい

（神奈川県川崎市立久末小学校　江崎圭伊子　26歳）

本当に心が素直に、のびやかに、生き生きとなったのを感じます。そして、もっと自分の心を鍛え働かせて人の心がわかるように、子どもらとともに培っていきたいと思います。

小野先生のお話をお聞きして、「きびしさ」と「親身さ」を

「若き友らへ語りかける言葉―今私達の最も心すべきこと―」と題された国民文化研究会事務局長・長内俊平先生の御講話で聖徳太子の「少欲知足にして世法を捨てず」といふ御言葉を紹介され，「人間の幸せは，人が慎しみの心を取戻すことから，始まるのです」と語られた。

もって全力でぶつかっていける教師になりたいと思いました。そのことを話した時、小柳先生から「自分なりのやり方でいいのだよ」といわれ、少しほっとしましたが、もっと心を働かせていかねばと思っています。

長内先生が最後に「それでも自分は日本を信じています」といわれたお言葉が、広瀬先生はじめ先生方のお姿とともに思い起されます。人の気持ちがわからなくなってきた世の中で、この体験をもとに心を鍛えていきたいと思います。

全体感想自由発表

〝なだしお〟の苦しみこえてもう迷はないと語るを聞きて胸あつくなりぬ

日本を守らねばならぬと力強く語りたまひぬ防大生君は

真の生き方を見つめさせられた

（無職　下田和子　23歳）

小野先生は、現代は「勇気」の欠落した教育が行われていると言われました。「正しいことを正しい」「ゆるせないものはゆるせない」と勇気をもって言うことが本当に大切だと思いました。長内先生は、「日本人は、自然を愛し、生かされているという心情をもつ、つつましやかな民族であり、それは私達一人一人の血潮の中に流れている心である。日本人のそのような美しい心がよみがえることを信じます」と言われました。そのお言葉を深く心に刻みたいと思います。ともすれば心が固くとざされ、散漫になってしまいがちな自分の心から、「少欲知足」の心をよみがえらせていきたいと思いました。より人間らしく心を直くひろやかに生きるということ、人と心を通い合わせて生きること、真の生き方を、ハッと見つめさせられた思いです。

長内先生の御講義を聞きて

おぼろ月夜しみじみ歌ふ先生の御声胸内にしみ入りて来ぬ

第二十四班—女子学生—

先生方の純粋な姿に心をうたれた

（早稲田大学　教　三年　今林史枝）

私は今、国文研の方々のあまりにも純粋な姿に心をうたれています。友と語るとき、国を語るとき、その表情はまるで純真な少年少女のようにかがやき、そしてそのお話を頭ではなく、心でうけとめようとしている自分に気づきます。それは皆さんが、自分が信じ愛するものを、自分の言葉で語っておられるからなのだと思います。

先生方が、ご自分にとられては子供や孫くらいにもあたる私たちの前で、正座され、敬語を使われる時、私はなぜか涙がでてしまいます。どうしてそんなに謙虚な姿勢でのぞまれるのか。うまく書けませんが、その尊さに只、胸うたれます。それは年齢をこえて対等に接して下さることへの感謝以上の気持ちだと思います。

でもその思いも、合宿がおわり、日々の生活におわれるよ

うになれば忘れてしまうような気がします。しかし忘れてしまいたくはない。少しでもいいから自分自身と対話しながら、これからの生活をおくっていくつもりです。

皆の顔心にとめて帰らむと一人一人をみつめゆきけり

当り前のことを言っていると思った

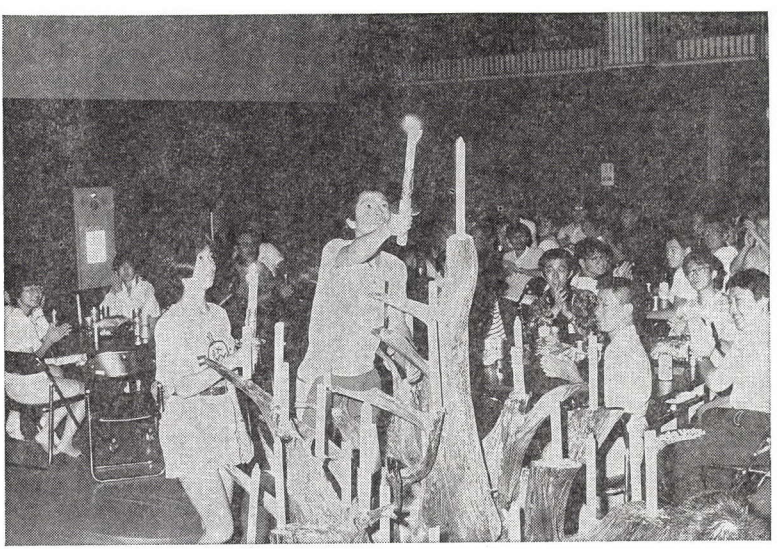
（拓殖大学　外国語　四年　伊東亜希子）

この合宿に参加するために数多くの方がいろいろな所からいろいろな想いをもってやってきたと思う。初めて参加した人は疑問でいっぱいだっただろうし、経験のある人は良い話を聞くことのできる期待でいっぱいだったと思う。私は前者の方で、八王子駅を出発してここまでの道のりを、あの福元君といっしょにやって来て、その間中二人して昨年の合宿の話をもとにいろいろな想像をふくらませていた。みんなもそうだったと思う。

私は途中で投げだしたくなるくらいつらいものだと思っていた。本当はつらかったのかもしれないけど、それをカバーできるくらい先生や班員らがやさしかったんだなあと思う。班別討論ではいろんな意見が次々と出されて、話し合ったことは忘れないと思う。

講義や先生の話は人が生きていく上で当たり前の事を言っていたと思う。当り前の事を当たり前と言えないって何なんだろうとあらためて考えなければいけないと思った。

次々と困難な事起くれども恩師の顔を見て安心す



「夜の集ひ」。四日間の緊張もほぐれ，楽しい演出に盛んに歓声が上がる。

合宿が始まる前までは不安でした

（武蔵野美術大学短期　デザイン　一年　岩越由美子）

私はこの合宿にはおじに紹介されて来ました。合宿が始まる前までは、人の前で自分の考えを語る事など経験していなくて、言葉で人に何かを伝えるということに苦手意識を感じていました。講義の内容も難しそうだったので私には理解しきれないのではないかと思い、すごく不安で、行きのバスに乗っても出来る事なら帰ってしまいたいと思っていました。

実際、この合宿を一日一日と過ごしてきて、講義も難しくて、普段使っていない脳死状態の頭を久々に使ったものだから頭の中はパニック状態で、ぎしぎしときしんでいるようで頭が痛くなりました。班討でもなかなか自分の考えを上手に言葉にすることができなくていらいらしてしまうことが多かったです。

でもこの夏合宿に参加して、自分にはっきりとした意見を持つこととか、又、講義を聞いてこんなことが分かったとかを言葉に出して表すことは出来ないけれど、何かすごくプラスになったと思います。

これからは、この合宿で学んだことを生かし、心身ともにみがいて行こうと思います。

伝統のすばらしさを実感しました

（立正大学　法　一年　岡本美栄子）

友人に勧められて、どのようなことをするのか何も知らずにこの合宿に参加しました。最初日程表を見て、国旗掲揚とか慰霊祭施行とかの行事があったので、もしかしたら右翼的なものではないかと考えてしまいました。聖徳太子のお話とか十七条憲法とかはとてもすばらしいものと思いましたが、まだ二日目ぐらいまでは、それをどうしてか素直に受けとめることができませんでした。しかし時間がたつにつれて、すばらしい先生方のお話を聞いているうちに、どうしてなのか自分でもわかりませんが、本当に、古き日本の伝統はすばらしいものだということを実感しました。

また班別討論では、自分の意見を全然言えず、そんな自分がなさけなくなりました。自分の意見をどんどん言える班員達を見て、これから一生懸命努力をして、何でも自分の意見がはっきり言える人間になりたいと思いました。また、短歌批評の時は、皆が自分の歌のように私の歌を考え訂正してくれたのでとても嬉しかったです。班員の方々、星野先生、どうもありがとうございました。生まれて初めて作った短歌がすばらしいものになりました。

新しき班友（とも）と別れる悲しみよ我この思ひ忘れぬやうに

本気で話し合える友人を得た

（ノートルダム清心女子大学　文　一年　安東国子）

小さい頃からこの合宿で講義されたような話は聞いていました。だから、一般に世間で言われていることの反対を聞い

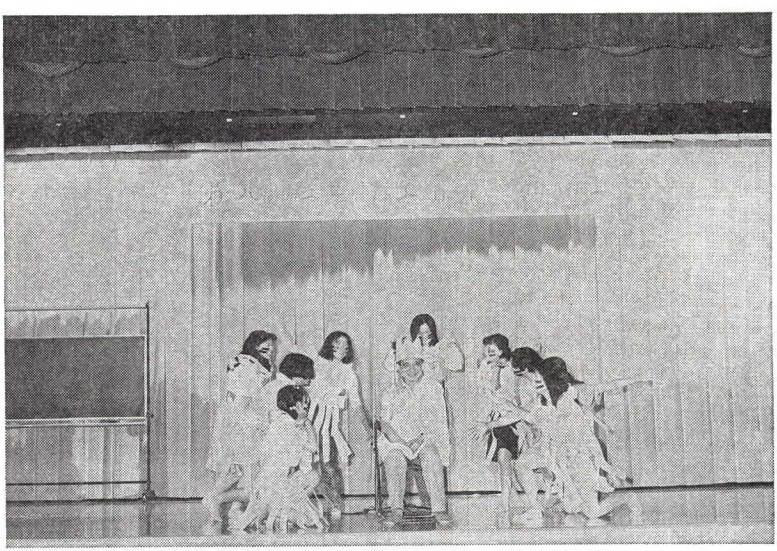
て驚くということはなかったけれど、先生方の御講義はとてもためになったと思います。その中でも特に田久保先生の御講義はおもしろく大変心に残りました。日本人は自分の国のことを誇りに思っていない人が多いといいますが、何故そのような風潮になったのか不思議に思うのと同時に悲しく思われました。しかし私の班の人たちは真剣に考えていて、立派だなあとうれしく思いました。というのは今まで日本の将来や歴史について本気で話し合える人があまり周りにいなかったからです。班別討論なんて最初はいやだったけれど、回を重ねるにつれて、自分でも活発に意見が言えるようになって大変良かったと感じました。班員ひとりひとりがそれぞれしっかりとした自分の意見をもち、本気で話し合えるなんて他では得られない貴重な体験ができました。この合宿で得たものは、先生方の御講義の内容だけでなく、このような友人をつくれたことだと思います。

参加して仲良くなりし班友と過ごせし日々の思ひ出さるる

自然に想いを言葉に出せた

（九州女子大学　文　二年　小島まゆみ）

合宿のお話しを山田先生からお聞きしたのは、たしか六月頃だったと思います。勉強に対する意欲も中だるみで、しかもあと一ヵ月で夏休みという時期。今まで自分がやってきた事を振り返ってみても、何か「これはやった」と堂々と言えるものが何もない事に気付いて悩んでいました。ただ単調な



班別，大学別，地区別に思ひ思ひの出し物が登場し，集ひの雰囲気を盛り上げる。

毎日を送り、その日常生活の中で流されてしまってはいないか、感動できるものでも見逃がしているのではないかというような気がしていました。

パンフレットにもありましたが、これまで真剣に、人生とか、社会とか、日本というものについて友達と語り合ったことなどありませんでした。でもこの合宿は全く重苦しくなく、自然に自分の考えや思いを言葉に出させてくれました。つたない言葉でも一生懸命に聞いて下さり、ご意見を下さる先生方には感謝の言葉以外にありません。

班友にもとても恵まれ、自分とは違った分野を勉強している友との話は刺激になり、視野を広げることができうれしく思いました。この合宿を続けていくのはとても大変なことだと思うけれどいつまでも続いてほしいと思います。

班友の和歌相互批評し前よりも良いものができみなで喜ぶ
七沢の空染みあぐる夕焼けに吾をはげませし君想ふらむ

伝えずんばやまない気持ちを受けとめたい

（熊本大学　文　二年　延塚恭子）

合宿中、何度も知識の無意味さ、感得することの大切さについて聞きました。それでも班別討論の際に、頭だけはたらかせて、ことばに心がついていっていない自分に気づきました。そのときはもうやりきれない思いに陥ってしまいました。

けれども班別討論も回を重ねるごとに面白くなっていきました。最初は皆、自分の意見を言いっ放しだったのが、だんだん班友ひとりひとりに向かって語りかけるようになるのが分かりました。最初のうちは、自分の思っていることがうまく通じなくて、また班友の気持ちがよく分からなくて不安な気持ちになっていたので、本当に嬉しいです。

いま周囲には、合宿で心洗われて素直な気持ちになれた友達がたくさんいるでしょう。その中でひとり私は、自分を見失ったような気がしてなりません。でもそれをそのまま明るく受け取められるのが不思議です。先生方の伝えずんばやまない気持ちを受けとめることが出来なかったのが少しくやしいです。この合宿を契機に、自分を常に励ましていきます。

和歌相互批評にて
頭寄せ班友の心根おしはかり和歌を直せる姿うつくし

第二十五班―女子学生―

自分の心を開いて語り合うことは素晴らしい

（玉川大学　文　一年　公文真規子）

「有難うございます！」とまず、私はこの合宿を勧めてくれたおじいちゃんをはじめ、おばあちゃん、父母に声を大にして言いたいです。本当の事を言うとこの合宿には参加したくないと思っていました。なぜなら合宿の内容がとても真面目くさくて雰囲気も暗いようで、楽しそうな合宿とはとても

思えなかったからです。こんな合宿に行くんだったら、友達と一緒に太陽の下でこんがり焼けて気持いい汗を流しながらテニスのラケットを振り回している方がどんなに楽しいだろうかとさえ思いました。

でも、日を重ねていくうちに班別討論などでも意見が言えるようになり、この合宿の存在する本当の意味も分かってきたような気がしました。自分の心を開いて、表も裏もなく友達と語り合うこと、寝食を共にすること、たまにはふざけたり、真剣に相談したり、とても素晴しいことだと思います。この合宿に参加したからこそこういった貴重な体験ができたのです。

班の友人はもちろん、すばらしい人達と出会えて本当に嬉しかったです。

最終日思ひ出いつぱい胸に秘めかばん引きずり七沢をたつ

綺麗な心にふれた

（拓殖大学　外国語　一年　溝田智子）

今の自分の気持をどうやって書いたらいいのかわからない。文面にしようとすると綺麗なことを書き並べ自分に嘘をついてしまいそうだし、そんなことをしたらこの合宿のために一生懸命頑張っている人たちに申しわけなくなってしまう。

話を聞いていていつも思ったことは「この人なんて綺麗な心を持っているんだろう」ということだ。熱っぽく話をして

「合宿を顧みて」では国民文化研究会常務理事，㈱千代田コンサルタント代表取締役専務・上村和男氏が「合宿では，人の心を偲び，信じ合ふことがいかに大切かを痛感されたでせう」と語られた。

いる姿に全然嘘がないというか、内からこみあげる力みたいのが私の心にビシバシ飛んできて、時々鳥肌が立ったこともあった。私は今のこの何んとも言えない気持ちを人に伝えることはできないけれど、時が経てば素直に言えるかもしれない。

みんなのためうらで働く人たちの苦労を知つて感謝の思ひす

今までの固定観念を変えて行きたい

（湘北短期大学　商経　一年　山口美佐子）

正直なところ日程表の「朝の集い」「慰霊祭」の文字を見て、なにか自分は足を踏み入れてはいけないところに行くのではと思いました。しかし、先生方の講義を聴き、班別討論をしていくうちに、そんなことを考えていた自分が恥ずかしくなってきました。

確かに、講義の内容を十分把握できたとは言えません。まだまだわからないことが多いです。けれど先生方が何をいおうとしているのか自分なりにつかめそうな気がします。今までの固定観念を少しずつ変えていかなければと思い、又変えていくことができるのではないかと思いました。

良き友に恵まれ過ぐるあひだにも我が身と心あらはれるここちす

考え方、ものの見方が変わった

（九州女子短期大学　家政　一年　内山昇子）

今まで以上に和歌が好きになりました。これから明治天皇御製などの秀歌を学んで行きたいし、自分の素直な気持を和歌に託して行きたいと思っています。

そして何よりもよかったことは、いろいろな大学の方に会えたことによって、考え方、ものの見方がいい意味で変ったような気がすることです。相手の立場にたって行動すること、相手と一体になること、それはとても難しいことだと思うけど毎日心掛けて行こうと思います。

もやかかる緑の深き奥山にひぐらしの声ひびきわたるも

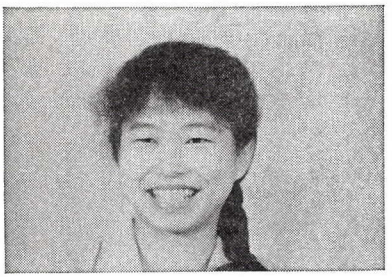
友の歌ふ故郷のうた耳にして遠き故郷恋しく思ふ

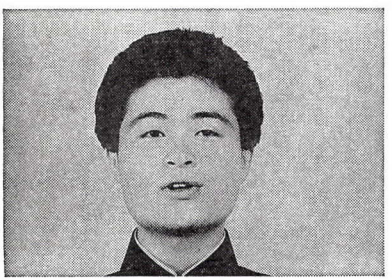
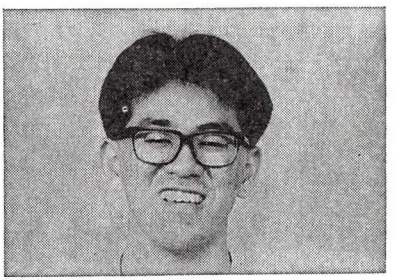
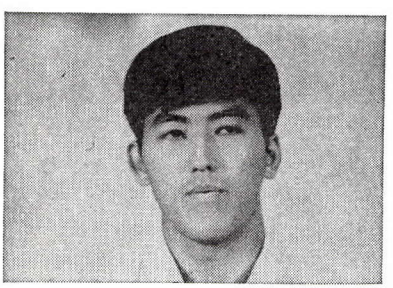
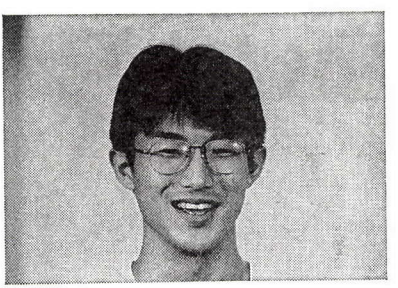
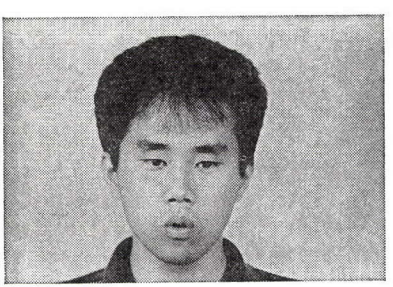
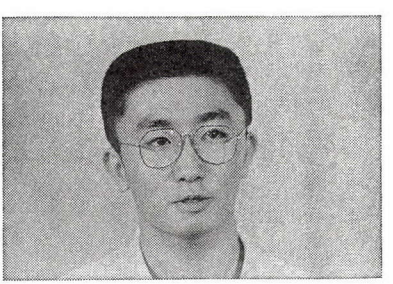
日本のこと天皇のことをもっと知りたい

（山口県立衛生看護学院　一年　林田聖美）

最初、この合宿は右翼が参加するところだと言われ、すごく抵抗があったが、今ではもうそんなことは全然ない。むしろそんなことを言った人を軽蔑するくらいだ。世の中にはいろんな考えを持つ人がいて、それを自分の中に受け入れることができないんだと思った。私も始めはそうだったが、でも講義を聞いていると、合宿に参加することを勧めて下さった宝辺先生と同じ考えをする方が大勢いることが分かり、高校時代にもっと真剣に先生の話を聞いておけばよかったという気持ちで一杯になった。まだまだ私は日本のこと天皇のことを知っていない。段々興味がでてきたので、これを機会に勉強してみようと思う。

廣瀬先生が写生をされてゐるのをみんなで見に行きて



「全体感想自由発表」。友らは次々と登壇し，この合宿教室で何を学び，何を感じたか，各々こみあげてくる思ひを率直に語つてくれた。

すらすらと短歌に詠まれし景色描く廣瀬先生恥しそうに

自分に自信が持てた

（パルシェ商事　奥東路子　24歳）

美しい自然と良き友に囲まれて過ごしたこの四日間は、私にとって楽しいひとときでした。話を聞き討論するのは、理性を持つ人間にふさわしい行ないだと思います。日頃、本やテレビを見て疑問に思える事も、直接とはいかぬまでも少しずつ自分の自信として裏打ちされてゆくように感じました。

軍あらば国守る気は持ちてをれど我は真から平和がいとしい

第三十一班—社会人—

宿題が沢山できてしまった

（厚木市教育委員会　石井　晃　36歳）

まず、班長をはじめ班員の皆さんありがとうございました。楽しくそして苦しい四泊五日でした。こんなに真剣に、また素直な自分の気持を人に話したことはなかったように思います。班別討論、諸先輩の講演、色々の人の話をうかがう中で宿題が沢山できてしまいました。

今、頭が混乱しています。時間をかけ整理をし、じっくり考えていきたいと思います。子供達にものを教える立場にいますが、私はものを知ることの喜びを感じました。自分の仕事（自然観察指導員）の重大さ責任の重さを今更ながら身にしみて感じています。今のこの気持を継続しなければ、と思っています。

いざさらば共に学びし友みなへ感謝の思ひいかに伝へむ

「まごころ」のある教育を進めていきたい

（熊本県葦北郡芦北町立丸米小学校　蓑田誠一　30歳）

四泊五日の合宿を終へようとする今、心地よい疲労感と自分の進むべき途を見つけた安堵感の中にひたつてゐます。

思ひきつて来た甲斐が十二分にありました。学生時代に二回参加した時も目を開かれる思ひがありましたが、社会人として学校現場を六年見て来た今回の自分は（求道といふ構へがあつた）ご講義の内容、班友との討論が砂にしみ入る水の如く、何の抵抗もなく心に入つていきました。進むべき途とは、結局これまで自分なりにやつて来た教育観を更に磨き、自信と「まごころ」を持つて進めてゆくことだと、加藤先生に教へて頂きました。何と簡単な身近かなところにそれがあるのを、自分は気付かなかつたと深く反省しました。

次代の日本、世界を背負ふ子供達を育くむ職責を十分自覚し、「まごころ」のある教育を進めていきます。

思師白濱裕先生の御歌を読みて

歌稿集の中にみつけし師の歌を知らず知らずに読み返す我

師の歌のリズムの中ゆ浮かびくる深きみ思ひありがたきかな

がんばれと師は呼びかくる負けまじと我もますらを力湧きくる

自分が成長した

（日本植生㈱　桑元　明　24歳）

合宿に参加する前までは、会社の命令という事もあり、正直なところイヤイヤ出席という感じでした。ところが、講義や班別討論が進むにつれ、班友の性格も合宿の意図もわかり、少しずつ話ができ毎日が楽しくなりました。楽しくなると、講義や班別討論も楽しく、班友と共に頑張る事が出来ました。

講義の内容は知識の乏しい私には非常に難しいものであったし、簡単に理解できる様なものではなく、自分自身がいかに勉強不足であるかを痛感しました。然しこの合宿は、自分にとって動機付けの勉強になったと確信しました。今後は、テレビ、新聞、雑誌の見方が変るのではないか、自分が成長したのではないか、そんな気さえしてきました。

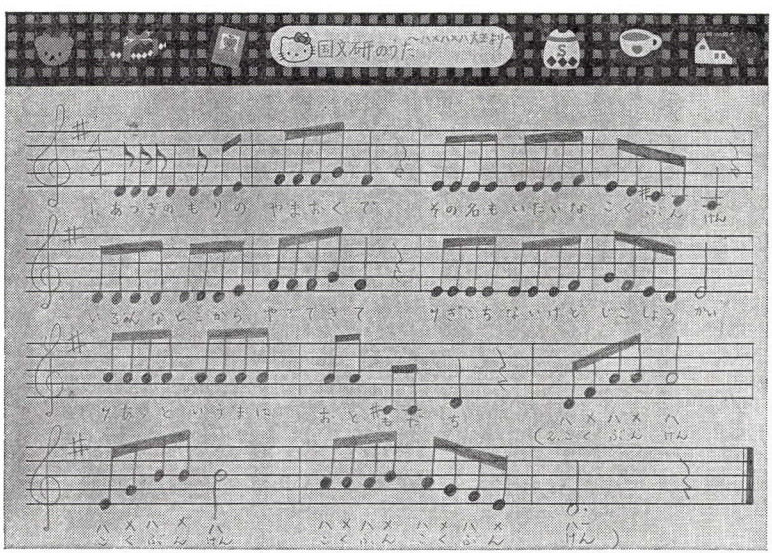
朝早く目覚めて交はすおはやうの明るき声に笑みて応ふる
知らぬ間に心とけ合ふ友のでき別れてもなほ離れがたきも

鬱屈していたものが吐き出された

（無職　小馬谷秀吉　65歳）

久しぶりに充実したものを得ることができました。

講義内容は勿論ですが、班別討論、輪読など、班員、班長にも恵まれ、四泊五日の生活の中から得られたものも含めて、最近の世相の中で鬱屈していたものが吐き出されるよう



全体感想発表の壇上で，参加学生の一人が自分で作詞・作曲をした「国文研のうた」を歌つて披露した。（その歌譜のコピー）

な充実感を味わいました。
国文研の存在・歴史的経緯、戦時下、戦後と運動が続けられてきた事を、この年齢ではじめて知り幸いでした。
よき環境での教室であった事も幸いであったし、学生諸君の率直な行動を拝見できたのも心強いことでした。スムースに運営できるようにしていただいた方々にも感謝致します。

学びには遅く早しはあらざると六十五歳のわれも来にけり
とつとつと意見を述ぶる我なるに耳貸しくれし班別の友

何んでも語り合えた

（亜細亜学園　佐藤貴之　25歳）

上司の「業務命令」との一言で参加し、私自身の意志で来た訳ではありませんが、今では上司に深く感謝しています。
四泊五日とは思えぬほど何んでも語り合い、この合宿を企画された方の意図や期待については十分理解し、体得できたものと自負しております。
亜細亜大学に奉職する自分としては学生との交流も目的の一つにしていましたが、ごく一部ではありますが、それもかなえられ、自らの仕事の素晴しさを更めて感ずる事ができました。
国文研の先生方や裏方のアルバイト高校生達に対する感謝の念は言葉に言いつくせないくらいです。

葉月とも思へぬほどの涼しさにしみ入るごときひぐらしの声

厳しさの中にも何か暖かさがある合宿だった

（三菱電機　工藤可哉　32歳）

長い様で短かかった合宿、様々な職業の人達の班で、雰囲気も大変打ちとけ楽しく過す事ができた。班別討論ではふだん話すことのない話題が活発に議論され、知識や興味の度合に差こそあれ、一つのテーマを議論する事の重要性を感じた。講義内容も比較的解りやすく、ご高齢の先生方の懸命なご姿勢には打たれるものがあった。教育の前線で闘っておられる教師の方々の努力にも頭が下った。
防衛大学の学生達の意見で、日本人の防衛に関する認識の浅薄さを再確認させられ、マスコミ報道、教育の歪が、この点に典型的に表れていると思い、これを正さない限り、湾岸戦争のような事態が再発しても本質的な議論をする事は不可能であると思った。今後の日本は、色々この種の問題が起きるであろう。全体を通じ、厳しさの中にも何か暖かさのようなものがある合宿だった。

森林公園のハイキングに参加して
山路きてみんみん蟬の声聞かば我が故郷を思ひ出しぬ

人と人との出会の素晴らしさを知った

（日本植生㈱　丹　明博　30歳）

本合宿への参加は会社の命令であり、なんとも言い難い気持で参加しました。然し、班友と寝起きを共にし、語り合う

内に、人と人との出会の素晴らしさを知り、又合宿が深まるにつれ、講義、班別討論は今後の私の人生に必ず役立つものと確信致しました。

これまでの私は、視野が狭く、周囲を殆んど見ていなかった。これからの人生は、本合宿で学んだ事を基に取り組んでゆきたいと考えます。

最後に、良き班長と班友にめぐり会えたことに感謝するとともに、いつの日かまた再会できることを心に思い、七沢を去りたいと思います。

七沢のコナラ林のこもれ陽のやさしくそそぐ夏昼下り

自ら鍛錬する以外にない

（航空自衛隊　吉田　孝　49歳）

初めての参加で不安と期待の複雑な気持であったが、日程表を見ると盛り沢山の講義時間等余裕もなく、主催者側の一方的教育かと疑問を感じたが、一日二日と過ぎゆく間に、その偏見の間違いに気付き恥しく思った。

当教室で得た事は数知れない。知識、精神、思いやり、友情など、私の財産になったと思っている。問題は、この状態が日常生活を送る中で消滅しやしないかという事である。

自ら鍛錬する以外にないと思う。年齢的にも可能であろうから、来年の三十七回まで頑張ってゆくつもりである。

自然観察指導員石井氏、班友と山歩きして
草や木の自然観察山歩き顔赤らめる名前のありき

カメラ・レポート34

閉会式で学生を代表して挨拶をする千葉大学四年の中富仁君。「一回りも二回りも大きくなつて，この合宿教室で出会つた友と再会できるやう，お互ひに研鑽を積んでいきませう」と語りかけた。

第三十二班 ―社会人―

求めるものに出合うことができた

（㈱ピコイ　本里福治　46歳）

「あっ」という間に時が過ぎた気がする。日ごろは仕事に追われ、人生をふり返ったり、考えを煮つめたりする間もない日々の連続である私にとって、この五日間は今までの人生四十六年のうちの特別な五日間であった。

「全体感想自由発表」の時、最後に発表された熊本の先生と同じく、日ごろ「何かおかしい」と感じている事柄が一つ一つ解き明かされてゆく事は苦しくも楽しい「カルチャーショック」であった。

参加されていた大学生諸君と同じ年齢のころ、私も道を求めて、いろいろな人に会い、セミナーに参加し続けていたが私の求める師には出会えなかった。その後、二十年にして、やっと求めるものに出会うことができた。

慰霊祭にて

海ゆかばを心の底から歌ひけり逝きにし人をしのびまつりて

和歌の心が未来を開く

（地球防衛協会　大森覚道　69歳）

合宿の意見発表で自ら進んで積極的に発言する学生の行動力を頼もしく感じました。

二十一世紀は心の時代と言はれるが、人の心を思ひやる敷島の道、和歌の心が未来を開くと思ひます。此の度、否応無しに創作させられた事は尊い体験でした。これから一日一首づつ詠んで見度いと思ひます。

「いくそ度かきにごしても澄みかへる水や御国の姿なるらむ」

日本はこれから自然を尊び自然と共に生きる本来の日本の姿に立帰るであらう、その大きな流れの一つがこの合宿の意義であると思ふ。

日の本の国の尊さ学び得て勇気湧けりと聞くは嬉しき

御講義を実社会に活用したい

（宗教法人乃木神社　松吉宣和　51歳）

一般社会人、学生との合同研修は初めてで大変に不安でした。

私達の班は二十代、三十代、四十代、五十代、六十代と、それぞれ生活体験が全く異なった人達の班で班別討論においては意見が種々多く、それぞれの立場で自分の思った事、感じた事を各人が発表し、大変に充実した班に恵まれました。また、あくまでも学生、社会人との合同合宿の場であるという事を認識し行動しました。学生は学生としての若さと行動力を、社会人は社会人としての誠実な心と行動を、参加者の一人一人が自覚すればと感じました。

諸先生方の御講義を更に復習し、実社会に活用できればと

胸いっぱいの希望でふくらんでいます。

かがり火のともる斎庭はしづまりて警蹕かかりかうべたれけり

日本の心を深めていきたい

（厚木市役所　山口光男　43歳）

七沢に集い、知らない者同士が寝食を共にして、各先生方の日本の文化や歴史、親の役割や豊かな心についての御講義を拝聴し、班別で聖徳太子の十七条憲法を輪読した。素直な気持で相手の意見を聞き、みんなで考えるという今までにない素晴しい経験をすることが出来た。

これからは普段、漠然と考えていた昔からの伝統文化や日本人として何をしなければならないかをしっかりと考え、更に日本の心を深めていきたいと考えております。

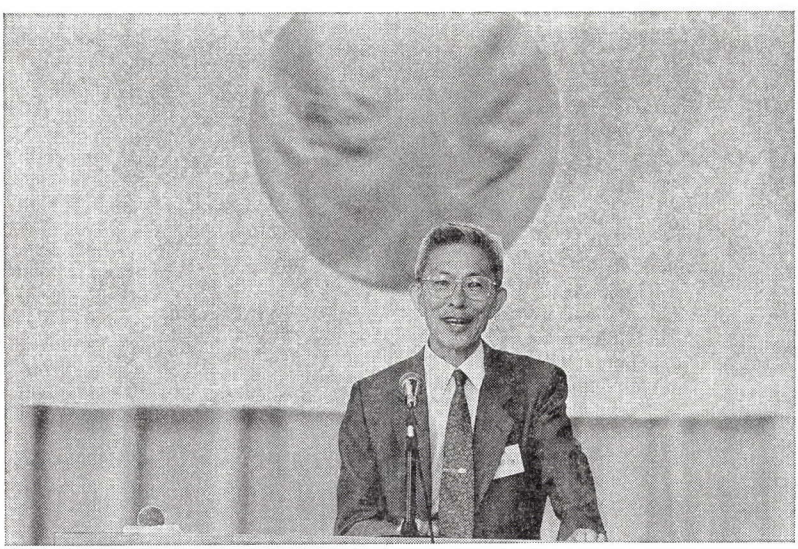
夜の集ひにて

気合こもる友の燕飛のすばらしさ我もまけじとけいこにはげまん

日本の常識を身につけることから始まる

（出光興産㈱　広島秀明　35歳）

合宿で学んだことは日本の常識である。天皇に対するおもい、歴史、君が代、日の丸等、日本人として当然身についているべきことが如何に身についていないかが良く分かった。これを如何に広く世間の人に分かってもらうかが私達の責務だと思う。現在の世の中はこの「日本の常識」については全くといっていい程無関心である。拒否感すらある。この様な



主催者を代表して国民文化研究会副理事長，九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生は「皆さんが班友の力で素直な気持ちになれたと仰しやつてくれた事が大変嬉しい」と語られた。

状況の中で私に出来ることは先ず私自身が行動することである。私は今日から日本語を大切にし、天皇に関する本を読んで、日本人としての心づかいを大切にした生活を始めたい。

日本の常識が身についていない人に、どうして世界の常識が身につく筈があろうか。今の世界の中での日本の孤立からの脱出も日本の常識を身につけることから始まると考える。

思ひやりあふるるともとの語らひにおのがこころもあらはるるがに

もう一人の自分を発見した

（宮崎神宮　木村速穂　27歳）

班別討論において班の人等がそれぞれ自分の意見を発表し、又、自分の不充分な発表も真剣に聞いてくれる態度に大変感激しました。人の話を真剣に聞き考えてくれる。これこそ今の日本に必要なものだと感じました。班別討論を重ねるうちに今まで自分の中で空白だった所が徐々に埋まっていくのを感じました。自分の中に何かが芽生えてくるのが分かるのです。和歌の創作でも、日常生活では考えられない時間の流れ、空間の拡がりを自分の中に見つけることが出来ました。

この合宿に参加して今まで見つける事の出来なかったもう一人の自分を発見した様に思います。

七沢に班友とつどひて語らひぬわが日本のゆくべき道を

学ばなければならない事の多さを痛感した

（日本植生㈱　池内清巳　28歳）

私はこの合宿に参加して、自分の学生時代を思い出し、あの頃、何が大事で、何を勉強しなければならなかったのかについて考えさせられました。何か基本的な所が抜けていたように感じます。

この合宿を通して、日本の文化、国旗国歌、天皇、憲法、教育、そして本当の国際化とは何か、日本の進むべき方向はどこにあるかなど、日本人として私の学ばなければならない事の多さを改めて痛感し、やらなければと決意しました。

このような機会を与えていただいたことに感謝いたします。

夜の集ひにて

早大生の声たからかに合唱する都の西北むねにしみきぬ

第三十三班—社会人—

すばらしい日本文化

（厚木市教育委員会　西海雄一　35歳）

私がこの合宿教室で得たこと感じたことは、日本がすばらしい国であるということを、あらためて知らされたことです。戦後の日本は、敗戦国として全ての古いことは「悪いこと」として厚い扉の奥に閉じこめられていたという感がしま

す。その中には本当にすばらしいもの、大切なものが隠されていたことを、この合宿教室であらためて知ることができたのは、社会人としての自覚がそうさせたのかも知れません。

合宿教室に送り出してくれた職場の方々、国文研の先生方に御礼を申しあげます。今後はもっと事実を見て、日本の文化を勉強して行きたいと思います。そしてこのすばらしい日本文化を絶えることなく現代まで伝えて下さった祖先に感謝し、また正しく子孫に伝えて行きたいと思います。

魂祭りかがり火あかるく先人の心うつしてもえさかるなり

日本の道統

（中國電力㈱　山形鴻一郎　57歳）

合掌、有難うございます。

国文研を生み育てて下さいました小田村寅二郎先生始め諸先生、また合宿教室をお世話下さいました諸先生に深く感謝いたします。

今まで世界のどんな思想も、哲学も、宗教も、成し得なかった世界恒久大調和の光源は、我が日本の道統にあると信じています。歴史の厳しい試練に鍛えられた時の道統こそ、新しい世界秩序樹立の霊的根幹として、その本質を発揮するものと期待します。

その日の為、私はひたすら日本の理想に向って、天皇に中心帰一し、日本再建と世界平和とに向っての運動を、仕事、日常生活を通して祈り、実行していくことを決意します。再拝

別れの時は来た。「お気を付けて。また来年会ひませう」再会を期して，力の限り手を振る。

厚木市の厚きもてなし有難く嬉しく学ぶ国民の道

歴史に参加する生き方を

（㈱新東　斎藤信二　47歳）

昭和天皇御製

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

今回の研修は日本の歴史を思い、日本の国柄を思い、そしてこの御製が思い出された。聖徳太子の憲法十七条、それがずっと生きている、それが日本人で、日本らしさなのだと強く感じた。全てと一体である日本人の感覚、感性、大和路に感じる歴史を学び、更に日本人としての誇りを持ちたい。

歴史は面白い。学べば学ぶほど面白い。そして歴史に参加する生き方をしたい。夢は大きく、行動は一歩から。

講師の先生をはじめ運営委員の方々、自然教室の皆様、そして班長、班員の皆様、本当にありがとうございました。

皇國の國がら守りしますらをの尊きいさをを忘れず生きむ

日本人としての誇り

（福岡県立福岡高等聾学校　小柳悦朗　36歳）

合宿教室に参加し日本人として、また日本の進むべき道がはっきりわかった。聖徳太子の十七条憲法が日本人の中に、また国家の礎として連綿と生きていることに気づかされ、また、人としての生き方、考え方を問うてみれば自然に十七条憲法の教えに到達するということを思わされた。これが日本人の血であり、日本人の生き方であることが理解できた。

また和歌に触れてみて、日本人のもつ感性の豊かさ、日本語のもつ深みなども勉強できたことを大変嬉しく思い、改めて日本人としての誇りをもつことができた。

そしてまた歴史の勉強が表面的だったことを反省し、今後は深みのある勉強をしなければならぬと思った。

合宿教室に参加させていただき感謝申し上げます。

和歌学び大和の深み知りたれば幸をば想ふみ國に生れしを

情熱をもって真剣に生きたい

（厚木市教育委員会　葉山神一　36歳）

中堅職員であり又、人間として生きるためには「しっかりしたものの考え方」を持たねばと感じていましたので、この合宿教室で何かを得ようと、期待し参加させて頂きました。

先生方が御自身の考え方や生き方を、経験をとおして一言ひと言真剣にお話しくださる様子は、これまで私の体験したことのないものでした。しっかりしたものの考え方や人生の見つめ方を教えられ、感動の連続でした。

先生方は一貫して仕事に対し情熱をもって真剣に当っておられると感じました。長内先生の「ソクラテスでさえも自分自身がわからない」との言葉は勇気づけられ、情熱をもって真剣に何ごとにもあたるよう努力し、生きていきます。

班長と七人の班員と国文研の方々に心より感謝します。

海ゆかばと心をこめてみ祖らに友らと歌へば胸あつくなる

決意した事

（日本植生㈱　日笠誠一郎　31歳）

本研修に参加し、討論を重ね、感じ決意した事を記します。

一、今より以上に人の話を聞き、言わんとする所を感じる。
一、自分の意志を確立、充実し、より多くの人と話し合う。
一、伝統を守り、正しく伝え、又自らも勉学に励む。

（歴史、和歌他）

一、心持ちを正しく、国家、社会に貢献をおしまない。

合宿教室で多くのことを学び感じたが、前述の事を忘れずに日々自覚し、人間として、日本人として、はずかしくない生活を送る事を決意し、所感とします。

大君のみ恵仰ぎこのみ代に磨きはげまむ國民として

有意義な体験

（日本植生㈱　大村康朗　27歳）

様々な人と腹を割って話ができ、大変貴重で有意義な体験ができました。私は会社の命令という、自主的な参加ではありませんでしたが、気づけば自分なりに精一杯取り組んでいました。ここで語り合ったこと、そして多くの友のことを糧に、この夏さらに自分を飛躍させたいと考えています。

最後にスタッフの方々にあつく御礼を申しあげ、私の感想とさせて頂きます。有難うございました。

遠き世の古人も詠みし大和歌時空を超えて感動来たる

精神の充実を求めて

（公務員　辰木　正　27歳）

一、友と語る　職場や寮で友人と話すことといえば、あたりさわりのない「仕事」「趣味」「テレビ番組」等ばかり。しかし初めて「国史」「国の偉人」「国柄」について、互いに討論することができたことを本当に嬉しく思うとともに、同室の友から色々なことを学ぶことができました。こういう機会を作って戴き感謝しております。

二、精神の充実を求めて　公務員として奉職しているので、自己の信念の確立が重要だと考えております。合宿教室の教材に触れることにより、学んでゆくべきその一端を知ることができました。今後更に勉強を重ねたいと思います。

三、御礼　この合宿教室を運営してくださった方々、本当に有難うございました。

班長のこぶしふりあぐ講義聞き戦せし日の姿しのばる

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——

短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を詠み、また他の人の詠んだ短歌を味はふことになつてゐます。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今年もまた、千数百首に上る短歌が創作されました。

短歌は、私達の祖先が「しきしまの道」と呼び、言葉を修め、心を磨く道として、古来から守り伝へて来たものですが、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、殊に若い世代には、文学的趣味の一つといふ程度にしか受け取られなくなつてゐるやうです。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌の創作は全く初めての経験であり、心理的負担でさへあるかに見受けられます。しかし、合宿の日程を重ねるにつれ、自らの「思ひ」を言葉にすることの難しさを体験し、それによつて、その難しい中からやつとのことで表現された友の言葉の重さを感じる、といふふうに、「言葉」を自分の全体験によつて真面目に受け止めるといふ態度が次第に養はれて行きます。それは既に、短歌を詠み、他の人の短歌を味はふ上での基本的な心構へが整つたと言へるのです。自分の思ひが友に伝はるやうに、言葉を選んで五七五七七の定型に詠み込む。また、友の短歌を読み、友の心を我が心の内に想像し、友の上を思ふ。短歌創作・相互批評におけるこれらの経験は、人間と人間との付き合ひの最も凝縮されたものと言へるのではないでせうか。知識や理論に重点がおかれ、人間にとつて最も基本的な心の問題を等閑に付してきた現代教育の束縛を自ら解き放ち、相手の心に直に飛び込む道を知り得たこの経験は、参加者全員にとつて、まさに忘れ難い印象として心に刻み込まれたものと思ひます。

合宿三日目の朝、那須三元氏（福岡県立須恵高校教諭）による僅か一時間の「短歌創作導入講義」によつて短歌を作る上での基本的なルールが指導され、その後の散策を経て夕刻には短歌を提出するといふ慌しい日程の中で生み出

された短歌でありながら、意欲的な創作態度が合宿所の至るところに見受けられました。作歌上の巧拙を越え、多くの作者の若々しい魂は自づからその言葉の端々に表れて、強く心惹かれる歌が多数寄せられました。

提出された短歌は、その日のうちに国民文化研究会の会員によつて選歌が行はれ、翌日謄写版刷りの数百首の歌集となつて全員に配布されました。そして、その歌稿をもとに、宝辺矢太郎氏（山口県立高森高校教諭）によつて、創作短歌全体に亘る講評が行はれ、短歌批評のポイントについて指導がなされた後、各々の班に別れて、班員同士の熱心な相互批評が行はれました。そこでは、技巧の巧拙を論じ合ふのではなく、作者の心を偲びながら、その心に添つて、言葉を正しく客観化して行くといふ作業が、班員全員の心と知恵とを集めて徹底的に行はれました。さうして、互ひに友達の心に深く触れ合ふことによつて、合宿生活において寝食を共にし、胸中を披瀝し合つてきた友情の結び付きが、ここにおいて一段と深まつて行くことを班員のそれぞれが実感したのではないでせうか。かうした、短歌創作を通じて展開される、日常生活に於てはまことに稀有（けう）な精神生活の体験は、参加者の一人ひとりに、言ひ知れない、ほのぼのとした喜びをもたらしたのみか、学問と友情との分かちがたい繋りをも、自づから、感得せしめるに至るものでありました。

ここに収録された短歌は、その表現形式においては稚拙であるかも知れませんが、参加者各々の切実な情意の率直な表白であり、この合宿教室を通して現出された感応相稱（かんのうそうしょう）の世界の一大交響楽と言つていいかと思はれます。これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取り下さり、短歌本来の姿が顕現されつつあることの兆候をお汲み取り下さらば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

東京大理Ⅰ一　長原巨樹

緑なす丘の斜面を友どもと走る楽しさ我を忘るる

拓殖大外四　古川真一

四年前もう来るまじと思ひしも学びの集ひに今年来にけり

金沢工業大工三　平野賢

和歌よむはやさしきことと思へどもいざよみてみれば言葉いでこず

拓殖大外一　麻生啓史

七沢に学びに来たが何もせずむなしき日々を送りけるかな

佐賀大理工四　白木潤

敷島の道は楽しとかたられる坂東氏のうらやましきかな

我が愛す三井先生の歌二首を声朗々と氏は詠み給ふ

嬉し気に酒の話をする氏は酒をこよなく愛し給ふか

常日頃短歌を作る生活を成し得る氏は生き生きと見ゆ

亜細亜大法二　江口文章

歌を出し九番バス停わからずにいづこいづこと人に尋ぬる

広島大法二　福原裕二

よく生きることこそ徳の一歩なりただ生きることは愚の極みなり

第二班

大阪電気通信大工二　広真也

蟬の羽根せつせと運ぶ蟻みつけふまぬやうにと気をくばりけり

早稲田大社会科学三　村瀬廣司

芝原を駆けまはりつつ楽しげに虫追ふ児等の愛らしきかな

富山大経済三　西川望

虫を採るあどけなき子の姿見て幼き頃を想ひおこせり

拓殖大外一　木桷節朗

やうやくに歌できれども後々の批評思へば不安も高まる

亜細亜大経済一　林勝也

たそがれに七沢の山静まりてただ聞きほれるひぐらしの声

千葉大工四　中富仁

いくたびも母を泣かせし教へ子に強き怒りの込み上ぐといふ

京都産業大理二　濱地賢大郎

夏日受け木々の緑のきらきらと照り映ゆる様のここちよきかな

第三班

拓殖大外二　宮沢毅

討論の回を重ねていくうちに班全体の士気が高まる

帝京大経済二　岩切崇

過ぎし日の夏の夕暮れ偲ばるる七沢の森のヒグラシの声

金沢大工四　谷崎文保

過ぎさりしふるさとの日々偲ばれて野山の虫をあかずながむる

東京水産大水産一　堀　正明

待ちわびし講義なりしもまどろみて聞きもらしたる己れ口惜し

亜細亜大経営一　永井義輝

緑こき森は良きかなその上の林間学校思ひ出さるる

早稲田大聴講生　村主真人

大楠公を偲びまつりて

七たびも生きかへらむと死のきはにためらひもなく笑みしと聞くも

もののふのならひとはいへあはれなりあとに残りしうからをさな子

大君の御為と散りし人あまた御国の史に埋れてあり

第四班

福岡大経済一　別府正寛

知り合ひて一日なれどみ友らは親しみ覚えうちとけにけり

言の葉をしぼり出すごとその思ひ語りゆく友の姿尊し

拓殖大外一　成田誠悟

御友らと語りてあれば四方の山に湧くがごとくにせみの声する

早稲田大教育二　鈴木由充

日を避けて木蔭にをれば吹く風は汗せし肌に涼しかりけり

高千穂商科大商一　後藤謙太郎

山の中小道歩めば夏の野の緑はるかに見えて美し

拓殖大外四　橋本修

山はだにそよかぜ吹きて涼しげにさみどりの草ほのかにゆるる

福井工大工三　松田徹雄

講義中眠りてをれば班長につつかれ起きれどまたまた眠る

亜細亜大経済三　福富賢介

講義室に移動する折に

風にゆるる木の葉の上に羽を休む蝶の姿は愛らしきかな

坂東一男さんの御講義をお聞ききして

我もまた感謝の言葉のすぐ出づる素直な気持ちを持ちたしともふ

第五班

早稲田大教育四　山下拡男

出会ひから過ぎにし日々ははや三日見知らぬひとの友とはなりぬ

拓殖大外一　田島豊

園児らにバッタ捕つてとせがまれていつしか我も子供になりぬ

岡山商科大商一　柳井宏昭

公園で幼き子らに囲まれていつの間にやら共に遊びぬ

亜細亜大経営二　諸藤譲

討論で己のが間違ひ正す時素直に直せぬ心もどかし

拓殖大外四　福元康文

心開き共に語らふ友人になりたきものと節に思ほゆ

第六班

早稲田大一文四　大島伸一

坂東先輩の講義を聞きて

営業は我が天職と胸を張りはつらつとして先輩は語りぬ

我もまた元気一杯先輩のごと仕事に打ち込みゆかむ

亜細亜大法一　松田裕幸

輪になりて思ふがままにかたりあふ我知らぬことたくさんありき

大阪経済法科大法三　渡　辺　昌　洋

七沢の学び舎目指し集ひたる友らと共に学びて行かん

岡山理科大理一　山　崎　慎　二

浴場にて

友どもと洗ひ場待てば汗出でて顔を見合はせ苦笑ひする

拓殖大外一　安　保　幸　博

討論中何かいはむと努むれば日暮らしの鳴く声繁きなり

防衛大人文二　高　山　裕　司

くさはらで語らふ友のねぼけ顔合宿の夜は楽しかりしか

第七班

福岡大法二　牟田口　隆　文

小野吉宣先生の講義を聞きて

先生の演台うつ音すさまじく船こぐ我ははつとおどろく

金沢工大工四　筒　井　正　樹

蟬の声涼しき風が吹きけるに何をか悩み何をか成さむ

東京農工大工一　内　藤　剛　司

ハイキングで草原の上に寝転べばふと気になりぬテストのことが

拓殖大外二　山　崎　貴　幸

汗をふき登る坂道班友と交はす言葉も少なくなりぬ

拓殖大外一　若　林　秀　彦

七沢の緑の中でせみ鳴けば暑さの中に心安らぐ

亜細亜大経営一　賀　谷　達　樹

空晴れてそよ吹く風にさわさわと草葉は揺れてこころよきなり

九州大工三　船　崎　好　助

夜半に咲く白きつぼみのほのかなる光に映えてさはやかに見ゆ

第八班

湘北短大電子情報一　八　木　智　之

力あるををしき山々見るごとにいつの日か絵にと思ひてありし

拓殖大外二　佐　藤　広　彰

友人の語る言葉になかなかに応へきれなき我が身もどかし

やうやくに心はげまし思ふこと口より出してほつとするなり

九州大法三　花　田　芳　夫

友どもと芝生の上にくつろぎて語りつつ食べるおむすびはうまし

拓殖大外一　山　口　順　也

空青く木々の緑に囲まれて芝生に寝るは気持ちよきかな

湘南高校定時制四　野　崎　　譲

みわたせば思ひもかけず江の島の島影はるか見えて驚く

亜細亜大経済四　佐々木　栄　幸

あふれくる思ひを友らに語らんと思へどくやし言葉にならず

早稲田大一文二　尾　関　謙一郎

思ふこと歌にしたしと思へども言葉いでこぬこの苦しみよ

第九班

拓殖大外三　藤　裏　佳　秀

我が思ひ伝へ切れずに時は過ぐもどかしきなり班別討論

早稲田大社会科学二　長　濱　宏　昭

独り寝に別れし人を思ひつつこの一月をすごしけるかな

金沢大工四　吉　岡　史　恭

晴れわたる夏空の下乙女らの声華やぎて心な

ごみぬ

拓殖大外一　川崎良典

夏空の白き雲見ればなつかしき故郷の空思ひ出さるる

富山医科薬科大医五　野原　茂

西日本医科学生総合体育大会運営を終へて

皆と共に一年かけて備へたる大会終はる成功のうちに

会場に残りをりたる空缶をひろひ集むる後輩ありがたし

第十班

防衛大人文四　新田　洋

討論の中で

我が思ひうけとめくれし友どちとつき合ひゆきたしつどひの後も

拓殖大外二　丹野　正

木洩れ陽にせつなく響く蟬の音夏の嘆きを歌ひぬるかな

拓殖大外一　堀越孝行

真剣に歌詠む皆の姿見て我はおもはず笑みをこぼしぬ

長崎大工一　吉田充邦

一日目の夜はじめて出会ひし新田先輩と雑談をせしをり

筋肉はかくすればつくと先輩は語りつづけぬ湧き出づがごと

九州大工三　松岡篤志

坂東一男先生の講義をお聞きして

古の人も詠み来し酒の和歌喜びたたへ読みます師はも

心から溢るる喜び語らるる講師の面輪の晴れやかにして

第十一班

拓殖大外二　多田雅信

草原をかける子供の笑ひ声聞きて幼き頃のなつかし

亜細亜大経営四　佐藤順一郎

あちこちに散らばりてをるスリッパを一人で並べる友のありけり

早稲田大社会科学二　柳谷弘樹

心地良き涼風吹きて我吐ける煙草のけむり空に消えゆく

九州大工四　黒木雅裕

七沢森林公園にて

靴下を脱ぎて座れば柔かき草の素足に心地よきかな

草の上大の字になりて寝転がり太陽の光身に浴びるかも

幾重にも青垣なせる丹沢の山眼交に仰ぎみるかな

目の前に聳ゆる山を仰ぎつつ青空の下にぎりめし食ふ

拓殖大外一　長谷川秀樹

湯あがりに我窓ぎはでくつろげば吹くすず風の心地よきかな

防衛大理工三　松永秀嗣

主伊子ねえちやんに贈る

車中にて従姉かもしれぬその女性を見やるその目も伏せがちにして

過ぎし日を心にうかべなつかしみその名を求めめくる名簿を

差し向かひ期待を胸に里聞けば我が故郷の名を応へけり

流れたるその歳月のいたづらで我とわからぬもどかしきかな

その従姉も我とみとめてやうやくになつかしの笑み美しきかな

北九州大法三　倉光正明

七沢の広き原野を飛び回る虫の命よ今が盛りか

第十二班

鹿児島大農二　椎　原　恒　介

山なみの真中に立ちて思ふかな豊かなるこの国ありがたしと

金沢経済大経済三　高　嶋　晃

早朝の涼しき空気を切りさきて差しくる光すがすがしきかな

拓殖大外一　中　澤　謙　一

葉は茂りこもれ陽をなす木々の間を汗をかきつつ歩みゆきたり

福岡大工四　清　家　和　弥

陽ざし受け芝原の上に幼子や友らははしやぎて笑ひひびきぬ

早稲田大教育二　真　庭　宜　幸

よみたしと思へどかなふ言葉なく歌にはならぬことの多かり

亜細亜大経済四　茅　野　輝　章

坂東さんの講義を聞きて

子供らの「ありがたう」とふ言の葉に大人(うし)は我が身を正してゆきしか

防衛大人文三　浦　口　薫

木もれ陽の山の小路をてくてくと友と登りゆく時ぞ楽しき

第十三班

中央大法四　古　川　広　治

三日目の午後の講義終はりし時大木君に家より電話ありて

家からの急なる知らせにおどろきて君は出でけり顔色変へて

知らせをきき今すぐ帰ると我らにつげ荷物をまとめはじめぬ

一人でも大丈夫だと君言へど我ら見送りぬ友あんじつつ

ロビーにて不安げな君をなぐさむる言葉もいでざり車まちつつ

外に出て君は我らに語りけりともにすごせし合宿のこと

拓殖大外一　大　木　聡

緑濃き山ふところにいこひをればわらべの心に我もどりゆく

早稲田大社会科学二　相　差　健　史

長内先生にお会ひして

あなうれしひさかたぶりに出会ひたる先生我が名を忘れずゐたまふ

防衛大理工三　濱　口　和　久

楽しげに走り回る子らながめつつ思ひおこしぬ幼きころを

第十四班

早稲田大法一　三　島　圭　介

新たなる友とかざらず語り合ふ合宿教室すばらしきかな

山口大工一　高　村　雅　一

古代より日本文化に流れたる心と心のふれ合ひを知る

拓殖大外二　小久江　克　訓

来し時に抱きし不安緊張もすぐに消えたり友の言葉に

明治大法三　冨　野　善一朗

公園ではしやぐ子供の声きけば幼きころのなつかしきかな

東京大法四　松　岡　恒　男

班別討論にて

我が心体ふるわせ感じたし人の言葉にこめられしものを

三年前の夏合宿を思ひ出して

立ちこめておのがゆくてをさへぎりし霧やや消えて道のうかびく

福岡大経済三　梅　崎　建　吉

夏の日の青空高く浮かびたる白き雲の輝きて見ゆ

第十五班

防衛大人文三　森　安　宏　徳

七沢公園にて

あふぎたる空にうかべる白き雲のうつろひゆくを見るもたのしき

見はるかす光のどけき七沢山緑の木々に蟬の鳴きをり

あらたふとあたらしきいのちや生まれ出づ羽を乾しをる蟬を見るかも

緑濃し山はけはしき相模野の光かがよふ道歩きぬる

拓殖大外一　千　葉　竜太朗

丘の上ゆ見下ろす景色のまぶしさよ真夏の日ざし屋根にそそぎぬ

山中をたどりて行けば古のかの細道ぞしのばるるかな

北海道工業大建築二　藤　原　哲　彦

北海道より来て

七沢の暑さを知れば懐かしき我がふるさとの雪のつめたさ

金沢工業大工四　川　合　晃　義

学生の最後の夏にここに来ておもひもよらぬ友を得にけり

早稲田大社会科学一　高　橋　秀　和

展望台より海の方を見て

晴れたなら見えてゐたはず鎌倉の海をさへぎるかすみうらめし

第二十一班

早稲田大政経一　伊　藤　華　恵

腰の痛みがひどかつた時に

大丈夫かと友らの声にいたはられつよき痛みもすこしやはらぐ

拓殖大外一　酒　井　亜紀子

さはやかに風の流るる草原に班の仲間とひなたぼつこする

中村学園大児童一　石　原　敬　子

ハイキングにて

さんさんと照る夏の陽を背に受けて我生かさるる喜びあふる

日本大修士二　小　坂　り　か

園児の姿を見て

赤や青桃色もまじる帽子かぶり児らは歓声あげて登りく

拓殖大外一　太　田　幸　子

澄みわたるあをい草木と青い空眺めるだけで心やすらぐ

尚絅短大事務局　若　杉　留　美

ハイキングにて

広々と続く山なみ見わたせば思ひは通ふわがふるさとに

九州女子大文一　森　山　薫

現実を見つむる心忘れじと切に誓へり討論を終へて

長崎大教育四　早　田　保　美

久々に出逢ひし友と語りゆけば心通ひてなごみゆきける

第二十二班

福岡大人文二　進　藤　裕　子

石段の石の合間に咲きそよぐ紫の小花いじらしきかな

拓殖大外一　木　下　潤　子

ハイキングにて

照りつくる日をあびながら蜂あぶの飛びかふ山道友と行く行く

尚絅大図書館　荒　井　れ　ん

不思議なる縁なるかな笑ひあひ君と語りつおむすびほほばる

九州女子大文二　久　賀　菜穂子

胸を張り君が代らうらうと歌ひたまふ先生の

姿たのもしきかな
堂々と歌ふ師見れば自づから我も姿勢を正してぞ歌ふ

湘北短大生活科学一　出野晶子

事しあれば力づよくも教へましし父の厳しさありがたく思ふ

関東学院大英米文一　小塚由紀子

丘にのぼりいざかへりみむなつかしさ我が家はいづこ元気であれ皆

中村学園大食物栄養四　古川紀子

素直なる友の言葉にうたれつつ心のくもりきよく晴れゆく
きよらかに心のくもり晴れゆきて心にひびく友の言の葉

早稲田大社会科学一　中島淳子

班別討論にて

話しえず黙しをるときひぐらしの声高々と悲しげに聞こゆ

第二十三班

呉リハビリテーション学院作業療法一　長谷川雅代

友達とつなわたりにシーソーに時を忘れて遊びほうけぬ

京都橘女子大文二　大西倫代

師の君の我を見る目はおやさしく強く輝き心打たれぬ

下田和子

夏草のかほりにつつまれともどちと笑ひ遊びて時を過ごしぬ

九州大法一　有馬陽子

幼子のごと遊びまはりてふとみれば我が白きくつ草に染りぬ

拓殖大外一　山内泰子

戦争を語る空気の重々しさ青空虫の音心に優し

実践女子大文三　大越淳子

ハイキングにて

み友らと幼子のごと次々に遊びまはりしわんぱくランド

帝京平成短大看護一　山本しづ子

青空のもとで友らとにぎやかに広場で食べる楽しいおひる

久末小学校教諭　江崎圭伊子

すなほなる友らの言葉ききをればいつしか心ひろがりゆくかも

国武先生のご講義をききて

負けるべき戦としりて湊川馳せゆかれしか大楠公はも

第二十四班

武蔵野美大短期デザイン一　岩越由美子

我が思ひ言葉に出来ぬ苦しみに思はず出でぬ必死のジェスチャー

九州女子大文二　小島まゆみ

伝へたい気持ちに言葉ともなはずもどかしさ覚ゆ短歌創作

ノートルダム清心女子大文一　安東国子

暑いなか子供のやうにまろびつつ皆うちとけるハンカチ落とし

立正大法一　岡本美栄子

草原（くさはら）に無邪気に遊ぶ子供らに幼きころの吾を思ひいづ

早稲田大教育三　今林史枝

班別討論にて

正座して背すじのばしてうなづかるゝそのお姿に胸うたれたり

熊本大文二　延塚恭子

ハイキングの帰り一匹の蝶を見て

目の前に姿あらはす黒あげは緑に映えて美しきかな

拓殖大外四　伊東亜希子

ハイキングの時、ハンカチ落としをしてどき

どきと自分の後ろに手を回しハンカチ探す山の斜面で

第二十五班

パルシェ商事　奥　東　路　子

若き頃チャイナドレスを着た母は美しからむ今より更に

九州女子短大　家政一　内　山　昇　子

新しき友らと共に歩みゆく七沢の森明るき笑顔

拓殖大　外一　溝　田　智　子

合宿に参加して恩師に出会ふ

まさかとは思ひながらも名簿見るに果たせるかなや恩師の名前

玉川大　文一　公　文　真規子

先生の講義を聞きておのが身の無知気づかされたためいき出でし

湘北短期大商経一　山　口　美佐子

お互ひに初めて会ひし友なれど語らひをれば心なごみぬ

山口県立衛生看護学院一　林　田　聖　美

真剣に講義を聞かうと思ひつゝ睡魔に襲はれいつしかいねし

第三十一班

三菱電機㈱相模製作所　工　藤　可　哉

十七条憲法輪読

知らぬ文字あまた出で来る文章を知恵しぼりつつみなとよみゆく

日本植生㈱　丹　明　博

山道の小楢林の葉末より漏れくる夏の陽やはらかきかな

亜細亜学園学生部　佐　藤　貴　之

六十路過ぎ若きと共に学ばるる人の話しに頭の下がりぬ

厚木市教育委員会　石　井　晃

山路にて吾子の笑顔を思ひ出し次回はつれてゆかんとぞ思ふ

日本植生㈱　桑　元　明

朝早く目覚めて交はすおはやうの明るき声に笑みて答ふる

小馬谷　秀　吉

学びには遅し早しはあらざると六十五歳の我も集ひ来

航空自衛隊　吉　田　孝

いやいやと思ひて出でし合宿も友と語らふ今はうれしも

熊本県菅北町立丸米小学校教諭　蓑　田　誠　一

六月義父と酒を交はしながら偶然合宿に参加されしことを知る

我が義父（ちち）の差し出す黄ばんだ文集をみて合宿の参加決意す

第三十二班

地球防衛協会　大　森　覚　道

広ごれる青き芝生のをちこちに和歌を詠まむと友のむれあり

乃木神社　松　吉　宣　和

杉こだち友と語りて和歌つくるそよかぜほゝにさはやかなりけり

㈱ピコイ　本　里　福　治

尾根道にしげるくぬぎを見上ぐればこずゑはゆれて光こもれり

軍帽をかぶりて立てる老兵と見れどもまなこかがやきてをり

厚木市役所　山　口　光　男

坂東先生の講義を聞いて

わがやでの心づかひをそのまゝにいつもやらうと心かたむる

出光興産㈱　広　島　秀　明

思ふこと心友（とも）に語りてゆくうちにこころの中

ゆやる気わきくる

宮崎神宮　木村速穂

山道を一歩一歩と登りゆく暑き夏の日我七沢に

日本植生㈱　池内清己

七沢に友らと集ひ語らふも仕事の思はれ受話器をとれり

第三十三班

中国電力㈱米子営業所　山形鴻一郎

いにし世に日の本の道明らかに示し給ひし太子尊し

新東㈱新潟支店　斎藤信二

小野吉宣先生の教育体験をお聞きして登校を拒否する生徒を救はむとともに草取る師の君尊し

福岡県立福岡高等聾学校　小柳悦朗

寝床にて心打とけ友皆と本音で語りぬ人生のことを

厚木市教育委員会　葉山神一

小野先生の御講義を拝聴して父として我子に示す生き方を師は情熱もて教へ給ひぬ

厚木市教育委員会　西海雄一

七沢の里より見ゆる山なみは雨にけぶりて墨絵のごとし

日本植生㈱　日笠誠一郎

妻や子を残してここに集ひしもいつか連れて来む七沢の里に

公務員　辰木正

夜

うち解けて語らひ合へばうれしかり想ひ同じき友らを知りて

日本植生㈱　大村康朗

遠き世の古人の詠みしやまと歌時空を超えて感動来たる

事務局

湘南高　二年　平野亜由美

へやの中時間を忘れ仕事をしひぐらし鳴いて陽がしずんでゆく

光陵高　一年　古閑倫子

事務所にて仕事の合間にいただいた茶のあたたかさに心が和む

バイトでも名札をもらへてうれしいなこれで私も一人前に

光陵高　一年　宮川玲子

刷りたての印刷物を山にして先が見えぬと抜けるため息

光陵高　一年　吉田祝子

七沢でたくさん仕事したけれど一番難は短歌創作

写真班

SW佐藤写真事務所　佐藤道明

すいみんを打ち負かしをる学生たちのねむたき顔も清々しきなり

国民文化研究会

国民文化研究会理事長　小田村寅二郎

良き友のしつらへくれし七沢の自然教室に今日ぞ集ひぬ

注　良き友（厚木市長さん）

東なる丹沢山は美はしき緑籠りゐて見るに清しき

宿泊棟・食堂棟・講義棟行き来する間も心なごみぬ

スタッフの心をこめて作られしこれの施設は行き届きをり

㈱宝辺商店代表取締役　寶邊正久

廣瀬誠さんの太平記朗誦を聞く

よき友が容正(かたち)して言ひ出でぬわれ一人生きてあればの楠公のことば
罪業深き妄念なれどもとそらんずる友のことばに胸せまりけり
正成公世にあらはれて幾千代を照らす不思議を友は語りぬ
古を今あるごとく語りたまふ友のことばにまなこうるむも

森林公園に遊ぶ

雨雲はけふはれわたり丹沢のみどりの山々つばらかに見ゆ
古も今もあぶりの神います大山あめにいつかしく立つ
名にし負ふ大山の峰仰ぎつつ友らといこふ青草の上に
（二回目の作品）
鐘ヶ岳の木々も麓も霧にかくれ雲のま中に小鳥の声す
合宿教室終らむ時の迫りきて筑紫の友のうた便りより
平和像の虚妄打破せよと遠きより強きしらべの歌寄せり友は
美しき心やしなひたまへとぞ祈りて友は歌おくるなり
年毎に講義担当せし友がことしは見えず歌よせ給ふ

九州造形短期大学教授　小柳陽太郎

合宿開始の朝に

友を待つ朝のひとときとりめぐる山ゆ湧きくるひぐらしのこゑ
はげしかりし雨もはれつゝぬれし葉の葉末そよぎてすゞ風の吹く
今日の日をたゞに目ざしてひととせをすごしましけむ若きみ友ら
受け入れの準備を急ぐ若きらの胸にあふるゝあつきおもひは
合宿のはじまる前のひとときを静かなる部屋に蟬の声きく
（二回目の作品）

合宿最終日の朝

虫の音のさはにおこりて合宿の最終日の朝あけなむとする
霧ふかくこめしあしたよ若きらは昨夜(きぞ)の疲れにいまだ眠るか
合宿のいとなみとはに絶やさじと心一つにはげみたまひし
苦しきことここだあらむを朗らかに語りあひつつはげむみ友ら
たぢろかぬ友の力によみがへりよみがへりつつ続く合宿
今日を終らば心やすらにひととせの疲れ癒しませ若き友らよ

国民文化研究会常務理事　長内俊平

妻への便り

かじか鳴く声かとまがふひぐらしの声に七沢の夜はあけゆく
秋霖(しゅうりん)かとあやしむばかり膚寒き雨降りやまず夜はあけゆくに
ひる近くやうやく空の雲きれて皆口々にああよかつたなあ
若きらが心よせ合ひひととせをつとめきしつどひの開会迫る
集ひ来る学生迎ふと若き友もネクタイつけて出でゆきにけり
マイクのテストいくたびくりかへすみ友らの声にも緊張の伝はりてくる
はれゆきし空なほときじくしぐれきてまたひとしきりひぐらしの声
（二回目の作品）
心身の力抜けゆく心地していま合宿の終り迎ふる
若きらはよくぞつとめしその準備にその運営に死力つくして
病の床おして来れる稲津君あを白き顔しつつ事務をとるかな

放送に斎庭づくりに独楽の如動く森田君にほとほとかまけつ
初めての指揮班長の大日方君いかにかたづきのきびしかりけむ
朝礼の指揮とる大島君朝ごとりりしき挨拶を述ぶ
開会式にみたま祭りに夜の集ひになりはひさきて君つらなり給ふ（足立原市長）
会場の設営こまごまわが事の如く職員の方々手伝ひくれし
明日よりは来ん夏めざしつとめなむつどひをたのむ人のためにも
谷ぞこよ雲や湧くらむ鐘が嶽峯々こめて霧の流るる

尚絅学園常務理事兼事務局長　徳永正巳

日ぐらしの声しきりなる丹澤の杉の木立に小雨そぼ降る
丹澤の山に夕闇せまり来て日ぐらしの声はたと止みにき
（二回目の作品）
国の為生命捧げし御祖先偲び涙こぼれつ斎庭に立ちて
後を継ぐ若き友等のたゆみなき学びのあとの知れて嬉しき
来る年もまた集ひ来よ大阿蘇の麓の宿に我待ち居らむ

千代田コンサルタント㈱代表取締役専務　上村和男

坂東兄の講義を聞きて

ほがらかに笑みをも浮かべ語りゆく君の講義を楽しく聞きぬ
（二回目の作品）
階段をおりてしゆけば山百合の美しく咲けり道のべそばに
雨つゆにぬれし山百合ひときはに美しく見ゆ朝のしじまに

アサヒビール飲料㈱取締役営業副本部長　坂東一男

導入講義を引き受けて

合宿で講義頼まれしと伝ふれば妻驚きぬ可能なりやと
やうやくに自分のことどもそのまゝに話しゆかんと心さだめぬ
しきしまの大和心を伝へんと思ひのたけをこめて語りぬ
（二回目の作品）

「慰霊祭」で御製を拝誦す

思ひこめ撰びし御歌一首づつ声もさけよと高らかに拝誦す

神奈川県立金井高等学校教頭　国武忠彦

丹沢の山なみはるかに眺めつつ師とかたらひて歩くたのしさ
里人の老人ありて山々の名をたのしげに教へたまひし
あの山の隠れて見えぬふところに日向薬師はありますといふ
（二回目の作品）
友だちの歌を皆んなと直しあひよき歌になりて友の喜ぶ
思はずもわれもうれしくなりにけり友の気持を間近く感じて

日商岩井㈱大阪エネルギー部部長　澤部壽孫

坂東一男先輩の導入講義を聞きて

しきしまの道楽しきと語ります先輩の話は聞くにあかずも
若き日に誓ひしこころひとすぢにつとめ生きますますらを先輩は
若きらも目を輝かせ輝かせ聴き入りぬ先輩の話は面白くして
（二回目の作品）

合宿の終りに際し（八月十一日）

師や友と出会ひし日より三十年のすでに過ぎしも夢の如くに

三十年の長き年月思はるる師や先輩も年老いますと
いたらざる我れにはあれど教はりしみ心継ぐべく励まざらめや
大阿蘇にまみえむその日を楽しみにつとめ生きなむ友らとともに

新日本製鉄㈱機械プラント事業部部長代理　今林賢郁

「極まればまた甦へる道」ありと思ひ定めて励みし日々はも
西東あまたの友ら集ひきて厚木合宿迎ふるうれしさ

（二回目の作品）

山内健生兄の講義を聞きて

深々の思ひをこめて諄々と説きあかしゆく国の姿を
若きらの心に通へと念じつつ君の言葉に聞き入る我は

㈱講談社広告局次長兼広告企画部部長　磯貝保博

事務局室で開会式を開く

なすべきをすべてやり終へはればれと合宿開始の声を聞くなり
開会のことばを聞けばいくたびもこの地たづねしことの思はる
いたつきの友をまじへて合宿のくさぐさのことに心くばらむ

（二回目の作品）

合宿を終へて

〝おつかれさま〟互ひにかはす言葉にも成功いはふ思ひあふれり
つかれたる顔つきなれどはればれとかはす言葉にうれしさあふるる

神奈川立湘南高校(定)教諭　山内健生

八班野崎譲君（湘南高校定時制四年）へ

大学に通ふ友らに交はりて憶せず語れすぐなる君よ
「行かないか」と声をかくれば「行きます」とただに答へしたのもしき君

（二回目の作品）

「自然教室」の皆さん、ありがたうございます

くさぐさのことどもあれど御心を千々にくだかれし高橋所長
前任の難波所長とともどもにこれの集ひを支へたまひぬ
いかにしてわれらの集ひを支へんと久しき準備のただありがたし
所長さんもスタッフ諸氏も心あはせこれの集ひを蔭にて支へし

㈱竹中工務店国際事業本部営業部営業課長　稲津利比古

肝臓を患ひ、自宅静養中でありしが急遽合宿に参加す

やまひ得し身にはあれども合格に参加はたせしことぞうれしき
わがからだ気遣ひ給ひて声掛くる友あまたありありがたきかな

（二回目の作品）

友どもと「信」の正道踏み進み進みゆきなむ力合せて

福岡県立新宮高校教諭　小野吉宣

壇上に立ちたる我は体験を語りゆきけりこころを込めて
きく友の心にま向かひ語りゆく言葉えらばず思ひのままに
壇上ゆ語りてゆけば友らきき我胸あつくもえあがるなり
師や友はつたなき我を懇ろにねぎらひ給ふ有難きかな

（二回目の作品）

班友に新しき歌など教へられ我も歌ひぬたはむれながら
一方に学生らしき歌あれと我ら歌ひぬ「永遠の幸」

(元)日特金属工業㈱常務取締役　加納祐五

合宿地に向ふ途上にて

けふよりは夏合宿かこころはづみ七沢さして
車馳せゆく
さねさしさがみの小野と詠みましし小野の里
でかこのゆく道は
燃ゆる火の中にたたしし古事をおもひてあれ
ば山近付きぬ
雲たれて雨もよひする空の下にもだししづま
る山並みあはれ
見れどあかぬみどり列山たつ霧の流れやまず
て見えかくれす
この山のふところよけむよき友とともに語ら
ばこころたるべし

(二回目の作品)

合宿最後のミーティング(班別懇談)

うれしきもつらきもあれどこもごもにつきぬ
思ひを語らす友は
やはらかに直ぐなるこころをとめらの面にこ
とばにあふるるものを
をとめらに別れのことば告げなむとするにす
べなく涙すわれは

㈱不動産コンサルタント代表取締役　松吉基順

七沢のみどり濃き森しづけくて時をり聞えく
からす鳴く声
いただきはうすがすみたる大山にかかれる夏
雲うごくともなし
いつかしき大山の裾につらなれるあをき山脈
あかず眺むる
相武なる学びやの庭ゆ大山を眺めすごしし若
き日おもほゆ
大山を仰ぎ武を練りし若き日は危急迫りしみ
國にありき

(二回目の作品)

若きらと五日を過せし七沢の里しづけくて蟬
の声きく
いたらねど思ひのたけを語りあひて若きらと
過しぬ七沢の里
七沢ゆ別れ去るとも若きらよ正道求めて生き
ぬきたまへや

高千穂商科大学教授　名越二荒之助

陸軍の編上靴今も保革油もて磨くは白井伝伍
長
ことあらば醜の御盾といでたつを誓ひて今も
軍装整ふ
軍帽をかぶりてたてば老兵も生甲斐覚ゆと強
き言の葉
現代のドンキホーテと笑ふ者あれどたぢろが
ず武夫白井
辺境の対馬にありて日の本のいのちに生くる
ますらをの友

山陽自動車学校社長　加藤善之

自然観察指導員石井晃君らと

丹沢の屋根をつたひて道端の草木説きます指
導員君は
「がまずみ」の赤き実らまし小鳥らの好物な
りとははじめて知りぬ
今飛びし「はんみよう」虫は美しとふ友の言
葉に班友ら寄り来る
「黒もじ」の小枝をつみて嬉しげにみやげに
するらし友もち歩く
その昔危急にそなへ「うこぎ」なるこの草植
ゑしとふ侍屋敷に
友と呼び友と応ふるますらをの集ふは國の力
なりけり
夕暮れてなほ鳴きやまぬひぐらしの声はさや
けし七沢合宿

(二回目の作品)

心して努めざらめや若きらの生命の息吹き湧
き立つほどに
八百萬神にぞ祈る新しきみ国の生命すぐやか
にこそ

熊本市役所清掃部東部清掃工場技術課長　折田豊生

田久保先生の御講義を思ひ返しつつ

競ひ鳴くかなかな蟬の声しげし七沢の森暮れ近くして

世の動き目に見ゆるごと示されし師のみことばをかへりみるかな

（二回目の作品）

長内俊平先生の御講話をお聴きして

あまりにも我にこだはりてありにしを気づかしめらる師のみことばに

すなほなる心にてあらば大いなる道につらなることを知らさる

熊本県立第二高等学校教諭　白濱　裕

簑田誠一君（前任校の生徒）と会ふ

仮名簿めくりてゆけばなつかしき君の名前を見つけ出しぬ

故郷をはるかへだてしこの地にて君と会ふとは何の縁か

職場にて苦労多きも新しき力湧きぬと君は語れり

住友電気工業㈱生産技術部主査　布瀬雅義

今日よりはいよいよ合宿の始まるとかの地偲びつゝ会社へ向かふ

あまたなる友ら集ひ集ひてし合宿集まる頃合ひなるか

関東の友らの力集ひてし集ひさかえよとひたに念じぬ

（二回目の作品）

簑田誠一君（第三十一班、熊本県・小学教諭）の「全体感想自由発表」を聞きて

この地にて八年ぶりに熊本の教へ子に会ひしと友（白浜裕会員）語りをり

発表の最後になりて登壇せしその教へ子は語り始めぬ

のどかなる学びの庭にまがまがしき争ひ起す人らありきと

年ふりて忘れをりたる合宿を思ひ出したり争ひの中で

はるけくも熊本の地より参じたりわらにもすがる思ひのままに

合宿のすべての講義しみじみと心に入りぬと語りたまひぬ

不思議なるえにしのしはざ心ある人とふたたびつながりを得し

福岡県立玄洋高校教諭　矢永誠二

坂東先輩の御講義をききて

御家族のこと語らるる先輩の御声はひときは大きくきこゆも

子は母の口もとを見て言の葉をおぼゆるものぞと語り給へり

（二回目の作品）

指揮班長、大日方学君へ

合宿の準備のために十日余りきみはひたすらつとめしといふ

初めての会場なれば思はざることどもあまたおこりたるらん

つぎつぎと出で来る仕事につかれをもかへりみずしてつとめしきみはも

去年の夏指揮の仕事をともどもにつとめし日々の思ひ出さるる

東京理科大学講師　八木秀次

管理棟に掲げられたる昭和天皇御製「たゆまずもすすむがををしみちをゆくうしのあゆみのおそくはあれども」を拝見して

たゆまずもすすむがををしとふ牛の御歌かかげられたり筆跡しるく

よみゆけば遅くはあれどどつしりと土ふみしめてすすむが浮び来

出す足の遅くはあれどたゆまずにすすむがををしとふ御心かしこし

「ををし」とふ御言葉に自づと力込めて拝誦したりこれの御歌は

（二回目の作品）

来夏の合宿教室運営委員長を熊本の折田豊生（正）・

白浜裕（副）両先輩が引き受けられると聞きて

忙しきなりはひの中に大任をひきうけたまひし大人らかしこし

神奈川県立津久井高等学校教諭　大日方　学

合宿の様々なこと悩みをれば先輩の来たりて肩もみ給ふも

念入りに肩もみ下され疲れたる体に力のもどりしここちす

小野吉宣先輩のお話をお聞きして

母泣かす生徒に向かひ心から叫ばれし言葉に胸を打たれり

（二回目の作品）

吉川広治兄（第十三班、中央大四年）の「全体感想自由発表」の折の発言を聞きて

指揮班の苦労わかりしと壇上で友は頭を下げ給ひけり

壇上の友のことばのありがたくあまたの苦労の報はる思ひす

北九州市立八幡病院　森田仁士

登校を拒否する吾子に成すすべのつきて涙せし母の悲しも

かくばかり母を悲しますは許さじと先輩は思はず胸ぐら摑みしとふ

㈱ルーツ　取知浩一

勤務中合宿の事を思ひて

合宿の日程表をながめつつ集ひし友らを思ひ浮かべり

いまごろは友ら集ひて開会の式厳かに行なはむとすか

すぐにでもはせ参じてみ友らと合宿の集ひに加はりたしも

つとめをるも合宿の集ひ気にかかり三度四度日程表をながめをり

（二回目の作品）

「全体感想自由発表」の折、拓大一年・酒井亜紀子さん（第二十一班）の発言をききて

さはやかに贈られし和歌拝誦する乙女の面輪のすがしかりけり

まごころをこめて詠まれし言の葉に乙女の心はゆさぶられしか

タマポリ㈱　吉川理夫

小野先輩の講義を聞きて

声上げて生徒を語る先輩の思ひ伝はりて心震ふも

切々と語る小柄の先輩の壇上の御姿大きく見ゆる

（二回目の作品）

うつすらと霞む山並ながむれば学びの庭にひぐらしのなく

船橋市立法典東小学校教諭　竹内孝彦

ふつふつとこみあぐるものおさへかねわれは来にけりこの夏の日も

志高き友等と語る日を七澤の宿に求め来にけり

（二回目の作品）

「夜の集ひ」

安藤さん（注・「自然教室」職員）笑みつつかなでるアコーディオン己が心にしみ入るごとし

宵闇にひびきわたる〝故郷〟の音をききをれば涙わき来も

学校法人津田学園中学校教諭　三林浩行

廣瀬誠先生

未完成欠点で始まる人の世と切に語らる我等のために

（二回目の作品）

「歌稿」にて白井傳先生の事を詠まれた名越二荒之助先生のお歌を読みて

ことあらば軍靴軍帽身につけて身をかへりみず立つ人ぞ大人は

我が国の御楯たのもし対馬には白井先生ありと思へば

久留米大学附設高等学校教諭　名和長泰

事前合宿の折りに

雨雲に山けぶれどもをちこちに蟬鳴き出でぬ

雨やみたるか

（二回目の作品）

真心とあまたの熱き励ましに支へられしか合宿教室

この集ひこの集ひこそ生きてゆく力をさづかる奇しき縁よ

夜の更けて窓辺を見ればくさぐさの寄りくる虫の多きに驚く

BBS金明㈱代表取締役　中田一義

国武忠彦先生のお話を聴いて

御言葉の一つ一つが身にしみぬもつれし糸をほぐすごとくに

白井傳先生をお見送りして

遠き道まゐりたまひし御心の重きもわからず我身はづかし

（二回目の作品）

垂幕に墨書された昭和天皇御製「たゆまずもすすむがををし路をゆく牛のあゆみのおそくはあれども」を朝夕に仰ぎ見て

「たゆまずも」牛のごとくと詠みたまふ御歌を仰げば力湧きたつ

舞岡八幡宮宮司　関　正臣

廣瀬誠兄の講義を

広原を駆け抜けてゆくはやてにもたぐへて開きつ君が言葉を

（二回目の作品）

毎朝廣瀬誠兄の朗詠の声を聞く

ゆくりかにきこゆる大声何事と目覚めしめらる二日目の朝（「ゆくりかに」は、ゆくりなくの意）

大御歌誦みまつる声床の上に聞きつつ起床の時を待つ朝

大御歌又古事記をば誦みあぐる爽やかの声今朝も聞え来

朝毎に慎み聞けり大御歌又古事記をば誦みまつる声

新技術事業団管理部業務課課長　野間口行正

小田急線にて

合宿に参加するらし若き友の「日本への回帰」を読む姿見つ

受付にて

昨年の夏同じ班にて過したる友のみ名読むなつかしみつつ

（二回目の作品）

み祖らの御霊まつらんと友達と心あはせて斎庭しつらへぬ

雲低く雨もふりきて斎場を講義室へと移すはさびし

奇しきかな雨のあがりて屋外のかねての斎庭に友ら集ひぬ

粛々と静まる木立に囲まれて御霊まつりをつとむるかしこさ

山口県立高森高校教諭　寶邊矢太郎

森林公園にて

芝草にすわれる母娘のむつび合ふさまほほゑましあかずながめぬ

日差しやや強くなりしかやさしくもパラソルひらきて娘にさしかくる

（二回目の作品）

勧誘せし生徒に

道すがらゑみたたへて挨拶する君の明るきこゑのうれしも

キャンドルをもちてすすみゆく火の神は誰がつとめんと見れば君なり

ハメハメと腰蓑まいてかろやかにをどる君みてはらかかへたり

福岡県立玄界高校教諭　日比生哲也

小野吉宣先輩の御講義を聞きて

吾が子供どうすることも出来ないと嘆きて泣かるる母親悲し

迫り寄り胸ぐらつかみ教へ子に向ふ御姿目に浮び来る

（二回目の作品）

班友は発言すれど吾が思ひ言葉にならずくやしとふ友

㈱不動産コンサルタント　松　吉　基　光

厚木市職員の山口先生とお話しして

合宿のため何度も何度も打ち合はせ我らのために準備下さる

（二回目の作品）

乙女らは汗流しつつ働きをるに報ゆるすべなく申し訳なし

白　井　傳

つゆくさのうすむらさきにさきてありちさきいのちはおのもおのもに

あをやまをいくまがりしてひろのはらつゆひかりをりくさぬすがしも

あせふけばすずかぜわたるもりのさとしばくさはらにしばしいこへる

おにぎりにのりをしまいてたべにけりひるげはたのしわかきともらと

小野吉宣教諭の講演

わかき友小野教諭はや二十年もゆるおもひをだんじょうにのぶ

わかきらとはたとせあまりもゆるひのをしへのひびをかたりますはや

那須教諭講演

にひづまとうたがたりする那須先生ことだまのみやびあふるうれしも

こぞのひにわがつくりけるこしをれをレジュメにしるしうたかたります

あかあかともゆるものありくさかげのうたよみかへしひとりいのれば

（二回目の作品）

げんかいのなみによひつついやはてのつしまゆはろか七沢にきぬ

ふたたびをあはむひもがなかくもひてわかれしともとここにまたあふ

千喜利青少年会館嘱託　岡　村　義　一

君が代を歌ひつつ上ぐる日の丸仰ぎみて心洗はる合宿の朝

かねてより名前聞きつる対馬なる大人（うし）に会ひませりこの合宿で

われと同じ師範出られし白井大人（うし）に親しみ覚ゆ語らうほどに

（二回目の作品）

七沢につどひし友らと別れゆく時近づきて心せはしも

ラウンジにひとりいませる理事長にわれ挨拶す心をこめて

㈱中央塩ビ製作所代表取締役　星　野　　貢

開会式で足立原厚木市長さんの挨拶をききて

つもる年のみ思ひ凝りてなりなりしここ七沢の自然教室

若き日の集ひ忘らえずつひになりし友の喜び如何にあるらむ

（二回目の作品）

乙女らの別れのしるしとたびましし文のみ言葉ただにうれしも

また会はなと微笑（あみ）てま向ふ乙女らのみ顔はれやかにすがしく見ゆる

㈱信陵会館取締役　加　部　隆　三

山道を登りゆけども相模の海見はるかしえず煙りてあれば

夕されば ひとしほしげくカナカナの鳴きわたりゆく七沢の森

（二回目の作品）

慰霊祭にて

たたかひに斃れし人を弔ひし友また逝けり年経るごとに

友らゆき次なる世代の人々と共に慰霊の祭りに詣る

（元）法政大学人事部長　香　川　亮　二

相模なる原当麻の地に心決し友ら集ひして五十年あまり

丹沢の谷より出づる相模川にみそぎして友ら学びしと聞く

戦ひ終りて

不知火筑紫の国に三十年の余集ひ集ひして今日に至りぬ

逝きし友もみそなはすらむこたびまた相模に
集ふをかしこしと思ふ
斃れたる友を嘆かずとうたひして逝きしみ友
らよ守らせたまへ
（二回目の作品）
われら迎ふと四人ならびゐし受付の中の一人
に心ひかれぬ
面ざしのいたく似たるに不思議なる思ひのし
つつ手続すます
仮名簿開きてみれば古閑の名あり亡き友が子
の嫁ぎし先か

加藤敏治兄のお孫さんと知りて

戸塚の里にすまひせし頃はいとけなき幼な子
にてありぬかく生ひ立ちし
面ざしは父に似ませり亡き友が喜び語りし父
に似ませり
〃名札もらひこれで一人前〃と喜びて歌ひし
と友に告げまつりなむ
不知火の国よりはろか海山をこえて伝ひくる
君が思ひは

富山女子短大教授　廣瀬　誠

森林公園にて

胸札をのぞきあひつつ「やあやあ」と短き挨
拶かはすうれしさ
うちつれて登りゆく道樹々繁く澄みとほり鳴
く山蟬の声
吹きとほる風を涼しと君とともに木漏れ日揺
るる蔭に憩ひつ
日本武の尊のみ跡かぎろひの燃ゆる相模野を
指して語りつ
日本武の尊語りてもろ蟬の澄みゆく声にうち
浸りつつ
日本武弟橘媛いまよみがへり日の本のいのち
を護らせたまへ

合宿地にて背後の山を望む

神さぶる七沢の山いただきに群れ立つ樹々を
雲かすめゆく
頂めがけそそり傾きうち茂る神さぶる樹々見
れどあかぬかも
日の本のいのち護らむとつどふわれらを山の
神たち見そなはしたまへ
そがひなる阿夫利の山は千早振る神の御山と
ひたながめつつ
七沢山夕雲かかり杉木立とよもして鳴くひぐ
らしの声
（二回目の作品）

合宿感想の歌

とりかへす君が代のメロディ正面の日の丸大
きくそぞろうれしも（開会式）
ユーモアと笑ひまじへて説きませば岩戸あく
るごと皆笑ひつつ（講義）
国際情勢ただごとならず息つめて一言も洩ら
さじとのり出してきく（講義）
君が代日の丸さまざまの問題鋭くも説きます
を聴く拳にぎりて（講義）
あらためて太子の御言葉ひしと味はひ遠き亡
き師を偲びまつるも（黒上先生憶念）
班別の討議にわれも加はりつ息つめて聴く若
き人の声（班別討論）
討議の座にすわりつづくれば痛む足こらへて
ぞ聴くひたぶるの声（班別討論）
坐りつづけ足腰痛し頭痛しいまは眠らな手足
のばして（班別討論）
一人一人の短歌をめぐりよき意見次々にいで
座ははづみつつ（班別短歌相互批評）
己が歌に感極りて泣きむせびひそかに座を立
ちかくれゆく人（班別短歌相互批評）
人泣けばわれも泣きつつ続けゆく歌の添削か
なし短歌は（班別短歌相互批評）
わが添削喜びくるる女らのうら若き声にわれ
もうれしき（班別短歌相互批評）
夜をこめて策を練ります幹事らの底ゆく力を
偲びまつるも（縁の下の労苦を思ふ）
力こめ声ひびかせてわれは説きつ相模にやど
るかなしき古こと（わが講話）

うねりうつ思ひをこめてひと息にいぶきの狭霧と吐きいだしゆく（わが講話）
かがり火と暗やみのしじまに神を招ぐ声朗々と強くおごそかに（慰霊祭）
牛の如太くたくまし然れども神さびてかそけし神を招ぐ声（慰霊祭）
暗闇にひびくその声なつかしき関氏の声と頭垂れ聴くも（慰霊祭）
雨霧に隠れゆく山の杉木立現れては消ゆさらば別れむ（合宿終了）
なつかしき友らとかくて別るとも又々も逢はむ幸くましませ（合宿終了）

七沢森林公園　日本銀行監事　小田村　四　郎

尾根道をひとりしゆけば秋風の涼しく吹きて蟬鳴きしきる
見はるかす南に平野ひろごりて相模の海の遠くかすめる
たどり来し巡礼峠に年ふりしお地蔵さまのたたずみてあり
そのむかし巡礼母子の山賊に殺されしあとともむらふといふ
山道に汗流しては秋風を受けつつとれるひるげ楽しき
（二回目の作品）

十三班の班付として大木聴君（拓大一年）の帰郷を送る

祖父君の病篤しと七沢を下りし友はいかにますらむ
祖父君の身を案じつつ合宿に心残して君去りゆきぬ
会へばまた別るるは世の常なれど思はざる別れは悲しかりけり
短かかれど共に学びしこと忘れじ再び会はむ日をば待ちつつ

東京目蒲病院・産婦人科医長・医学博士　江里口　淳一郎

（二回目の作品）

合宿につらなりて

見放くれば丹沢の山けぶりつつ神さびて見ゆ厳しく見ゆ
のぼりきて蜩の声山に滲みしみじみとしてさらにのぼりき
身を粉に心くだき勉めましし友らのありて合宿成れり
天地のまにまにわれら今ここに逢ひがたくして逢へるをよろこぶ
丹沢の山いつしかに日を沈め蜩の声も静まりにけり
他力とは自他わかたざる同信の生活ならむしみじみ思ふ
われもまたここにつらなり友垣の心に添はむつたなけれども

関口靖枝

坂東さんの導入講義を聞いて

なりはひの中にみづからまごころを友はみごとに生かし給ふも
（二回目の作品）

第二十一班、酒井亜紀子（拓大一年）さんの発言を聞きて（「全体感想自由発表」）

をとめらの清きコーラスをうちたたへ歌贈ります益荒男の君

横浜平沼高校通信制教諭　福田忠之

国武さんと

久々に会ひたる友と床のべて語り合ひつつ寝ぬる喜び
（二回目の作品）

第三十六回合宿教室を終へて

七年も八年も前のことなるかこの山拓き棟造らむとす
この地にてやがて合宿開かむとの市長の言葉今もうつつに
やうやくに集ひ開きて人々の多く群れゐる見るもうれしき
不思議なる縁なるかも雲仙は火を噴き上ぐる

今しこの時
この年もみたまのふゆをかがふりて大合宿は
終らむとす

航空自衛隊航空教育隊生徒隊教育科教諭　村山寿彦

緑なす山連らなれる丹沢にひときは高く大山
の見ゆ
丹沢にひときは高き大山の峰には白き雲たな
びきぬ
白雲のながくたなびく大空を右に左につばく
らめ飛ぶ
（二回目の作品）

バス乗場にて友を見送る

合宿で共に学びし友どちの姿さがしてバスに
近づく
バスのなかゆわれに気づきし友どちの手をさ
しだせるを見出しうれし
いつの日か再びあふを約しつつ友の両手をか
たくにぎりぬ
窓ごしにかたくにぎりて行くを惜しむ交す言
葉はすくなけれども
四日前はじめてあひし友なれどわかれがたく
て握手かはしぬ
二歩三歩あとをおひつつ手をあげて動きだし
たるバスを見送る
杉木立のみちくだりゆくバスのなかの友はい
つまでも手をふりてをり
手をあげて見おくるバスは杉木立のみちとほ
ざかり見えずなりゆく
友の乗るバスの去りたる杉木立のみちにはげ
しく蟬のなくなり

方栄産商㈱取締役石油営業部部長　柴田悌輔

森林公園にて

せみの声に耳をすませば涼風のさやかに吹き
ぬ汗ぬぐふごと
（二回目の作品）

和歌の「班別相互批評」の折り

疑問をばすぐ口にする友どちのほほは不満げ
にふくらんでをり
判つたとふ友のひとみの輝きに安堵の思ひが
胸内みたす
誇らしげに添削を終へしを読みあぐる幼き仕
草の楽しげなるか

公務員　亀井孝之

廣瀬誠先生の御講話を聞きて

一語づつ気魄をこめて語りたまふ師の御言葉
に胸せまりくる
（二回目の作品）

「全体感想自由発表」にて

七年前学びしことに思ひ至り合宿に来しと聞
けばうれしも

拓殖大学外国語学部教授　松本幹男

合宿は厚木に限るときつぱりと語りし友の笑
顔忘れじ
夕やみのせまる窓辺にひとしきりかなかなの
声さえわたり行く
（二回目の作品）
拓大は日本一ぞと胸をはる学生の心をうれし
く思ふ

小田原市立富水小学教務主任　岩越豊雄

頂きのわづかな木の間ゆ広ごれる相模の原の
うすがすむ見ゆ
これも日のゆるる木陰に友どちは歌作りをり
心静めて
（二回目の作品）
いにしへの手ぶりのまゝに御祖先らの御魂を
まつることのかしこさ
御先祖らのみ魂よばはんと警蹕の声はやみ夜
にしみ通りゆく
みあかしに浮ぶ斎庭の真白きしでそよそよと
風にゆれたり
ふく風に斎庭を囲む竹ささの葉擦れの音のか
すかに聞えく

富山工業高校教諭　岸本　弘

森林公園にて

丘の上の展望台にたたずみて友としばしの時を安らふ
南に相模の海も見えるといふかすめる彼方を友と眺めぬ
走水・相模の小野も近くにありとふ友の言葉に耳傾くる

（二回目の作品）

合宿の進みゆくほどにわが生き方の小さきことを思はしめらるる
大きなるものに会ひては己が身をゆだねて生きるほかなしと思ふ
一人でもまみえし学生と交はりてこの一年を生きてゆきたし

キューピー㈱財務部部長　山本茂夫

輪読の友の声聞きつつ思ひ出づ初合宿にてとまどひしことを
七沢の朝のしじまに聞こえくるうぐひすの声すがしがしきかな

三菱重工業㈱社長室関連会社部主務　島津正数

三十年振りに合宿に参加して

若き等と共に学ばむうれしさに足取り軽く坂を上り来
今年こそ学びの庭に集はむと心躍りて我は来にけり
七沢の木々の緑に囲まれて体験するは心清しき

（二回目の作品）

長内俊平先生の講話を聞きて

師の君は父母の形見と共々にこの合宿に来られしといふ
身につけし草木染なるネクタイは師の父君の形見の品とふ
四十余年の長きにわたり大切に大切にし給ふ形見の品々
日の本のこの国柄をのちのちも伝へ守らむ国民として

東急建設㈱東京支店建築部審査課長　奥冨修一

丹沢の山の麓は夕暮れてひぐらし蟬の声にぎはしき
開会の宣言聞けば過ぎし日の合宿準備の数多浮び来
やうやくにここまでたどりつきたると思へば胸の熱くなりゆく

（二回目の作品）

最後の班別懇談にて

たよりだせば返事くるると即座にも答へる後輩のみ声うれしも

中島法律事務所弁護士　中島繁樹

新らしき設備整ふ七沢の山ふところに集ふうれしも
友多く広きホールを満たすごと集ひ来たれりこの夏もまた

（二回目の作品）

裏田誠一氏（第三十一班、熊本県・小学校教諭）の意見発言を聞きて（「全体感想自由発表」）

合宿で学びしことがともすれば揺らぐ心を支へしといふ

亜細亜大学助教授　東中野修道

厚木なる七沢のおくのやまなかに広がりてあり自然教室は
強くなり弱くなりつつたえまなく鳴く蟬の音をうましと思ふ
講義室へ急ぐなかにも山道を語らひて行けば楽しかりけり

（二回目の作品）

閉会式にて君が代を歌ふ

力強くまた力強く湧き起る雲のごとくに歌声ひびく
粛々とまた力強く君が代を歌ふ声はも一つにひびく
ともに唱ふその歌声に聞き入ればうまき歌か

もめがしらあつし

神奈川県立秦野曽屋高校教諭　原　川　猛　雄

田久保忠衛先生のご講義を聞きて

「道義なき国」と語りし先生のお言葉強く胸に迫りく

世界より侮り受けし日本の今の姿は情けなきかな

（二回目の作品）

山道の階段降りしそのわきにピンクの山百合咲きいでにけり

ほつそりと茎をしのばせしそのさきに可憐なる花の咲きいでにけり

廣瀬誠先生のお話を聞きて

心こめ一語一語を語られし古事記の世界のうかびくるごと

大　島　啓　子

七沢の森

ひぐらしの声山々にこだまして森は静かに暮れてゆくらむ

（二回目の作品）

最後の「班別懇談」

来年も友達連れて必ずや参加しますとの言の葉うれし

公務員　加　久　至　誠

小野吉宣先生の御講義をお聞きして

放課後の学びの庭に教へ子と共に草とる御姿しのばゆ

教へ子を吾はなぐりつと語らるる君踏みたまふ師の道厳し

（二回目の作品）

廣瀬誠先生の御講話

弟橘姫をしのびてよみませる御歌を聞けば胸に迫り来

㈱講談社・校閲局校閲第三部副部長　藤　井　貢

（二回目の作品）

谷間よりうぐひすの声の聞え来て吾驚きぬ宿に向ひつつ

杉木立の生ひ茂るなかひぐらしの声ぞ聞え来るこの学び舎に

新しき友との出会ひ忘れめやなりはひたがひ離れ暮すも

なつかしき友の姿に励ましを受くる思ひに今日も生きたり

七沢の緑ゆたけし街中ゆ辿りて来れば緑ゆたけし

東京・伊佐ホームズ㈱　伊　佐　裕

（二回目の作品）

合宿最終日の早朝

カナカナと蟬の声の響きくる七沢の森に朝は来にけり

起き出でて外ながむれば雨上りかすむ谷間を小鳥とび行く

福岡県立福岡中央高校教諭　占　部　賢　志

折ふしに登校しぶりて家中にこもる生徒を訪ねゆく先輩

登校を拒むわが子のかたはらになすすべもなく母御泣きをり

いくたびも母御泣かせしF君に先輩はげしく迫りしといふ

（二回目の作品）

緑濃き木立ちの中にたたずめばしき鳴くせみのしらべ妙なり

香川大学農学部園芸利用学研究室助教授　川　田　和　秀

残したるあまたの仕事有りたれど教室に来ぬればただに学ばむ

（二回目の作品）

「全体感想自由発表」を聞きて

壇上にのぼりし友の発言に学生参加の大切さを知る

福岡県立水産高校教諭　菅　原　享　二

心地よき風の吹きくる夕暮れの杉の林にひぐらしの鳴く

緑濃き山のふもとの七沢に集へる若人の面す

がしも

（二回目の作品）

「班別討論」にて

きびしくも笑みを浮べつ語らるる先輩の話に時を忘るる

防衛施設庁施設部　山　根　　清

十七条憲法を輪読して

聖王の遺し給ひし大御教へ友らと共によみゆくうれしさ

「共に是れ凡夫」とのらせし御言葉に触れ得て救はるる思ひするかも

時ふれどやまと言の葉力ありて我らの心に伝はり来るかも

（二回目の作品）

あひともに学びし友らと別れゆく時近づきてさびしく思ふも

㈱日本インベスターズサービス調査部　小　柳　志乃夫

小野吉宣先輩の体験発表を聞きて

卒業のその日よ友らとカーネーションを贈れる生徒の思ひしぬばゆ

口にさして生徒の渡すカーネーションを先輩も口にて受け取りましき

いかばかりうれしかりけむ語らるる先輩のみ顔の輝きて見ゆ

（二回目の作品）

廣瀬誠先生のご講話を聞きて

師の君のひたしたまひす古事の記の御話聞くにあかずも

力強く声ふりしぼり若きらに語りたまへる越の師の君

ウガヤフキアヘズの御名慕しも成り合はぬ生きのまにまにつけられし御名

大阪府立交野高校教諭　絹　田　洋　一

合宿に参加する卒業生らと新大阪駅で待ち合はせ、二年ぶりに会ひて

電話にて話はしたれどまなかひに君の顔みてたゞなつかしき

高校にいませし頃は生徒会長の繁き務めにはげみし君はも

（二回目の作品）

「全体感想自由発表」の折、班員の新田洋君（第十班、防大四年）の発表を聞きて

「なだしお」の事件の折には道ゆく君を「人殺し」とのゝしる人もありしと

こころなきののしりうけていかばかり君の心は傷つきしならむ

日の本の国民守らむとひたすらに励みし君の思ひいかにぞ

けふよりはまどふことなし皆さんを守りてゆかむと言ひし君はも

出光興産㈱店主室　庄　子　　修

田久保先生の御講義を聞きて

激動の時代の中を歩めども認識不足の我が身を恥づる

（二回目の作品）

胸を張り「我ますらを」と言へるまで学びを続けむ仕事に励まむ

東洋精密プレス工業㈱営業部主任　阿　川　信　次

大木君おじいさんが危ないとのことで栃木に帰ることになつて

「これから挽回しようと思つてゐたのに残念です」と友は語り給ひぬ

班員の数少なきをなほ一人友去りゆくはさみしかりけり

（二回目の作品）

もやかかる七沢の地に風吹きて厚木市の旗風にはためく

福岡県立須恵高校教諭　那　須　三　元

坂東先輩の合宿導入講義を聞きて

酒をめでし人々の歌我が歌のごとく語らるる聞くも楽しき

美味酒を酒を愛づる人に勧むるは楽しからずやと励み給ひしを

子の数は誰にも負けずと誇らかに己が子のこと語りたまふも
学生の時に学びし生き方を貫き生きます姿うつつに
（二回目の作品）

「合宿教室」の開催地が初めて関東に移りて

名前のみ知りつる人と初めての七沢の地で会ひて嬉しも

厚木市役所秘書部広報課主任　矢　野　正　男

開会式にて

情熱を込めて勤めし七沢にて合宿教室今開かるる
長年の願ひかなひし喜びを感無量なりと市長は語りぬ
（二回目の作品）

「全体感想自由発表」を聞きて

ありがたうございましたとくりかへす女子学生のことばうれしも
おのおのに課題をいただきてこれからを学ばむとする決意たのもし
己が道迷ふことなしと胸をはり感想のべゆく学生たのもし
合宿をたのみと来たる参加者の力とならん我らが道統

㈱日立製作所エネルギー研究所　松　井　哲　也

登校拒否症の生徒

「もう私の力及ばず」と母君は泣きくづれ給ひ語られしといふ
御心の限り尽くせる言の葉に病める心の開かれゆくか
（二回目の作品）

防大生（第十班、新田洋君）の発言を聞きて（「全体感想自由発表」にて）

「なだしお」の事件のをりに世の人のそしり受けしこと語り給へり
国のため務め果さむ思ひあれど心みだるる日々過ごせしか
合宿を終へてぞいまはその心定まりしと言へり決然として
合宿に集ひし人々守るため務め果さむと語る君はも

福岡市立奈多小学校教諭　是　松　秀　文

素晴らしき講義になれよと心から先輩の講義の成功祈る
壇上に立たれし先輩の声ふるへ吾の胸内に伝はりてくる
（二回目の作品）

長内先生の御講話を拝聴して

今の世の乱れはひたに人心の乱れをうつすとふ大人の怒りよ
自らの心豊かに美しく持たまほしとの思ひつのりく

桐　山　澄　子

（二回目の作品）

班友と声を合はせて朗誦す太子憲法の意味をたづねて

日本青年協議会研修局　佐　瀬　竜　哉

七沢自然公園にて

やはらかな日の光りうけさやさやと風にゆらるる木々の緑葉
みわたせば緑しるけき山々の重りて見ゆるすがたうましも
頂は雲のかかりてかすみ見ゆひときは高き大山のみね
（二回目の作品）

廣瀬誠先生の御講話をお聞きして

古事記語らるる師の君のみ声に思はずひきよせらるる
師の君の語りし言葉に先人のうましこころを見るここちして
身を捨ててわたの底へと沈まれし橘比売の心かなしも
桜なる木ノ花比売と橘比売うるはしからむ二人の比売はも
日の本の美しきこころは二本の桜橘にあらは

れにけり
二本(たもと)の木にこめられし日の本の美しきこころを吾もつぎなむ

早稲田大学政経四　鵜野　光博

壇上ゆ「おはやうございます」とふ大人の声聞けばすがしき心地するかな
（二回目の作品）

最終日の「朝の集ひ」の広場から山を見て

朝もやに遠き山なみうす墨を散らせしがごとおぼろげに見ゆ

日本青年協議会　清水　久仁子

ハンカチ落しの折に

日だまりに友らの笑顔かがやきて今にも転ばむはしやぎまはりて
（二回目の作品）
後輩らと過せし日々のいとほしくみじかく感ずる合宿の日々

ヤマハ音楽教室講師　橋本　加枝

食すすまぬ我を気づかふ班員のやさしき心有難きかな
（二回目の作品）

小田村寅二郎先生のお話をききて

国のため命を尽せし人はみな神となりけりわが日の本は

あとがき

秋も日毎に深まってまゐりました。皆さんその後いかがお過しでせうか。緑濃き厚木の七沢の森で共に学び合った「合宿教室」から早や三ヵ月が過ぎやうとしてをりますが、やうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来ることになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に〝走り書き〟して戴いた感想文と和歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・和歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使ひ、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心を打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

㈠「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤まりについては訂正してをります。

㈡「和歌」について

合宿では二回にわたって和歌をつくりましたが、第一回のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊の巻末の「和歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第二回目の和歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班付および社会人班の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました磯貝保博、藤井貢、大日方学、上村栄章、吉川理夫、八木秀次、金子光彦、木村彰男、阿川信次、竹内孝彦、等の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成に御協力いただいた国民文化研究会会員の諸氏、および第一回目の和歌の編集にご尽力いただいた小柳志乃夫さんに厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の佐藤道明さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった感想文集を、ご精読下さるやう切願してやみません。

「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦って来る事と思ひます、三ヵ月前に厚木で得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、合宿教室で得た真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈ってをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長又は班付の方々に一筆御礼状を差し上げていただきたくお願ひ致します。

（山根　清記）

〔資料〕
第三十六回〝合宿教室（厚木）〟感想文集
非売品
平成三年十一月八日発行
編集兼発行者
東京都中央区銀座七―一〇―一八　柳瀬ビル
電話　〇三―三五七二―一五二六（代）
FAX　〇三―三五七二―一五二七
社団法人　国民文化研究会
理事長　小田村寅二郎
編集委員　山根　清・上村　栄章
大日方　学・吉川　理夫
八木　秀次・小柳志乃夫